

平成 27 年度 東北福祉大学 子ども支援プロジェクト

| 活 | 動 | 報 | 告 | 書 |

ガールズバンド「プリンセス プリンセス」からの
被災地復興支援寄付金に基づく活動



東北福祉大学
TOHOKU FUKUSHI UNIVERSITY

東北福祉大学
子ども支援プロジェクト

ごあいさつ

この報告書は、女性ボーカルバンド「プリンセスプリンセス」様からの被災地復興支援の寄付金を基に立ち上げた「子ども支援プロジェクト」の 2015 年度の活動をまとめたものです。このプロジェクトは、東日本大震災で大きな被害を受けた地域には 5 年が経過した今も学力の低下や不登校気味になっている子どもたちがいるという現実を踏まえた子どもたちへの支援とそうした支援を継続的に行うための人材育成（学生の将来を見据えたスキルアップ）という二本の柱で活動を進めていくという基本方針で進められています。初年度（2014 年度）は、ご寄付をいただいたプリンセスプリンセス様のお気持ちをどう生かしていくか、試行錯誤を繰り返しながら進めていったというのが実情です。今年度は昨年度実施した七ヶ浜（宮城県七ヶ浜町）、野々島（宮城県塩竈市）の各フィールドに加えて、仙台市若林区荒井地区でもさまざまな活動を実施しました。七ヶ浜では地元の教育委員会、NPO 団体等と連携・協力を図りながらサマースクールの開催、学習の補助的指導やものづくり教室・表現活動などの体感型学習を引き続き実施しました。また野々島ではラベンダー畑づくりや新たに購入したカヌーを利用したアクティビティなどの自然環境教育プログラムによる体験型学習も提供しました。さらに学生企画による取り組みも参加団体が増えて、活動の場も拡がり（仙台市荒井東地区、女川町ほか）を見せています。

昨年の反省を踏まえて改善を加え、早めに準備に取り

掛かることを心掛けてきましたが、まだ不十分な点もありました。それでも皆様のご理解とご協力の下で少しずつ前に進み、ここまでたどり着くことができました。私たちのエネルギーは、地域の子どもの笑顔です。また、保護者の皆様からもいろいろな声が寄せられ、私たちの励みとなっています。そして周りからの期待も少しずつ高まり、仙台市ボランティアセンター・仙台市社会福祉協議会が主催したシンポジウム「ボランティアフォーラム～今求められる子ども支援とは～」への参加（この活動の紹介の依頼を受けて）やマスコミのインタビューなどを通して、評価していただいている感触を得ることもできました。少しでも子どもたちや地域の皆様の元気を取り戻すお手伝いが出来たならば、私たちの喜びとするところです。3 年目を迎える次年度に向けて取り組むべき課題も明らかとなりつつあり、一層の努力をしようと思いを新たにしています。

このプロジェクト立ち上げの基になりましたプリンセスプリンセスの皆様、七ヶ浜町教育委員会教育長様をはじめ教育委員会の皆様及び各学校の関係者様、塩釜市教育委員会教育長様および教育委員会の皆様、NPO 法人野々島自然塾の皆様、情報のあんこの皆様、一般社団法人荒井タウンマネジメント様、他多くの皆様からご支援・ご協力をいただきました。ここに皆様への感謝の気持ちを表すとともに、今後ともご指導・ご支援を賜りますようお願いいたします。

東北福祉大学
子ども支援プロジェクト推進委員会
委員長 星山 幸男

もくじ

活動写真	5
------	---

第1章 プロジェクト概要

Ⅰ 子ども支援プロジェクト実施計画概要	13
Ⅱ 子ども支援プロジェクト推進委員会	15

第2章 プロジェクト実施内容

Ⅰ セケ浜での活動	
セケ浜町での活動	23
サマースクール	24
サマーフェスティバル	26
サマーフェスティバルに参加しての成果と課題	34
セケ浜町でのその他の支援	36
Ⅱ 野々島プロジェクト	
野々島プロジェクト	39
Ⅰ. 野々島プロジェクト 事前準備 活動報告	40
Ⅱ. 自然体験活動「島であそべんちゃー IN 野々島」	47
Ⅲ. 自然体験活動「野々島ラベンダー収穫祭」 活動報告	56
Ⅳ. 「ラベンダー収穫祭」係別の事後活動報告	60
Ⅴ. 野々島プロジェクト 大学祭（国見祭）での活動報告	65
Ⅵ. 「島であそべんちゃー IN 野々島」参加者へのアンケート調査結果報告	71
Ⅲ 学生企画事業	
学生企画事業	83
Ⅰ. ことばの貯金箱 活動報告	84
Ⅱ. ASOBO 活動報告	92
Ⅲ. あそびの森ワークショップ 活動報告	100
Ⅳ. ジャグリングって何だろう？ 活動報告	108
Ⅴ. 学習支援、ミニ運動会、七郷市民祭りの支援 活動報告	113
Ⅵ. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 活動報告	128
Ⅳ. その他の事業	
七郷中学校「防災マップづくり」支援活動	139
荒井東復興街びらきイベント「あらフェス」に参加して	140

第3章 総括

セケ浜町の取り組みから	石原直	145
セケ浜町での「サマースクール」「サマーフェスティバル」を振り返って		
	セケ浜町立汐見小学校 校長 佐々木 裕美	146
野々島の取り組みを通して	金政信	147
野々島の取り組みを通して	菊地淳	148
野々島の取り組みを通して	山口政人	149
学生企画の取り組みを通して	萩野寛雄	150
次年度の活動について	星山幸男	151
協力団体・協力者一覧（敬称略、順不同）		152
平成27年度参加学生一覧		153

資料

平成26～27年度子ども支援プロジェクト決算と平成28年度子ども支援プロジェクト予算	157
東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金規程	158

七ヶ浜での活動



お兄さん、お姉さんがやさしく教えます



一人ひとりに丁寧に



難しいのはどこかな？



ここは、こうやって…



みんなで一緒に！



できてるかな？後ろから、そおと



足し算、引き算は、カードを使って楽しく！



このコーナーは何のお勉強かな？



バナナで釘が打てるなんて！液体窒素って凄い！！



顕微鏡でエノコログサ見えるかな？皆も大きい画面で見てね。



一緒に真剣に！最後は楽しくね！



頑張って水ヨーヨー取ってね。



ステージのお兄さんお姉さんと一緒に妖怪体操しよう！



水風船と空気砲で楽しんでもらおう！



トリックジグってなーんだ？

野々島での活動



ようこそ野々島へ！島民の方からのごあいさつ



本当にこっちで合っているのかな？？



野々島クイズ。全員正解だ～！！すごい！！



初めての「おにぎらず」



はちまきつけて、準備OK！！



古道探検中



足もと気をつけてね～



みんなで食べるカレーとおにぎらずはうまい！！



すご〜い！！お兄ちゃんありがとう！！



ランニングマン♪



これから帰るのさみしいな…



ラベンダー収穫祭、大成功！！



こうやってラベンダーを摘むんだよ



ラベンダーのいいかおり



ラベンダー収穫祭のラベンダーで、ポプリ作り

学生企画事業 その他の事業



お兄さん。お姉さんの凄技に子ども達も大興奮



自分達でもやってみました。むつかしー



ダイナミック琉球をみんなで一所懸命練習しました



園児とシニアと学生と、皆で気持ちを合わせます



女川健康祭りでは、見事な踊りを披露してくれました



季節カードを用いた「英語で季節を学ぼう」のーコマ



ハロウィンパーティーを通じて英語に親しみました



お兄さん・お姉さんと作ったアルバムは、いい思い出



「あそびの森の動物園を作ろう」の説明風景



マラカスや手ぶくろを見て、アイデアを膨らませました



「なりきり仮面」制作風景。どんなのを作ろうかなあ



「ことばの貯金箱の活動」の説明を熱心に聞く子ども達



「言葉の貯金箱」の作品 テーマ“くりのすけの頭の中”



ミニ運動会で「妖怪第一体操」を踊る様子



巨大ダルマ落としに挑戦する子ども達

第1章

プロジェクト概要

I 子ども支援プロジェクト実施計画概要

1. 趣旨

ガールズバンドである「プリンセス・プリンセス」のプリプリ被災地復興支援寄付金（学内に基金を設置）を基に、東北福祉大学では「子ども支援プロジェクト推進委員会」（以下委員会）を立ち上げ、東北の豊かな自然や、地域の様々な資源を活用して、地域を理解し活かせる人材を育てるとともに、被災した地域の子どもたちや配慮が必要な子どもたちの支援を、平成 26 年度から実施しております。

委員会での審議、指導、運営管理のもと、初年度である平成 26 年度は、「七ヶ浜での活動」（宮城郡七ヶ浜町）「野々島プロジェクト」（塩竈市浦戸諸島野々島）「学生企画事業」の 3 つのプロジェクトを実施しました。今年（27 年）度からは活動の幅を広げ、新たに「七郷、荒井東地区」（仙台市）や女川町においても、子ども支援が始まりました。

2. 七ヶ浜での活動

「七ヶ浜での活動」は、大学の特性を生かしたサマースクール（学習会やもの作り教室など）やイベント（表現活動）などの取り組みを、教職員と学生が一体となって行うことを通して、地域の子どもたちに元気とやる気を取り戻す場を提供しています。

昨年は、七ヶ浜町の汐見小学校、松ヶ浜小学校、赤染小学校でサマースクールの開催し、多くの児童に参加していただきました。本学から延べ 100 名を超える学生が、学習指導、理科実験の実演、絵画の創作指導などを行いました。また、秋季には、七ヶ浜国際村を会場に、七ヶ浜芸術祭を開催し、七ヶ浜の児童や保護者にご参加いただきました。

今年も七ヶ浜町内の 3 つの小中学校で、8 月 17 日から 19 日までの 3 日間サマースクール（延べ 240 名の学生が参加）、8 月 21 日には汐見小学校を会場にサマーフェスティバルを開催しました。

3. 野々島プロジェクト

「野々島プロジェクト」は、豊かな環境の中で自然の素晴らしさを直接感じられる体験や環境づくりの基礎を学

ぶなどの取り組みを、塩竈市内の小学生、支援や配慮が必要な子どもたちを対象に、教職員と学生が一体となっていくことを通して、子どもたちに自信と勇気を取り戻す場を提供しています。

塩竈市浦戸諸島の野々島において、自然体験型学習（島であそべんちゃー IN 野々島）を開催し、塩竈の児童に参加していただき、思い出に残る楽しい一日を過ごしていただきました。

野々島では、ラベンダーの収穫祭を開催し、シーカヌーの試乗など、新しい取り組みにもチャレンジしています。

4. 学生企画事業

「学生企画事業」は、本プロジェクトの趣旨に沿った企画を学生自ら立案し、自分たちで実施する「学生企画事業」は、学内公募によって選ばれたサークル、ゼミなどによって事業を実施しています。

世代的に子どもたちに目線が近く、また日頃のボランティア等で子どもと接することの多い学生の多様なアイデアを活用し、子ども支援を実践しています。

昨年は、七ヶ浜町の児童を対象に、ポップ♪ステップ♪ランニング（陸上競技部）、ことばの貯金箱（NIE 活動）（三浦ゼミ）、リズムで英語（ファングループ）、目指せてっぺん！！冬の運動会（ふぁみりあ）、なりきりわくわくワークショップ（森ゼミ）を開催し、各回とも少人数の定員で募集し、安全に楽しいイベントを開催することができました。

今年も、荒井地区にも活動範囲を広げ、ASOBOin 荒井東（ファングループ）、あそびの森ワークショップ（森ゼミ）、学習支援と運動会（ステーションキャンパスクラブ）が、地域の児童を対象に活動しています。また、七ヶ浜での活動には、ジャグリングって何だろう（ジャグリコ）を加わえて継続し、新規に女川町の児童と高齢者を対象に琉球舞踊（ダイナミック琉球）の支援活動も行っています。

5. その他の活動

七郷中学校では、平成 24 年から総合的学習の時間を活用して、「防災マップづくり」に取り組んでいます。生

徒たちの力を結集した防災マップが作られ、年々その完成度が高まっています。4年目となった今年から、東北福祉大学もこの活動を支援させていただくことになりました。マップづくりに福祉の視点も入れようというねらいです。本学では、七郷中の先生方と相談しながら、「子ども支援プロジェクト」の一環として実施しています。学内の防災士研修室と連携して、学生の力も生かし進めています。

いずれの活動も、子どもたちを対象とした体験型学習を学生主体で展開することによって、その経験を卒業後の学校現場や社会生活の場面で生かすことができる力量を身に付けた学生を育てることを目指します。また、学生企画事業においては自分たちの活動が選ばれることで自己肯定感を高め、学生のやる気と主体性を促進させるとともに実践力アップが期待できます。

文責：東北福祉大学子ども支援プロジェクト推進委員会
副委員長 金 政信

II 子ども支援プロジェクト推進委員会

1. 子ども支援プロジェクト推進委員会規定

(設置及び目的)

第 1 条 東北福祉大学(以下「本学」という。)では、被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」を本学学生に提供するにあたり、その実行性・効率性を高めるため、本学に子ども支援プロジェクト推進委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(理念)

第 2 条 委員会は「学生自身が地域の目線軸子どもの目線で考えることの重要性を理解し、さらに連携する地域がその実践方法を学ぶ場であること」を前提に運営されなければならない。

(体制)

第 3 条 本学内の様々な部署や教職員との連携・協力はもとより、目的達成のために必要とみられる、当該市町村や教育機関、企業、NPO 団体等との連携・協力体制を築く。

(構成員)

第 4 条 委員会は、次に掲げる教職員ならびに学外の委員をもって構成する。

- (1) 学長が委嘱する本学及び関連法人の教職員
- (2) 学長が委嘱する当該市町村や教育機関、企業、NPO 団体等

2 その他必要あるときは、別に関係者を出席させることができる。

(任期)

第 5 条 前条第 1 項第 1 号に掲げる委員の任期は、2 年とする。ただし、再任を妨げない。

(委員長及び副委員長)

第 6 条 委員会に委員長及び副委員長を置き、委員長及び副委員長は、委員の互選により選出する。

- 2 委員長は、委員会を統括し、委員会の議長となる。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故等があるときは、その職務を代行する。

(委嘱)

第 7 条 第 6 条第 1 項により選出された委員長及び副委員長は、学長が委嘱する。

2 第 4 条第 1 項第 2 号に掲げる委員は、学長が委嘱する。

(所掌事項)

第 8 条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に関する事項
- (2) 被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に関する事業計画、予算等に関する事項
- (3) 被災した子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に対しての学外からの寄付等による教育活動支援金の運用に関する事項
- (4) その他、子どもたちに対する「支援活動」と、地域の課題解決に即した「人材育成プラン」に関し、必要と認められる事項

(開催等)

第 9 条 委員会は、委員長が必要に応じ招集する。

2 委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

(事務)

第 10 条 委員会の事務は、社会貢献・地域連携センター内に置く。

(補則)

第 11 条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附則

この規程は、平成 26 年 5 月 1 日から施行する。

2. 子ども支援プロジェクト推進委員会開催記録

第1回推進委員会

日時：平成27年4月22日（水） 15：30～16：30

場所：東北福祉大学 国見キャンパス

管理棟3階 第3会議室

（仙台市青葉区国見一丁目8番地1号）

内容：

1. 学外委員の変更について
2. 平成26年度報告書について
3. 各プロジェクトの27年度計画
 - 1) 七ヶ浜での活動
 - 2) 野々島プロジェクト
 - 3) 学生企画事業各プロジェクト担当者は当日簡潔にご説明を御願
いいたします。
4. その他

第2回推進委員会

日時：平成27年7月27日（月） 15：00より

場所：東北福祉大学 国見キャンパス

管理棟4階 中会議室

（仙台市青葉区国見一丁目8番地1号）

内容：

1. 平成27年度事業進捗状況報告について
 - 1) 野々島プロジェクト
 - 2) 七ヶ浜サマースクール
 - 3) 学生企画事業
 - 4) その他の事業
2. その他

第3回推進委員会

日時：平成28年1月27日（水） 13：30より

場所：東北福祉大学 国見キャンパス

管理棟4階 中会議室

（仙台市青葉区国見一丁目8番地1号）

内容：

1. 平成27年度事業進捗状況報告について
 - 1) 野々島プロジェクト
 - 2) 七ヶ浜サマースクール
 - 3) 学生企画事業
 - 4) その他の事業
2. 平成27年度事業報告書作成について
3. その他

第4回推進委員会

日時：平成28年3月22日（火） 15：30より

場所：東北福祉大学 国見キャンパス

管理棟4階 中会議室

（仙台市青葉区国見一丁目8番地1号）

内容：

1. 平成27年度事業報告書について
2. 平成28年度事業計画について
3. その他

3. 名簿（敬称略、順不同）

◎星 山 幸 男	委嘱
○金 政 信	委嘱
小石川 秀 一	委嘱
石 原 直	委嘱
萩 野 寛 雄	委嘱
白 井 秀 明	委嘱
佐 藤 伊知子	委嘱
青 木 一 則	委嘱
辻 誠 一	委嘱

◎：委員長、○：副委員長

外部委員：

渡 辺 とき子	七ヶ浜町 教育委員会	教育総務課長	委嘱
菊 地 淳	情報のあんこ	代表	委嘱

第2章

プロジェクト実施内容

Ⅰ．七ヶ浜での活動

七ヶ浜町での活動

目的

東北福祉大学（以下本学）は、これまで蓄積してきた教育に関する研究成果の蓄積や福祉に関する取り組みなどをベースとし、サマースクールやサマーフェスティバルなどの取り組みを、教職員と学生が一体となっていくことを通じて、被災地でもある七ヶ浜町に対して地域貢献を進めていく。今年度で2年目となるこれらの活動は、子どもたちの学習支援や学習意欲の向上のみならず、学生が自ら企画し、実施するという学生主体の取り組みは、本学の建学理念である『行学一如』を体現するものであり、これからの学生生活のみならず、将来の進路や社会生活に必ずや生きて働くものとなると確信するものである。

今、社会人として求められている「コミュニケーション能力」や「課題解決能力」は、本学の学生にとっても同様であり、七ヶ浜町での経験はその点においても貴重な学修の場でもある。今後さらに継続していくことで学生の学びを深めていきたい。



実施計画

期間	項目			
6月上旬	事前準備<1>	サマースクール サマーフェスティバル	夏取り組む学生の募集 各チームの構成 リーダーの選出	説明会 打ち合わせ 2回
7月初旬	事前準備<2>	サマースクール	内容の確認	リーダー会議 コーナー責任者会議 会場校との 打ち合わせ ユニパで配信
		サマーフェスティバル	各コーナーの内容の検討 出店ゼミごとの費用物品というの確認、準備	
7月下旬	打ち合わせ	サマースクール	日程の提示と確認	ゼミごと確認 延べ270名の学生と 延べ15名の教員が が参加
		サマーフェスティバル	各コーナーの準備状況の確認	
8月17日 ～19日	サマースクール	サマースクール	汐見小学校、亦楽小学校、松ヶ浜小学校、向洋中学校、七ヶ浜中学校にて実施。午前10時～12時まで各校ごとに学習支援を行う。	130名あまりの学生と 8名の教員が参加
8月21日	サマーフェスティバル	サマーフェスティバル	汐見小学校体育館で、楽器演奏、物作り、実験などのコーナーで実施。	学生教員合わせて56名参加
2月	報告会	サマースクール サマーフェスティバル	成果と課題について、報告会を実施。	

サマースクール

はじめに

東日本大震災からまもなく5年を迎えようとしていますが、被災地以外では、震災の記憶が薄れてきていることは否めません。あれほど多かったボランティアは数を減らし、被災地以外の人たちには、もとの日常の暮らしが戻ったと思われているのかもしれませんが、しかし、未だに行方不明者は2563人(28年1月8日現在)、仮設住宅で暮らしている被災者は宮城県内だけでも2万5千人を超えています。

東北福祉大学(以下本学)は、東日本大震災直後から石巻市や南三陸町など、多くの被災地で様々な支援活動を行ってきました。その活動の中で、本学の特色を生かし、子どもたちに対してどんなことができるだろうと考え、昨年度から宮城郡七ヶ浜町での教育に関わる支援の取り組みを始めました。

今年度は昨年度の反省を生かし、昨年度小学校3校だけだったサマースクールに中学校2校を加え、七ヶ浜町の小・中学校全校で行うこととしました。また、昨年度七ヶ浜国際村で行った子ども向けイベント(七ヶ浜芸術祭)は、子どもたちが参加しやすいようにと考え、サマースクールと続けて汐見小学校の体育館で行うこととしました。



小学校での取り組み

8月17日、18日、19日の3日間にわたり、七ヶ浜町立汐見小学校、亦楽小学校、松ヶ浜小学校の3校でサマースクールを行いました。

午前10時から12時までの時間をつかい、各小学校ご

との人数に応じてクラス分けをし、夏休みの課題やプリント課題などの支援を行いました。本学の学生は1年生から3年生までが参加し、各日1年生から3年生90名ほどの学生が子どもたちの学習支援にあたりました。

【学生の感想から】

担当した学年が2学年であったため、休憩時間に1年生と合同で体育館でリフレッシュして、また勉強するという流れを取ったことにより、メリハリを付けて学習することができた。(汐見小学校担当 2年学生)

初日は流れが分からず少し戸惑うところもあったけれど、同じクラス担当の人と分担して活動することができたので良かった。毎日担当の学年が違ったので名前を覚えることはできなかったけれど、学年に合わせて児童に接することができたので良かったと思う。

(亦楽小学校担当 2年学生)

3日間、2年生を担当し、児童の分からないところを教え、疑問点が改善したようだったので良かった。自分の改善点としては、マル付けに時間がかかってしまい、分からなくてプリントを進めることができない児童全員を見に行くことができなかった。はじめて子どもたちに教えるという経験ができた貴重な時間だった。

(亦楽小学校担当 2年学生)

どうすれば子どもが一番分かりやすく教えることができるか実践のなかで考えることができる貴重な機会に参加できて良かった。

(亦楽小学校担当 2年学生)

私は1年生の学習支援を行った。子どもたちは、夏休みの宿題の残りに取り組んでいた。1クラス10名ほどの子どもに対して、私たち学生が2名だったので、十分足りていたと思った。何か、勉強に関するゲームなどを用意した方がもっと良かったかなと思った。

(松ヶ浜小学校担当 3年学生)

3年生の教室に行きました。ほとんどの子どもたちが夏休みの宿題の残りをやっていて、算数、作文、漢字、理科など幅広く教えることができました。まだまだ経験も少なく、力不足だなあと感じるが多かったです。

(松ヶ浜小学校担当 1年学生)



中学校での取り組み

今年度は、8月17日、18日、19日の3日間にわたり、七ヶ浜町立七ヶ浜中学校、向洋中学校の2校で学習支援も行いました。

午前10時から12時まで、学年に応じた学習課題の支援を行いました。中学校1、2年生は、夏休みの課題や自分な苦手なところを中心に取組んだものに支援をしました。また、3年生は高校受験に向けた学習課題に取り組んでおり、それに対する支学習援を行いました。

【学生の感想から】

数学や理科、英語を中心に生徒とともに問題に取り組み学んだ。どうしたらわかりやすく理解できるかを常に考え行動した。改善点としては、座学の学びだけではなく、部活動の指導も一緒に指導できると良いのだと思う。

(七ヶ浜中学校担当 1年学生)

教育学部の学生が多く、自分の学科から参加した学生が少なかったため、いろいろな学科の学生が参加できるような声かけなどが必要だと思った。

(七ヶ浜中学校担当 1年学生)

中学生に勉強を教えたり、接する機会はあまりないので、良い経験になりました。子どもたちと関わるのは楽しかったです。しかし、うまく教えることができなかったため、解き方などわかりやすく教えられるようになりたいと思いました。

(向洋中学校担当 1年学生)

サマースクールを終えて

【学生が感じた成果と課題から】

【課題】

- ・参加学生の出欠管理が十分ではなかった。
- ・児童・生徒にとって分かりやすい支援ができなかった。
- ・児童によって進み方が違うため、1つの教科しか学習できなかった児童がいた。

【成果】

- ・小学生や中学生と関わる良い機会だった。
- ・実際に学習指導をして、個に応じた声かけや伝わりやすい指導の仕方などを考えることの大変さを実感した。
- ・自分の知識不足を痛感し、自分の課題が発見できた。など

サマースクールに対する各学校や教育委員会からの聞き取り(詳細は別項)では、夏休み終了間際に行ったことで、生活や学習リズムを戻すきっかけとなり、夏休み明けのスムーズな登校に繋がるとの良い評価をいただきました。また、中学校からは、年の近い学生に教えてもらうことで意欲が高まったという評価もいただきました。昨年に引き続き、子どもたちに対する学生の対応はともよく、安心して任せられるという評価もいただきました。

本学にとって、将来教職を目指す学生が学校現場で子どもたちを指導・支援する機会であり、学生一人ひとりが自分の課題を明確にする良い機会であったと思います。何より子どもたちの「分かった、できた」ときのうれしそうなお顔や表情は、学生にとって新たな学びのエネルギーであり、教職のすばらしさを実感するものと思います。

今回の成果や課題をふまえ、さらに充実したものにしていきたいと考えます。

サマーフェスティバル

はじめに

昨年度七ヶ浜芸術祭として実施した子ども向けフェスティバルを8月21日に汐見小学校体育館で行いました。昨年度は七ヶ浜国際村で行いましたが、場所が離れていることから子どもたちが参加しにくかったという点や、時期などの反省をふまえたものです。

本学の学生は、1年生から4年生までの129名が参加し、液体窒素の実験やキャンドルづくり、ステージでの演奏や読み聞かせなど、工夫を凝らした17ブースを出店し、来場した150名ほどの子どもたちと楽しい時を過ごすことができました。

【各ブースの取り組みから】

妖怪体操 上條ゼミ

今年度のサマーフェスティバルにて、上條ゼミは2・3年生合同で妖怪体操を踊ることに決まった。妖怪体操とは、アニメ・妖怪ウォッチのエンディングテーマである。その独特のダンスや愉快的歌詞が人気を呼び、妖怪ウォッチブームの火付け役となった。一口に妖怪体操と言っても、その種類は妖怪体操第一と妖怪体操第二の2つがある。妖怪体操第一は既に多くの子どもが踊れるのではないかと、という心配から今回は比較的地名度の低い妖怪体操第二を選曲した。

妖怪体操を考えるにあたり最も苦労したのは、踊りの



解説方法である。対象が1年生から6年生までと幅広く、言葉選びには非常に骨を折った。しかし教え方について悩み、話し合うなかで子どもに完璧に教えるのではなく

一緒に体を動かす面白さを知ってもらうという事が重要であると気づき、覚えやすい以前に子どもが動きやすい体操をするという方向性も定まった。

当日、本来であれば11時30分からステージで発表の予定が大幅に変更になり、他のブースが準備を進めるなか一度通して踊った後、急遽10時からの発表になった。予想よりも多くの子どもたちが会場に入ってくると、彼らがあまり乗り気でない事に戸惑った。「恥ずかしい」「やりたくない。」等々の声が様々なところから聞こえ、ステージ前に出てきてくれたのは10人程度しかいなかった。ボランティアの学生の皆さんにも声かけなどの協力してもらい、踊り始めると何人かの子ども達がしぶしぶといったように体操に参加してくれるようになった。曲の最後の決めポーズではほとんどの子どもと一緒にポーズを取ってくれており非常に安心した。

無事ステージを終え本来の発表の時間を迎えてみると、子どもの多くが実験やもの作りのブースに夢中になっており、時間が早まり良かったと感じた。もしまたこうした活動の機会があれば、今回の反省を生かし、より分かりやすく、何よりもっと短い説明に留める事を忘れずにいたいと考える。

楽器演奏 渡会ゼミ

時間帯が昼食時に重なってしまったこともあり、どれくらい子どもたちが集まってくれるか不安がありましたが、全ブースが作業をストップし協力してくださったこともあり、昨年よりも多くの子どもたちに演奏を聴いてもらうことが出来たように思います。「ルパン三世」、「名探偵コナン」のテーマソングから始まり、「世界がひとつになるまで」、「ひまわりの約束」の合唱、「風になりたい」、「サザエさん」のテーマソングの合奏と、全部で6曲披露させて頂きましたが、学生の皆さんが積極的に盛り上げてくださって、とても楽しく演奏することが出来ました。また、途中「バナナダンス」というダンスを子どもたちと踊るコーナーを設けたのですが、子どもも学生もとても楽しそうに踊っていたのがとても印象的でした。後から「もっとバナナダンスを踊りたかった」という意見も耳にしましたので、来年は「体を動かしながら音楽を楽しむ」コーナーの時間をもっと取りたいなあ、と思いました。

発表終了後、ステージ上で楽器体験のコーナーを開いたのですが、ベースやキーボードといった目にするの多い楽器はもちろんのこと、ボンゴやコンガ、カホンなど少し珍しい楽器を使って思い思いに演奏している子どもたちは、とても生き生きとしているように見えました。

・楽器作り 渡会ゼミ

渡会ゼミでは「楽器作り」のブースを開きました。ヤクルトの容器を使った「ホーホー笛」、紙皿を使った「カスタネット」、「カチカチくん」という、牛乳パックを使ったカスタネット、空き缶を二つ使った「ボンゴ」の4種類の楽器の材料を用意し、当日にのぞみました。

予想以上に子どもたちがブースを訪れてくれて、順番待ちの列が出来てしまっていたので、その間何か楽しめる簡単な遊び等あったら良かったなあ、と感じました。また、もう一つの反省点としては、途中楽器の材料がなくなってしまい、子どもたちが作りたかった楽器ではないものを作ってもらうようになってしまったことがあげられます。約100人分ということで、楽器1種類につき25人分ずつ用意していたのですが、やはり子どもたちに人気の楽器とそうではない楽器に分かれてしまい、子どもの希望にそぐわない形になってしまったことが、仕方のないことではあるかもしれませんが、悔しかったです。これらのことは来年にしっかり生かそうと思います。

反省点もありましたが、ゼミ生との協力はもちろん、先生方にも沢山のアドバイスを頂き、素敵な時間を子どもたちと共有することが出来たのではないかと思います。

液体窒素大実験 小石川ゼミ

私たちは、液体窒素を使って花や風船、バナナなどを凍らせてる実験を行いました。なぜこの実験をしたかという、子どもたちに温度の変化によって物質がどのように変化するのかを「体感」させて、将来同じような分野を学習するときの糧をしてほしいことと、理科の面白さを「実感」してほしいと考えていたからです。

この実験をする上で注意したことは、危険を回避することでした。液体窒素は -196°C ですので、手で直接触れると非常に危ない物質です。子どもには十分な説明と手袋の着用を徹底しました。



実際に本番を迎えて実験をしましたが、子どもたちはとても興味深そうに最初は見ていました。しかし、時間を重ねるごとに他のものを液体窒素の中に入れたらどういう変化を起こすのだろうかという「興味」を持ち始め、「先生、これ入れてみていい？」や、「風船はなんで萎むの？」と聞いてきたりと、自分から積極的に参加するようになりました。また、私たち教える側にも変化がありました。最初は硬くなりがちで、所謂講義のような実験になっていましたが、子どもたちの興味を引き出すことにやりがいを感じ、子どもの興味に合わせて柔軟に実験の内容や順番を変化させるようになりました。

今回の実験教室から、私たちは理科教育の難しさややりがいを多く感じました。今回のように、事前に準備をする時間が多くあると、どのように授業を組み立てれば子どもの興味を引き出せるのかと考えることができましたが、実際に行ってみると思うようにいかない部分がありました。また、教員となって日々の授業に追われる中でしっかりと準備時間を取ることができるのか難しいのではないかと感じました。ただ、理科は他教科と比べて実験が多い科目で、それによって子どもたちを楽しませながら学んでもらう場を創造できると感じました。今回の実験で、帰っていく子どもの顔には充実感があつたように思います。その顔を思い出すと、本当にこの実験を行うことができ良かったと思います。

キャンドルづくり 石原ゼミ

私たちの班ではキャンドルづくりを行いました。具体的な内容としては、容器、ジェルキャンドル、カラーサ

ンド、様々なビーズ等を用意し、子供たちに好きなように砂やビーズ、貝殻を使って自分オリジナルのキャンドルを作ってもらおうというものでした。サマーフェスティバル当日は大盛況で子供たちに列を作って待ってもらうことになりました。子供たちのキャンドルを飾る様子を見てみると、みんな思い思いのビーズや砂を使ってとても楽しそうに制作していました。私たちが「上手にできたね。」「とってもいいね。」と声をかけると、非常に喜んだ様子で私たちに自分の作ったキャンドルを見せてくれました。前日までの準備段階では様々な不安や心配がありましたが、そのような子供たちの様子を見て、この企画をしてよかった、子供たちに喜んでもらえて本当に良かったと思いました。

反省点としては、子供たちの人数が正確に予想できなかったために起こってしまった材料不足です。一人一つまでとしたり、今回は子どもだけ、としたり制限をかけることになってしまいました。それでも材料は足りなくなってしまったために途中で買い出しに行き、なんとか



午後までもった、というような状況でした。そこで、もし来年もやらせてもらおうとしたら一人一つまでと制限をかけることなく、また、子どもだけでなくお母さんやお父さん、先生方にも作っていただけるように余裕をもって材料を用意したいです。また、夏休みということもあり、班のメンバー全員で集まることのできる日が非常に限られていたため、なかなか練習や打ち合わせの時間を取ることができませんでした。来年はぜひ、もっと早いうちから集まり、余裕を持った準備を心がけて、ぜひまたキャンドルづくりを実施したいと思いました。

Ooho ! (ダブルオーホー) 白井ゼミ

白井ゼミ3年は、平成27年8月21日に七ヶ浜子ども支援プロジェクトの一環として行われたサマーフェスティバル2015において、ものづくりのブースを出展した。今回出展したのは、インターネット等で「持てる水」として話題の「Ooho ! (ダブルオーホー)」である。乳酸カルシウム水溶液の中に、アルギン酸ナトリウムを溶かした少しとろみのある液体をおたまやスプーンで流し入れると、ぶよぶよとした感触の「持てる水」が完成するのである。聞きなれない材料ではあるが、乳酸カルシウムはケーキの膨張剤としても使われる食用の栄養剤で、アルギン酸ナトリウムは天然海草から得られる食物繊維の1つである。ゆえに、この「持てる水」は食べることが可能である。(フェスティバル当日は衛生上の問題もあり、「食べても体に害はないけど、みんなが手でぺたぺた触ってあまりきれいじゃないから食べないでね。」と子どもたちに声がけをした。) またこの「持てる水」は外側に弾力のある膜ができ、内側が水で満たされる構造になっ





ている。そのため、見た目はよく似ているがスライムとは違う構造なのだ。

私たちはこの持てる水「Ooho！（ダブルオーホー）」を、子どもたちが親しみやすいよう「ぷよぷよ水」という名前に変え活動を行った。

当日は大勢の子どもたちがブースに足を運び、ぷよぷよ水の不思議な感触を楽しんでくれた。透明な乳酸カルシウム水溶液に、同じく透明なアルギン酸ナトリウム水溶液を流し入れる。おたまを優しくゆすると、徐々に透明な物体が姿を現し、手のひらにそっと載せてみると壊れそうで壊れない「持てる水」が完成した。初めてこの実験を行う子どもたちがほとんどで、涼しげな見た目と不思議な感触に皆目を輝かせていた。

今回参加した白井ゼミの3年生の多くは、昨年度も七ヶ浜国際村で行われた子どもフェスティバルに参加していた。そのため、活動の中で子どもたちの実態に合わせながら作り方・支援のあり方を臨機応変に対応する場面が多く見られた。今回のぷよぷよ水も流し入れるアルギン酸ナトリウムが透明なままだと、低学年の子どもたちには固まったかどうか見極めるのが難しかったため、活動の途中から、持参していたカキ氷シロップでアルギン酸ナトリウム水溶液に赤や緑の色を着けて作成した。

色を着けてからは、低学年の子どもたちも「あ！固まってきた！」と実感を持って活動に取り組むことができた。また、完成したぷよぷよ水を持ち帰る際の袋も、お祭りの金魚すくいのような手作りの「縁日袋」を用意していたため、子どもたちは嬉しそうに袋を手首にかけ、何度も覗き込んでいた。反省点は、スライムとの違いを子ど

もたちに実感してもらうために、水溶液を作る段階から子どもたちにやらせれば良かったという点である。当日はスライムを作るブースも出展していたので、材料等を比較させながらぷよぷよ水の「膜を作る」「食べることができる」という特色を強調できれば良かった。

多くの子どもたちが、何度もブースに足を運び縁日袋を色とりどりのぷよぷよ水でいっぱいにしていった。今回のサマーフェスティバルが参加した子どもたち、学生、先生方全員にとって、ひと夏の忘れられない思い出になったことを願う。子どもたちの嬉しそうな表情や、学生が子どもと接するときの眼差しから、私たちも多くのことを学んだ一日となった。今回学んだことを大学に持ち帰り、後期の授業や実践の中でさらに研鑽を重ねていきたい。

読み聞かせ、葉作り 土生ゼミ

8月21日（金）に行われたTSEサマーフェスティバルで、私たちのゼミは読み聞かせと葉作りを行った。6月下旬頃から徐々に動き出し、まずは自分たちのゼミは何をするかという企画から始まった。私達のゼミらしいことをしたいということで、いろいろな案が出たが、その中で体育館という場所や何か子どもたちの手元に残るものが人気なのではないかと考え、読み聞かせと葉作りをすることに決まった。

準備は8月から開始した。時間がない中みんな協力して、買い出しや話し合いを進めることができた。読み聞かせは、子どもたちが興味を持ってくれそうな本や、夏らしい本をとということで大学の図書館で借りてきた。当日は、周りのブースではにぎやかなところが多く、集中して聞く読み聞かせに子どもたちは集まってくれるのか不安があった。そこで私たちは看板を持って歩き回り、子どもたちに呼びかけたり、拍子木を使って子どもたちの注目を集めたりして様々な工夫ができた。読み聞かせは物語に引き込むように読むのが難しかったが、聞いている子どもたちの目が輝いていて、読み聞かせをしている側も一緒に楽しむことができた。本離れが言われているが読み聞かせをきっかけにこれからは読書を大切にしたいと思った。

葉作りは、砂浜の砂を使い、見た目だけでなく、ぼこぼこした触感も楽しめるものになった。女の子も男の子



も思い思いの凧を作り、楽しんでいた。ラミネーターやクラフトパンチ、はさみを使ったため、子どもたちが怪我をしないよう気を付けることを心掛けた。作っている時、子どもたちとの距離も近く、どんな声かけをしようか、何を話そうかと迷ったこともあるが、一緒に楽しく作ることができた。

今回のサマーフェスティバルを通して、企画作り、予算見積もり、準備と一連の流れの中で、皆をどうまとめるか初めての経験で大変だったが、とてもためになる良い経験になったと思う。子どもたちにとって心に残る夏休みの思い出の一つになっていたらうれしい。私たちもこのような機会に携われてとても勉強になった。



紙皿フリスビー 青木ゼミ

■準備物

紙皿、ビニールテープ、カラーペン、ダンボール、ビニール紐、ガムテープ

■作り方

- ①紙皿の裏2枚にカラーペンで絵を描き、絵が見えるように向かい合わせて紙皿を合わせる
- ②合わせた紙皿の内側に2枚の紙皿を挟む。すなわち2枚と2枚の紙皿を合わせる（合計4枚）。
- ③紙皿の周りにビニールテープを2周巻く。

■当日の様子

会場には長机を2つ用意し、その上で紙皿に絵を描いたりテープを貼ったりできるようにした。さらに、妖怪ウォッチ的のをダンボールで作り、体育館の2階の柵から紐でつるしての的当て遊びができるようにした。フェスティバルが始まると、男の子を中心にブースに来てくれた。長時間、汗をかきながら的当てを楽しんでいる男の子もいた。女の子は的当てよりも作る方がメインで、紙皿に丁寧に絵を描いていた。紙皿を4枚にするときに、「4枚にするとうまく飛ばなくなるんだよ。」と声かけをしていたら、的当てでずっと楽しんでいた男の子たちが、「もっと紙皿を重ねたら、もっと飛ばかな？」と言い出した。その時点で紙皿はたくさん余っていたし、もっと飛ばようになることを知っていたため、重ねてみることを進めた。すると子どもたちの予想通り飛びやすくなり、子どもたちは皿の枚数によって飛び方が異なることに気づき、予想以上に長い時間を紙皿フリスビーで楽しんでくれた。





■反省点

ブースのスペースに限りがあったため、的に向かって投げたフリスビーが隣のブースの方に行ってしまうことがあった。今回は外が雨だったこともあり、どちらにしても体育館でしかできなかったが、晴れていたなら外でやった方が安全だし、子どもも思い切りフリスビーを投げることができ、さらに楽しむことができると思った。

ミクロの世界 小石川ゼミ

七ヶ浜サマーフェスティバルにおいて「ミクロの世界」として、顕微鏡による身近な動植物や石の観察という内容で参加した。

準備物

- ・ 双眼実体顕微鏡
- ・ モニター
- ・ 鉄乳鉢、鉄綿棒
- ・ ペトリ皿
- ・ 小石
- ・ 磁石

観察の内容は、大きく分けて2つあった。一つは、身近にいる動植物を拡大して観察するというものである。当初は、あらかじめ準備していた小さい甲虫やシロツメクサなどを観察の対象としていたが、児童が、校庭から持ってきた樅の葉やエノコログサなどを観察した。そこで、児童は次のような気づきをしていた。



児：「ねこじゃらし持ってきた！」

学：「そうか、じゃあ顕微鏡で見てみようか？」

児：「うん！ なんだか、つぶつぶがたくさんあって気持ち悪い。」

学：「そのつぶつぶなんだと思う？」

児：「種か何かだと思う。」

学：「そう！正解！他に何か見えるかな？」

児：「なんかね、毛みたいなのがたくさん見える、あっ！なんか麦に似てる！」

学：「いいことに気付いたね、ねこじゃらしは麦の仲間なんだよ。」

児：「へえ、だからつぶつぶがたくさんあるんだ。」

観察の中で、自分のこれまで得た経験や知識を生かし、エノコログサは麦の仲間であるという結論に達していた。

このほかには、石を砕いて、どんな石にも砂鉄が含まれるということを、磁石を使って確かめる実験を行った。今回の反省点は、より詳しい図鑑を持ってこなかったことである。ポケットサイズの植物図鑑は持参していたが、あまり詳しいものではなかった。図鑑が充実していれば、児童の学びもより深まったに違いない。

絵画教室 青木ゼミ

私たち4年青木ゼミは、『絵画教室』ということで、アクリル絵の具を使った「花火を描こう」、オイルパステルを使った「きれいな色を飾ろう」、あと「ボディペインティング」の3つのグループに分けて活動しました。

4年ということもあり、全員が集まって準備をするという時間が取れませんでした。何人かで集まり、それぞれのリーダーや先生を中心に準備を進めていました。先生の指導の下、実際に作品を作ってみて、使うものや手順を確認したり、「こうしたらこうなるね」、「こうやってみたら?」と対話を重ねて、どうやったら子どもたちが楽しく作品を作ることができるかを考えていました。また、どれだけ子どもたちが来てくれるかわからない中での準備でしたが、「たくさん来てくれたらいいな」という気持ちで、準備をしました。

いざ当日。自分たちのブースを準備している段階で、体育館には、子どもたちがたくさん集まってきていました。他のゼミのブースの準備を見て、工作やゲームのブースが多かったので、私たちの『絵画教室』という少しお堅いブースに子どもたちが来てくれるのかという不安が少しありました。子どもたちが自由にブースを見て回っているときに、私たちは、看板を見て興味を持ってきている子どもたちに声をかけたり、何をしようか迷っているような子に声をかけて、私たちのブースの楽しさを伝えるようにしていました。そうしているうちに私たちのブースにもたくさん子どもたちが来てくれました。3つのグループがあった中で、夏という季節にピッタリな花火や、子どもたちには珍しいボディペインティングが人気で、定員を超えてしまう時間もありましたが、その時は臨機応変に違うグループが助っ人に入ったりと、子どもたちを待たせることが無いようにできたと思います。それも準備の際に、みんなで実際に作品を作ってみたことで、それぞれの作品の情報を共有できていたからではないかと思います。また、去年も同じメンバーで参加させていただいていたので、それぞれが雰囲気を知っていて、指示がなくても自然に動いていたのではないかと思います。

子どもたちと関わっている中で、活動を進める難しさも感じていました。初めてやる子どもたちにどういう声掛けをしたらいいのか、次の作業に移るタイミングはい

つなのかなど、更に考えて深めていくべき課題も見えてきたと思います。

今回のサマーフェスティバルは、たくさんの団体が参加していて、団体ごとに楽しい活動を用意していたので、参加してくれた子どもたちはとても楽しめたのではないかと思います。私たちのブースに来てくれた子どもたちも、最後に「楽しかった」と言ってくれたり、できた作品を嬉しそうに持って帰ってくれたので、やってよかったなと思いました。そして、たくさん子どもたちと関わることができ、私たちも本当に楽しかったです。

ペットボトル空気砲 石原ゼミ

準備の段階で、大学構内のゴミ回収を行つている方に協力していただき約100個集めることが出来ました。ペットボトルに合うように、風船の切り方や種類等を工夫することで当日をスムーズに進めることが出来ました。当日の様子としては、子ども達と一緒に作っていたのですがはさみを使わせるかどうかといつたこと等をはつきりと決めていなかつたため多少時間がかかつたりしました。また、弾丸としてスポンジを用いたのですがペットボトルの口にちょうど合うように切つたり調節する所になかなか苦労しました。

水風船アート 石原ゼミ

構想の段階で、子ども達が最も興味を持つものとして水風船に決定したのですが完全なる見切り発車であつたため、準備に相当な苦労をしました。また、準備の際にも風船を布に当て割るということが予想以上に難しく、様々な手段を試して最も良い方法にたどり着くまでに相



当な時間がかかりました。その分、完全に割れる方法を見つけ出すことが出来ました。また、布に色を綺麗に出させるための工夫もしました。



この他にも「プロペラカー 小石川ゼミ」「トリックジグー 小石川ゼミ」「光るスライム 白井・青木ゼミ」「くるくるヘリコプター 駒野ゼミ」「射的 駒野ゼミ」「レジンワーク 千葉ゼミ」などのブースがあり、子どもたちが学生と一緒に楽しんでいます。

サマーフェスティバルを終えて

【学生が感じた成果と課題から】

【課題】

- ・実際に実施してみるとうまくできないことがあり、事前の実験等が必要だと感じた。
- ・体育館の壁など、当日初めての場所は事前の確認が必要だと感じた。
- ・特定のブースに偏ってしまい、最後までできない子どもがいた。スタンプラリーのようにすれば、良いのではないか。
- ・子どもの数が予想できず、材料が不足した。

【成果】

- ・子どもたちが楽しそうに活動している姿を見て達成感を感じた。
- ・学習指導ではみられない子どもたちの姿が見られて良かった。

昨年度の反省を受け、場所と時期を変更して行いました。150名ほどの児童が参加してくれたことは、学生にとってとても充実感を感じるものとなりました。また、学生自身が計画から関わり、自分たちですべて行った経験は、将来の教員としてだけでなく、様々な場面で生きて働くことになると思います。子どもたちを楽しませるだけでなく、計画や運営という視点からも力を付けていって欲しいと願います。

サマーフェスティバルに参加しての成果と課題

(千葉ゼミ)

私たち千葉ゼミは、レジンを使用してキーホルダー作成を行いました。活動内容の詳細は以下の通りです。子どもたちが自分の好きなシール等を型に入れ、レジン液を流し込み、紫外線で固めて完成です。私たちのブースは3名しかスタッフがいなかったため、一度に多くの子どもを見ることが出来ませんでした。またレジン液が素肌に触れないように注意をするのが難しかったです。ですが、たくさん子どもが来て、楽しそうにキーホルダーを作っている姿を見ることができて良かったです。内容的に、主に女の子が多く参加してくれました。次回は男の子も気軽に参加できるような活動内容にしたいと思います。

(白井ゼミ)

私たちのゼミでは、スライムを作って子ども達に楽しんでもらいました。好きな色の絵具を混ぜて作ることができ、スライムが完成すると手の上に出して遊んだりとても楽しそうでした。しかし、分量通りに混ぜても失敗してしまうことが多々あったので、入れるタイミングや入れ方などをもう少し工夫したほうが良いと思った。大勢の子ども達に対応できるように、人数を増やしても良かった。



(石原ゼミ)

準備や運営で不安な点が多かったが、多くの子どもたちがブースに来てくれ水ヨーヨー釣りを楽しんでくれたので良かった。釣り上げられた時や水ヨーヨーを渡す時などに積極的に子どもたちと会話をするようにし、笑顔

で楽しめるよう心がけて取り組みとても良い経験になった。

水ヨーヨーの数が足りず、午前と午後で個数を分けなくなった時点で終了という形をとった。その結果、個数が足りず釣れなかった子や釣りたい色のヨーヨーが無いなどの問題があった。

また、明確なルールがなく同じ子どもが何個も釣りに来る、好きな色の物に交換させるかどうか等困惑する点が多かった。

(小石川ゼミ)

私たちは、液体窒素を使って花や風船、バナナなどを凍らせてる実験を行いました。なぜこの実験をしたかという、子どもたちに温度の変化によって物質がどのように変化するかを「体感」させて、将来同じような分野を学習するときの糧をしてほしいことと、理科の面白さを「実感」してほしいと考えていたからです。

この実験をする上で注意したことは、危険を回避することでした。液体窒素は -196°C ですので、手で直接触れると非常に危ない物質です。子どもには十分な説明と手袋の着用を徹底しました。

実際に本番を迎えて実験をしましたが、子どもたちはとても興味深そうに最初は見ていました。しかし、時間を重ねるごとに他のものを液体窒素の中に入れてはどういう変化を起こすのだろうかという「興味」を持ち始め、「先生、これ入れてみていい？」や、「風船はなんで萎むの？」と聞いてきたりと、自分から積極的に参加するようになりました。また、私たち教える側にも変化がありました。最初は硬くなりがちで、所謂講義のような実験になっていましたが、子どもたちの興味を引き出すことにやりがいを感じ、子どもの興味に合わせて柔軟に実験の内容や順番を変化させるようになりました。

今回の実験教室から、私たちは理科教育の難しさややりがいを多く感じました。今回のように、事前に準備をする時間が多くあると、どのように授業を組み立てれば子どもの興味を引き出せるのかと考えることができましたが、実際に行ってみると思うようにいかない部分がありました。また、教員となって日々の授業に追われる中でしっかりと準備時間を取ることができるのか難しいのではないかと感じました。ただ、理科は他教科と

比べて実験が多い科目で、それによって子どもたちを楽しませながら学んでもらう場を創造できると感じました。今回の実験で、帰っていく子どもの顔には充実感があつたように思います。その顔を思い出すと、本当にこの実験を行うことができ良かったと思います。

(駒野ゼミ)

私たちのゼミでは折り紙でくるくるヘリコプターを作るブースを設置しました。しかし最初はなかなか子どもたちが来てくれませんでした。そのため、自分たちがくるくるヘリコプターで楽しく遊んでいる姿を見せると、それを見た子どもたちがどんどんやってくるではありませんか。たちまち私たちのブースはにぎやかとなり、私は作り方を教えることが楽しくなってきました。私は今回、子どもたちだけではなく教える側も楽しんでやらないといけないのだと学びました。



(青木ゼミ)

準備として、誰が投げてもしっかり飛ぶようなフリスビーを作るのに試行錯誤した。しかし当日は子どもの方が投げるのが上手く、きれいに飛ばせていた。また、予想以上に長い時間を紙皿フリスビーで楽しんでくれた。反省点は、ブースのスペースに限りがあったため、的に向かって投げたフリスビーが隣のブースの方に行ってしまうことがあり危険だった点である。子どもは思い切り投げたくなってしまいうため、広いスペースを確保すべきだったと思う。

(駒野ゼミ)

私たちは射的ゲームを通して子どもたちに楽しんでもらおうと考えた。準備期間から、ゼミ内でさまざまなルールを出し合って検討した甲斐もあって、当日はたくさん子どもたちが楽しんでいて、また、私たちも参加することによってみんなで楽しめるブースとなった。しかし、ルールばかり考えを集中し過ぎていて、子どもたちにあげる景品や得点を各記録表をよういしておらず、もっと楽しんでもらえるアイデアを出せなかったことが課題である。



七ヶ浜町でのその他の支援

1、夏祭り

8月8日に、「しちがはま町民夏祭り」が七ヶ浜町屋内運動場を中心に開かれました（主管：NPO 法人アクアゆめクラブ、七ヶ浜町教育委員会生涯学習課）。この企画には、本学の学生サークル「社会教育研究会・こっぺぱん」が参加して、祭りを盛り上げました。

学生2名がまつりの実行委員会の委員となり、準備会から参加しました。祭本番では、前日の準備と当日の活動に12名が活躍しています。一つのコーナーを任せられて、「手形アート」と「段ボール空気砲」を行っています。「手形アート」は子どもたちに夢を、「段ボール空気砲」は遊びながら科学への関心を引き出すことができる企画です。どちらも子どもたちの人気を集めて、多くの参加を得ました。出来上がった「手形アート」はとてもカラフルで、子どもたち自身も満足できる作品に仕上がっています。「段ボール空気砲」は、子どもも大人もつい夢中になってしまいました。そして学生たちも、子どもたちとの交流を通して、楽しみながらいろいろ気づくことがあったようです。

2、スポーツフェスタ in 七ヶ浜

10月11日にサッカースタジアムを会場に開かれた

「第9回七ヶ浜町スポーツフェスタ」（教育委員会主催）では、本学の陸上競技部が参加・支援を行っています。約2000人が集まったこのフェスタは、幼稚園児と小学生が中心で、特に小学生の参加が目立ちました。5つのブースが設けられて、それぞれでスポーツイベントが開催され、参加者は各ブースを回って体験したのちに、スタンプをもらって集めていくというスタイルを取っています。

本学陸上競技部の学生は33名参加、そのうち2名が準備段階から関わって、町の担当者と打ち合わせながら二つのブースを担当しました。一つは障害物競走、もう一つは体操（こちらのポーズを真似してもらって体を動かすという趣向）で、学生自身が企画・実施しています。障害物競走には、何度も並んで参加する子どもの姿もみられました。

学生たちは、会場設営も手伝っていますが、とても楽しく参加者から元気をもらえたと感想を述べていました。

この二つのイベントは、どちらも地元が主催し、学生がお手伝いするという企画でしたが、学生の自主性を尊重してくださったおかげで、すばらしい交流の場・学びの場となりました。

II . 野々島プロジェクト

野々島プロジェクト

目的

豊かな環境の中で自然の素晴らしさを直接感じられる体験や環境づくりの基礎を学ぶなどの取り組みを、被災地域の子どもたちや配慮が必要な子どもたちを対象に東北福祉大学の専門的知識を有する教職員と学生、さらには外部の様々な協力者の支援や資源を活用しながら、子どもたちに自信と勇気を取り戻す場を提供します。また、子どもたちを対象とした体験型学習を学生主体で展開することによって、その経験を卒業後の学校現場や社会生活の場面で生かすことができる力量を身に付けた学生を育てることを目指します。



実施計画

期間	項目		
4月中旬～5月上旬	事前学習	学生・教員・スタッフ	野々島の散策、調査、学生間交流 活動場所の住民との交流
4月25日	野々島の方への昨年度の活動報告と親睦会		
5月1日	野々島視察		
5月～6月	事前準備①（ラベンダー収穫祭）	学生・教員、実施関係者	文献資料収集、ラベンダー及びポプリの勉強、ポプリデザイン考案、プランニング（各係の役割の明確化、看板作成、しおり作成など）、支援関係各位との打ち合わせ、参加者の募集など
5月～7月	事前準備②（島であそべんちゃー）	学生・教員、実施関係者	備品の確認、野々島の勉強、活動場所の確認と拠点の確保、プログラムづくり、プランニング（各係の役割の明確化、活動内容や昼食の選定など）、関係各位との打ち合わせなど
6月20日（土）	ラベンダー畑 草刈作業	学生・教員・スタッフ	草刈り作業、テント設営練習、コンテナハウス整理整頓
6月21日（日）	ラベンダー畑 草刈作業	学生・教員・スタッフ	草刈り作業、テント設営練習、コンテナハウス整理整頓
7月2日（金）	ワークを交えた勉強会①自然体験活動の心得	学生・教員・外部講師	自然体験活動を行うにあたっての注意事項、危険を回避するための参加児童に対する効果的な注意の仕方など
7月4日（土）	ラベンダー畑 環境整備	学生・教員・スタッフ	ラベンダー畑の危険物除去、清掃活動、必要物品の確認作業
7月5日（日）	散策道の予行踏査	学生・教員・スタッフ	トトロの森、風の丘など予行踏査、危険物除去、危険個所対策
7月9日（金）	ワークを交えた勉強会②配慮が必要な子ども	学生・教員・外部講師	配慮が必要な子どもとは、行動や接し方などを、ミニゲームや、ロールプレーを交えながら学ぶ
7月11日（土）	ラベンダー収穫祭 リハーサル	学生・教員・スタッフ	全行程の作業確認、食事係事前準備、グループ間の連携確認、教護確認
7月12日（日）	ラベンダー収穫祭 実施	参加者・学生・教員・スタッフ	プログラム通り遂行。気温上昇により時間変更等想定。
8月6日（木）	島であそべんちゃー リハーサル①	学生・教員・スタッフ	探検隊ルート、活動場所、活動拠点の確認、テントやタープ、仮設トイレの設営練習、昼食の試作など
8月7日（金）	シーカヌー講習会	学生・教員、実施関係者	本プロジェクトの支援団体「くるしお」にて、参加児童にカヌー体験を行ってもらうために必要な、知識や技能の習得、海でのリスク管理などについて学ぶ
8月～9月中旬	ポプリ作成 準備①	学生・教員	ラベンダーのドライフラワー作り
8月～9月中旬	事前準備③（島であそべんちゃー）	学生・教員	参加案内の作成、配布、申し込み、名簿の作成など、当時明細スケジュール、必要なものリスト、係り活動予定表の作成、全体・リーダー・係別会議等の実施、課題の克服など
9月20日	島であそべんちゃー リハーサル②	学生・教員・スタッフ	スケジュール、受付・送迎、出会いの集いなどの確認、活動、活動場所・拠点整備、反省会（リハーサルの振り返り）
9月26日	島であそべんちゃー前日準備	学生・教員	活動備品の搬入、昼食の下準備、係別最終確認、最終ミーティングなど
9月27日	島であそべんちゃー 実施	学生・教員・スタッフ	事前準備、特にリハーサルでの課題や改善点を克服し実施。事故や怪我のないように最善の注意を払う。 反省会（本番の振り返り）
9月下旬	ポプリ作成 準備②	学生・教員	ポプリデザインの開発、試作品、物品購入
9月下旬～10月上旬	島であそべんちゃー 振り返り	学生・教員	事前準備、リハーサル、活動本番を踏まえた反省と振り返りを行うことで、次年度に向けた課題や改善点を明らかにする
10月上旬～2月下旬	野々島プロジェクト活動報告書作成準備	学生・教員	野々島プロジェクトを、事前準備、島であそべんちゃー、大学祭、ラベンダー収穫祭、の大きく4つの活動報告に分けて報告書作成のための資料を準備
10月上旬～2月上旬	島であそべんちゃー アンケート調査の実施・分析	学生・教員	活動に参加した児童とその保護者に対する満足度調査を郵送にて実施（アンケートの作成から、調査の実施・回収、集計分析を行う）と調査結果報告書の作成
10月上旬	ポプリ作成 準備③	学生・教員	ポプリデザインの決定、ポプリ作成、物品追加購入
10月中旬	国見祭準備・野々島プロジェクト①島であそべんちゃー他	学生・教員	国見祭出展に関わる展示物（野々島プロジェクトについて、野々島マップ、全体・係り別活動報告など）作成、展示室飾りつけ、看板作成など。
10月中旬	国見祭準備・野々島プロジェクト②ラベンダー収穫祭・ポプリ	学生・教員	国見祭出展に関わる展示物、飾りつけ、看板作成など。ポプリ作成
10月24日・25日	国見祭当日	学生・教員	野々島プロジェクト活動報告の展示案内・ポプリ作り体験コーナー運営
2月上旬	野々島プロジェクト活動報告会の開催準備	学生・教員	今年度の野々島プロジェクトの活動報告会に向けての準備を、野々島プロジェクト活動報告書作成資料をたたき台に行う
2月16日（火）	野々島プロジェクト活動報告会の開催	学生・教員	今年度の野々島プロジェクトの活動報告会（事前準備、島であそべんちゃー、大学祭、ラベンダー収穫祭、島であそべんちゃー参加児童と保護者に対する満足度調査結果の報告）を行う。

I. 野々島プロジェクト 事前準備 活動報告

1. はじめに

この報告書は、平成27年9月28日に宮城県塩竈市浦戸諸島野々島で行われたイベント「島であそべんちゃーIN 野々島」の準備期間の活動をまとめたものです。(イベント詳細については後述のイベント当日報告書参照)

まず、「島であそべんちゃーIN 野々島」開催までの流れとして、4月から8月までの期間で野々島について知識を深め、次に、9月上旬にリハーサルを行い、最後に、本番までの準備期間にて、リハーサルで浮き彫りになった課題点などを改善し、本番に備えました。

2. 事前学習について (4月から8月まで)

昨年の活動の振り返りを中心とした、今年度の活動準備へ向けた事前学習を行いました。

4月：活動報告会 (4月25日)

島民の方をご招待して、昨年の活動においてお世話になった方々へのお礼と親睦を深めることを目的に、野々島自然塾をお借りして、昨年の活動の報告会とバーベキューを行いました(写真1)。

活動報告会では、昨年の大学祭で使用した活動説明用のパワーポイントをテレビに映し出し、イベント当日の参加者の様子や大学祭への出展状況などについて説明を

行いました(写真2)。また、お昼には学生が接待役になって、訪れた島民の方と共にバーベキューを楽しみました(写真3)。島の昔の話や昨年の活動の話、今年度はどのように活動していくのかなど、様々な話で盛り上がり、島民の方々との親睦を深めることが出来ました(写真4)。



写真2



写真3



写真1



写真4

5月：野々島視察（5月1日）

昨年活動した学生が先導役となって、今年度初めて野々島での活動に参加する学生に対し、野々島の魅力や特色の説明を交えながら、昨年度の活動場所や島内の観光名所などを回りました（写真5）。

また、昨年活動場所として使用した宇内浜は防波堤の工事の為、使用できなくなったので、今年度のイベント会場はどこを拠点にするのか検討しました。あわせて、東北福祉大学の活動拠点となるトレーラーハウスの周りに雑草が生い茂っていたため、駆除しました（写真6）。



写真5



写真6

7月：「自然体験学習を行うにあたっての注意事項」（7月2日）、「配慮が必要な子ども達への接し方について」の座学（7月9日）

外部からお二人の講師を招き、「自然体験活動を行うにあたっての注意事項」と「配慮が必要な子ども達に対する接し方について」をテーマとした、ワークを交える

勉強会を行いました。（写真7）

「自然体験活動の心得」では、自然体験活動を行う上で注意すべきこと（例えば活動中マムシに噛まれた場合を考え、血清の準備をするなどのリスク管理を行うことの重要性について）の説明（写真8）を受け、参加者に対する効果的な注意の仕方やワーク（「幼少期に自転車で転んだことがあるか」など、似た経験をしたことがあるか少人数で話し合うというもの。互いに似た経験があると親近感が湧きやすいという内容でした）などを行いました（写真9）。

「配慮が必要な子ども達への接し方について」では、配慮が必要な子どもとはどのような子どものことをいうのか説明を受け（写真10）、実際にあったケースを見て、自分だったらどのように行動するかグループごとに話し合うワークを行い、次に少人数でグループを作り、ミニ演習（「割り箸渡しゲーム（自分と相手の人差し指で一本の割り箸を支えあう。距離感や相手に合わせる気持ちがないとすぐに割り箸が落ちてしまう）（写真11）」、「あのね、私ね（自分の好きなもの、特技、自慢できるもの、みんなには内緒のことなどを少人数のグループで発表しあうもの。人と秘密を共有することで、相手との心の距離が縮まりやすいという内容でした）（写真12）」を行いました。



写真7



写真 8



写真 11



写真 9



写真 12



写真 10

8月：事前準備（8月6日から8月7日まで）

一泊二日で、活動本番に向け、事前準備のための夏合宿を行いました。

1日目は、午前中に野々島へ行き、安全にイベントを遂行するために、イベント当日に使用するテントやタープ、仮説トイレなどを建てる練習を行いました（写真13）。

また、昼食時には、ブルーセンターの厨房をお借りして、本番で参加者へ提供する予定のカレーを想定した試作調理と試食を行いました。この際、ご飯やカレーの量がどの程度必要かなどを確認しました。

夜は、民宿「ハーバーハウス かなめ」に宿泊し、夕食時には自分たちで釣った魚と地引網で取れた魚の料理とバーベキューで、活動に向けた学生同士の結束がより深まりました（写真14）。

2日目は、本活動の協力団体である「くろしお 北浜マリンベース」において、活動本番時に参加児童が安全

にシーカヌー体験をしてもらうために、シーカヌーについての知識、カヌーの漕ぎ方、海でのリスク管理などについて専門講師から、座学と実技の講習を受けました（写真 15）。また、学生二人がペアとなって、どのチームが上手に早くシーカヤックを漕げるか、ゲーム感覚のタイムアタックを行い、この講習で学んだ知識と実技の確認をしました（写真 16）。

3. リハーサルについて（9月20日）



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16

野々島へ行き、今年度の実施場所で本番を想定したりハーサルを行いました。今回は、ラベンダー畑前の防波堤と、畑の一角をお借りして活動拠点としました。

野々島到着後のスケジュールの確認・メイン会場の設営など

リハーサルを行うにあたって、リハーサルスケジュールの作成、参加者の名簿の作成、乗船券や当日係ごとに使用する物品の準備などを行いました。

会場設営班は早朝の船で野々島へ向かい、当日でも利用するラベンダー畑にテントを実際に建てました。その際、当初設営予定としていた場所は、予想以上に海風が強く、テントが飛ばされてしまう事態が起きたため、急遽テントの設置場所を変更し防波堤の近くではなく、風の干渉を受けない内陸部に、メイン会場を設けることにしました。リハーサルの重要性を改めて認識しました。

受付・送迎

マリゲート塩釜にて、サポート学生と合流し、野々島へ向かいました（写真 17）。

今回 4 年生やサポート学生の皆さんには、参加児童役としてリハーサルに参加してもらい、参加者の視点からの危険箇所や要望などの発見に努めてもらいました。

出会いの集い

ブルーセンターの前で、リハーサル当日の活動内容についての説明や諸注意を行いました。

活動

計画に沿って5つのチームに分かれ、クイズを通して野々島の自然や名所を学んでもらう島探検（詳しくは次節Ⅱを参照）を実際に行いました。実際に行ったことで、宝箱を置く場所や活動時間がどれほどかかるかなど改善点を確認しました。

活動場所整備

当日危険がないように、活動の拠点となるラベンダー畑の草刈や昼食会場周辺のごみの撤去、危険な場所や安全ロープを張る場所の確認などを全員で行いました（写真18、19）。

反省会

活動終了後、ブルーセンターに戻り、館内にて全員でリハーサルの振り返りを行いました。これにより、よかった点や改善点、が浮き彫りになりました（写真20）。



写真17



写真18



写真19



写真20

4. 準備期間について

リハーサルで明らかになった、よかった点・改善点を基に、リハーサル終了後から本番前日までの期間に、参加学生の役割を明確にするため、そして係りごとの全体の動きを把握するために、「当日詳細スケジュール」や、「係別活動予定表」などの書類を作成しました。また、情報を共有化するため、係やリーダー同士など、ラインやメールのやり取りだけでなく、直接集まる機会を作るよう心掛けました。そして前日には野々島へ宿泊し、本番へ備えました（それぞれの活動や作成した書類等については以下に詳しく記載）。

当日の詳細スケジュールと物品リスト

時間ごとに参加者の当日の動き、係ごとの動きを記載したスケジュール（図表1）や物品リスト（各班で活動するうえで必要なものを記載したリスト）を作成し、特に物品リストでは、他班で購入したものの重複を防ぐた

めに、一度すべてのリストを統合し、昨年購入した在庫を照らし合わせるなどの工夫をしました(図表 2)。

係別活動予定表

学生一人一人に班の役割を与え、何をすればよいかわからない状況を作らないようにするため係ごと(しおり、物品、記録、本部、会場設営、受付・送迎、食事、探検隊)に活動予定表を作成しました。どのような準備を行うか、あるいは当日はどのような流れで活動するか、担当は誰かなど、詳細に記載しました(図表 3)。

リーダー会議

授業前の時間をとり、各班のリーダーや副リーダーが集まり、班活動の進捗状況、変更箇所などの情報共有を図りました(写真 21)。

顔合わせ

サポート学生とは本番以外に交流できる機会がないため、本番前に一度、参加学生同士の顔合わせの機会を作りました。

前泊

野々島のブルーセンターに前泊し、翌日のイベントのために食事の下準備、必要物の作成、最終ミーティングなどを行いました。

食事班では、カレーの具材を切り、炒め、煮込みなどを行い、当日は混ぜ込むだけのために準備しました。また、お米の硬さや水の量を調整し、本番に失敗しないよう、試し炊きをしました。

受付送迎では、本番の班活動の流れや参加者の名前・留意点の確認、また、当日行う乗船時の注意の発表練習を行いました。

探検隊では、イベントのメインとなる島探検についての班ごとのルートの確認や子供たちにとっての危険箇所の確認、宝箱の作成・設置場所の決定、また、当日行う島探検のルールの発表練習などを行いました(写真 22)。

設営班は、リハーサルのときに見に行った会場や使用するテントやタープ、仮設トイレ、野の島自然塾に預けてあったガスボンベとコンロの場所や安全に使用できるかの確認、また活動拠点のコンテナハウスから翌朝スムーズに資材を運び出せるように整理と清潔に利用できるように洗う作業を行いました。

その後、全員が居間に集まり、最終変更箇所の確認、準備物の確認など、本番が無事に遂行できるように最終

ミーティングを行い、明日へ備えました(写真 23)。

明日の日									
時刻	主体	場所	備考	◎本部	◎会場設営	◎食事	◎探検	◎受付	◎送迎
6:00	起床								
7:00		野々島							
7:00	出発(乗船)								
7:15	乗船(乗船)	プリゴト							
7:30	下船(乗船)								
7:40	下船(乗船)								
7:50	当日到着集合	野々島							
8:00	受付開始								
8:50		プリゴト							
9:00	探検隊集合								
9:20	乗船								
10:00	下船								
10:15	出立の集い	プリゴト							
10:20	探検(全員そろってから集合等)	各自							
11:30		プリゴト							

図表 1

品名 (具体的に、可能であれば型番も記入)	探検隊 単位数 (単位があるものは カット済み)	総数	所在
探検隊			
1 宝箱	購入物A 25 在庫数B 0	25	
2 フルーツゼリー	購入物A 70 在庫数B 0	70	
3 ポテトフライ	購入物A 35 在庫数B 0	35	
4 ラッピング袋(紐つき)	購入物A 35 在庫数B 0	35	
5 トランシーバー(補充予定)	購入物A 4 在庫数B 6	10	
6 コンパス	購入物A 6 在庫数B 0	6	
7 マジックペン	購入物A 0 在庫数B 5	5	
8 ダンボール(スーパーから調達)	購入物A 3 在庫数B 0	3	
9 立ち入り禁止のテープ	購入物A 3 在庫数B 0	3	
10 救急箱(虫除けスプレー、絆創膏、消毒液)	購入物A 6 在庫数B 0	6	
11 虫網	購入物A 6 在庫数B 0	6	
		予算	¥ 15,000

図表 2

係活動予定表

係名(例:受付送迎)			
メンバー(☆リーダー)			
☆			
～船送迎時～			
1F			
2F			
時間	活動内容	準備物	担当
6:00	起床	目覚まし	
7:00	野々島発、乗船	チケット	
7:30	1. マリンゲート着 2. 受付準備、集合場所確認	旗、棒さつぷ	1. 目印
8:30	1. 受付開始 2. 来た順に2人1組で名札・しおり配布。(しおり渡す人が名簿確認)時間がない場合は船内で。 3. 保護者への対応。 4. 目印の人または子供の誘導。	名札(おラリーテープ、名前ペン) バインダー4つ 名簿4つ しおり	1. 目印 2. 名札しおり
8:50	1. 点呼 2. トイレ確認、乗船時案内(船乗り場手前) 3. チケット購入	チケット ボード	1. --- 3. ---
9:30	1. 参加者誘導、乗船、マリンゲート発 2. 参加者人数確認 3. 時間なかった子に名札・しおり配布 4. 1階と2階に分かれて見守る。	チケット エチケット袋	2. ---

図表3



写真22



写真21



写真23

II. 自然体験活動「島であそべんちゃー IN 野々島」

東北福祉大学では、子ども支援プロジェクトの一事業として、震災（津波）で大きな被害を受けた塩竈市内の小学校に通う、小学校 4 年生を対象とした自然体験活動を行いました。活動の計画及び実施を本学の金ゼミ・山口ゼミ・高村ゼミの学生が主体となり、サポート学生、教職員、学外の支援者の協力を得てこの秋「野々島」にて実施いたしました。

今回で第 2 回目となる本活動もさわやかな秋晴れの中、島探検やカヌー体験など、普段味わうことのできない活動を通して、被災地域に住む子ども達の心のケアの手助けや自然とのふれあいの場となりました。また、大学生のおねえさん、おにいさんと一緒に活動することで様々なことを経験する機会になったと思います。学生自身も、本活動を通して「野々島」の住民や、この島で活動する様々な方々との間に交流が生まれました。このご縁が今後地域の活性化に繋がればと考えています。

なお、参加した学生はこの活動過程の中で、児童との接し方、地域との交流の大切さ、活動計画の立て方や実践方法など多くのことについて理論や実践を通して学ぶことができ、これから社会に出て行く上で必要となる「人間力」の向上にも繋がりました。

2 主催

東北福祉大学

3 後援

塩竈市教育委員会

4 支援・協力

島民のみなさん、野々島自然塾、塩竈市産業観光部
浦戸振興課

5 期日

平成 27 年度 9 月 27 日（日）
9 時 00 分～15 時 30 分

6 場所

塩竈市 浦戸諸島『野々島』

7 参加者状況

	男	女	合計
児童	15 人	15 人	30 人
学生スタッフ	21 人	32 人	53 人
教員	3 人	0 人	3 人
学外支援者	3 人	3 人	4 人
保護者（児童含む）	2 人（児童 1 人含む）	2 人	4 人
合計	44 人	50 人	94 人

8 当日スケジュール

時刻	活動内容		場所
9:00	参加者受付	・名札作成 ・乗船時の注意事項説明	マリンゲート塩釜
9:30	定期船 乗船		
10:01	定期船 下船		野々島船着場
10:15	出会の集い	・挨拶 ・スケジュール確認 ・注意事項説明 など	野々島 ブルーセンター
10:20	探検	・島歩き ・野々島の観光クイズ ・特産物の紹介	野々島各所
12:00	昼食	・仙台芋煮、手巻き寿司、おにぎり	ラベンダー畑 周辺
13:00	お昼休み	・ポップリづくり ・フォトフレームづくり ・ボール遊び等	
13:30	お楽しみイベント	・ダンス	
14:00	別れの集い	・一日の振り返り ・挨拶	
14:23	定期船 乗船		野々島船着場
15:01	定期船 下船		マリンゲート塩釜
15:30	解散	・保護者へ引き渡し	

9 活動状況

(1) 受付、送迎①



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6

学生スタッフ 26 名でマリゲート塩釜内にて参加児童の受付を行いました。学生スタッフは、事前に打ち合わせや最終確認を行いました(写真 1)。集合時間より早く来てくれた子もいました。児童には、学生スタッフがニックネームの名札を作って胸元と荷物に貼り、活動のしおりを首から下げました(写真 2)。名札としおりを受

け取った子から学生スタッフと一緒に船着場へ移動しました。保護者の方には受付時に学生スタッフが個々に対応し、児童の体調の確認や、安全面での対応など、直接確認を行いました。船着場へ全員移動したあと、定期船乗船時の注意事項を説明し、乗船しました（写真3）。出航する際、保護者の皆さんが手をふってお見送りをして下さいました。船の中では、参加児童のほとんどが緊張した様子でしたが、学生スタッフと話をしたり、海やカモメを眺めたり、それぞれ野々島での活動を楽しみにしている様子も伺えました（写真4）。

野々島に到着すると、学生スタッフが手作りの看板を持って出迎えてくれました。その後、出会いの集いを行うために、ブルーセンター前へ移動しました（写真5、6）。

（2）出会いの集い

塩釜のマリンゲートから船に乗った児童たちを、野々島の船着場で学生スタッフ一同が笑顔で出迎えました。船から降りてきた児童たちは、これから始まる野々島での活動に期待を膨らませているようでした。そしてブルーセンター前で児童たちと学生および関係者で出会いの集いを行い、主催者挨拶・島民代表者挨拶、探検での諸注意、スケジュール確認などを行いました（写真7）。そして、自分自身の持ち物確認とトイレ時間の確保を終えて最初のイベントである野々島探検へとグループごとに出発して行きました。



写真7

（3）野々島探検

去年の反省を含め、今年度は皆が積極的に参加できるように、児童6名と学生4名の5つの小規模グループに分け、活動しました。今回の探検内容は、宝探しゲーム

を企画しました。写真としおりの地図（写真8）を目印に野々島の観光名所（樺のトンネルやボラ洞窟群、夜泣き地蔵や熊野神社など）を回ります。その写真の場所には、宝箱が設置してあります。宝箱の中には各観光名所に関するクイズがあり、正解すると次の行き先を示した写真を手に入れることができます（写真9、10）。ゴールはラベンダー畑で、その宝箱の中にはご褒美のお菓子が入っている、というものです。出会いの集い終了後、ルールと注意事項を説明し、赤、黄、青、白、桃の5色のはちまきを各グループ身につけてもらいました。その後、グループごとに出発しました。

赤組は、ボラ→地蔵というルートでした。写真と地図を見比べてどこが怪しいか話し合いながら探検をしました。ヒントを見て一所懸命クイズを考えていました（写真11）。

黄組は、樺のトンネル→地蔵というルートでした。樺のトンネルへの入り口が分からず苦戦しましたが、学生スタッフのヒントを基に辿り着くことができ、クイズを解いて地蔵へと向かいました。児童たちはとても元気いっぱいでした（写真12）。

青組は、熊野神社→風の丘というルートでした。山道だったため、児童たちはワクワクしながら歩いていました。分かれ道では多数決で進む道を決め、看板を頼りに風の丘を目指しました（写真13）。

白組は、自然塾→地蔵というルートでした。地図と写真を手掛かりに迷わずゴールすることができました。クイズもみんなで協力し楽しく解くことができました（写真14）。

桃組は、かき処理場→地蔵というルートでした。山道を通して自然に触れることができ嬉しそうな様子でした。みんなで協力して楽しそうに探検していました（写真15）。

どの組も、児童たちは、最初は大半が初対面だったためかコミュニケーションがとることが難しく、学生経由で話をする様子が見受けられました。しかし、共に団体活動をするうちに参加児童同士相談をしながらクイズに挑戦するなど、少しずつ打ち解けていく場面が多くなりました（写真16）。その後、全ての色のチームがゴールした後、ラベンダー畑で全体の集合写真を撮りました（写真17）。

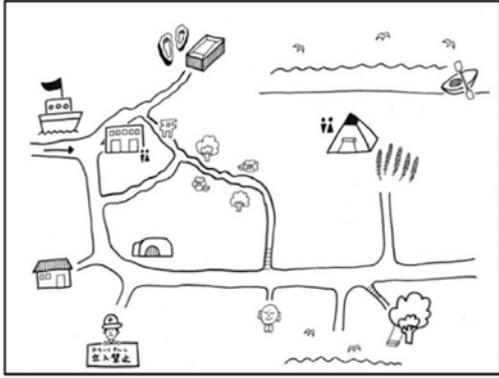


写真8



写真11：赤組



写真9



写真12：黄組



写真10



写真13：青組



写真 14：白組



写真 17：集合写真

(4) 昼 食

昼食は“おにぎらず”と“カレー”を用意しました。

おにぎらずは、名前の通り握らずに広げた海苔にご飯を薄く敷き、好きな具をのせてパタンと挟むもので、児童に大人気です。おにぎらずには塩竈の海苔と新米を使用し、具材には児童たちが好きそうな唐揚げ、ウインナー、エビ、シーチキン、サケフレークなどを選びました。調味料は醤油やマヨネーズ、わさび、梅チューブなどを用意しました。児童たちには唐揚げやウインナー、シーチキンなどが人気でした。作り方も簡単なため、それぞれ思い思いの具を入れて楽しみながら、おにぎらずをつくっていました（写真 18、19）。

カレーは人参、タマネギ、ジャガイモ、豚肉を入れ、大きい鍋二つ分、美味しいカレーを食べてもらいたいの思いから前日から煮込んでおきました（写真 20）。おにぎらずとカレー、どちらもご飯ものでしたが、ほとんどの児童が「カレーも食べたい！」と列を作っていました。二杯、三杯とおかわりをする児童もたくさんいました（写真 20、21）。

おにぎらずとカレーをトレーに乗せて運び、ラベンダー畑の近くのウッドデッキで昼食をとりました（写真 22、23）。学生スタッフや友達と楽しそうに会話しながら食事をしていく様子が印象的でした。おにぎらずをつくる時間がかかり、食事の時間が予想していたより短かったです。児童たちはお腹いっぱい食べることができました。後片付けは学生スタッフが食器をまとめて片付けてくれたためスムーズにできました。



写真 15：桃組



写真 16



写真 18



写真 21



写真 19



写真 22



写真 20



写真 23

(5) 自由時間（カヌー体験や虫捕り）

昼食のあと、自由時間にカヌー体験を行いました。カヌーに乗る前に指導経験のある教員から注意事項を受けた児童は、学生スタッフに協力してもらいライフジャケットを着ました（写真 24）。カヌー体験では学生スタッフと教員が漕ぎ、その間に児童たちを 2 人ずつ乗せ野々島の海を一緒に楽しみました（写真 25、26、27）。カヌー体験は今年初めて行いましたが、想像以上に児童たちに人気だったため、待つ子や乗れない子もいました。しかし、普段体験できないことを体験できてとても楽しんでいただけました。

カヌーに乗れなかった児童たちは、ラベンダー畑で虫捕りなどを通してたくさんの自然に触れ合っていました（写真 28、29）。



写真 26



写真 24



写真 27



写真 25



写真 28



写真 29

(6) お楽しみイベント

お楽しみイベントとして、人気のダンス&ボーカルユニット・三代目J Soul Brothersの楽曲「R.Y.U.S.E.I」を参加児童、学生、教員、学外協力者など全員で踊りました。本来は複雑な振り付けも、学生が工夫して、誰でも踊れるような簡単な振り付けにしたため、初めて踊る参加者も、全体練習を繰り返すうちに踊ることができるようになりました。恥ずかしがっていた子も中にはいましたが、参加者全員楽しく踊ることができました(写真30、31)。



写真 30



写真 31

(7) 別れの集い

お楽しみイベントのダンスの後、別れの集いを行いました(写真32)。疲れの見える児童やまだまだ元気溢れる児童がいるなど、様々な表情を観ることが出来ました。

別れの集いの後、参加児童、学生、教員など関係者全員で撮った集合写真を額に入れてプレゼントしました。帰りの船の時間が近づく中、名残惜しそうな学生の姿と、野々島での活動を振り返って楽しそうに話す児童の姿が印象的でした(写真33、34)。最初はコミュニケーションをとることが難しかった初対面の児童達も児童同士や大学生のおにいさん、おねえさんとすっかり打ち解けていました。



写真 32



写真 33



写真 34

(8) 送迎②

ラベンダー畑で別れの集いを終えたあと、参加児童一行は学生スタッフとともに野々島の船着場に向かいました。船では、児童たちはまだまだ遊び足りない様子で、学生スタッフと活動の振り返りをしたり、カモメや海を眺めたりしていました。到着後、船着場でお別れの挨拶をしました。その後、保護者の方へ1人1人参加児童を引き渡しました(写真35)。



写真 35

(9) まとめ

今回のプロジェクトは大きなケガや体調を崩した児童も無く、楽しく活動することができました。最初は緊張していた児童もみんなと打ち解けていき、次第に笑顔が多く見られるようになる姿がとても印象的でした。帰り際には「帰りたくない」、「また遊びたい」など満足してくれた様子があちらこちらで見られました。学生スタッフは児童が危険な所へ行ったり、一人になったりしないよう気を配りながら楽しく一緒に活動できました。

しかし去年の経験を活かした活動を心掛けていましたが、反省点も多くありました。学生が児童から目を離してしまいケンカになってしまったり、乗船時の持ち物の不足などがあげられました。また去年より参加児童が増えたため、マリゲート内で一般の方の通行の迷惑になってしまったり多くの反省点が見つかりました(写真37)。

これから、今回の活動から得られた課題や問題点を改善しながら、次年度の活動に繋げていきたいと思ひます。



写真 37

Ⅲ. 自然体験活動「野々島ラベンダー収穫祭」 活動報告

子ども支援活動・野々島プロジェクトでは、自然の素晴らしさを直接感じられる体験活動やその環境づくりの基礎を学ぶことを、支援や配慮が必要な子ども達を対象に学生と教職員、地域が一体となって取り組む活動です。そしてこれらを通じて子ども達に自信と勇気を取り戻していただくきっかけになることを願う企画です。今回は、昨年実施した「島であそべんちゃー in 野々島」の企画の中に、新たに「ラベンダー収穫祭」を開催いたしました。野々島にはフラワーアイランド構想として、島の至るところに花が植えられ、島民や野々島自然塾スタッフの手によってラベンダーやブルーベリー、菜の花などの植栽活動が盛んに行われております。野外での体験活動を通して、これらの花々に接してもらい、子ども達の心身の育成に寄与したいと考えました。当プログラムの計画と実施は、本学の山口ゼミ、金ゼミ、高村ゼミの学生が主体となり、教職員、学外の支援者、野々島のスタッフの皆さんのご支援をいただいて実現したものです。学生が主体となり地域の為に汗を流しプログラムを企画、実践するという当プロジェクトは、学生並びに関わる人全ての総力を結集し実現し得るものであり、終えた後のやりがいと達成感は素晴らしいものであったと感じました。

概要

主催：東北福祉大学

支援・協力：島民のみなさん、塩竈市教育委員会、
野々島自然塾、塩竈市産業観光部 浦戸
振興課

開催期日：平成 27 年 7 月 12 日 (日)
8 時 30 分～ 15 時 30 分

場所：塩竈市 浦戸諸島 野々島

参加状況：合計 37 名

- ・児童 3 人 (男児 1, 女児 2)
- ・保護者 3 人 (女性 3)
- ・学生スタッフ 27 人 (男性 9, 女性 18)
- ・学外支援者 2 人 (男性 1, 女性 1)
- ・教員 2 人 (男性 2)

時刻	活動内容		場所
8:30	参加者受付	・名札作成 ・乗船時の注意事項説明	マリゲート 塩釜
9:30	定期船 乗船	・乗船中の子ども把握 ・人数確認	定期船
10:01	定期船 下船		野々島棧橋
10:10	トトロの森 ミニ散策	・島歩き・植物や神社 ・ボラ(洞穴)等の観察	野々島各所
10:45	出合いの 集い	・挨拶、スケジュール説明、 注意事項の説明	野々島 自然塾
11:00	ラベンダー 収穫	・収穫方法、注意説明 ・手袋、鉢の手渡し	ラベンダー畑
12:00	風の丘 散策	・花畑、松ぼっくり拾い ・木のぶらんこ、休憩	風の丘
12:30	昼食	・流しそうめん ・バーベキュー	野々島 自然塾
13:40	昼休み	・島散歩、フルーツ畑 ・片付け	野々島 自然塾周辺
13:55	別れの集い	・ふり返り	野々島棧橋
14:23	定期船 乗船	・乗船中の子ども把握 ・人数確認	定期船
14:54	定期船 下船		マリゲート 塩釜
15:30	参加者 解散		

活動状況

7月12日(日曜日)当日、朝から晴天に恵まれました。塩竈市と仙台市から支援や配慮が必要な子ども達と保護者の方々を野々島に招待しました。野々島棧橋に船が到着すると学生達は手作りの看板で盛大にお出迎えをしました(写真1)。



写真 1

気温はすでに 30 度に達しておりましたが、子ども達の笑顔に学生スタッフは元気をもらいました。いよいよラベンダー畑での花の収穫です。子ども達は花や葉っぱの匂いを嗅ぎながら、鋏を上手に使って花をいっぱい摘みました。「誰にプレゼントするの？」学生達は子どもとの会話を楽しんでいました。花よりも昆虫に興味を示す子どもおり、子ども達の参加の目的は様々であることを学びました。収穫作業が終わると手を洗いました。簡易シャワーから出る水は気持ちよさそうでした。子どものおぼつかない手つきは周囲を和ませました(写真 2, 写真 3, 写真 4, 写真 5)。



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

畑に向かう途中、トトロの森に寄り道をしてミニ探検もしました(写真 6)。風の丘では草花を鑑賞しました。黄色、緑色、紫色にオレンジ色、草花は風に揺られて子ども達を出迎えてくれました。この風の丘は、津波の被害から免れた唯一の場所です。震災前の草花がそのまま咲いており、小高い丘からは真っ青な海が見えます。ここは島民の自慢の場所です。海風は涼しくて暑さを忘れさせてくれました。傍らで子ども達は木のブランコに乗って夢中でした(写真 7 写真 8, 写真 9)。さて、休憩を終えた後はお昼ご飯です。野々島自然塾さんに向かって出発です。子どもにとってリヤカーに乗ることは貴重な体験です。移動中も遊びの続きです(写真 10)。



写真6



写真9



写真7



写真10

お昼ご飯の時間も子ども達は元気いっぱいでした。バーベキューと流しそうめんを食べました。流れてくるそうめんを無心にすくい取ろうとする姿は大人たちを楽しませてくれました(写真11)。



写真8



写真11

一方で、お母さんと二人きりでゆっくりご飯を食べる子どもおりました。みんながそれぞれのお昼を楽しんでくれたようです。お昼休みに、子ども達は自然塾スタッフの皆さんが島で集めた貝殻コレクションの中から、気に入った貝殻を好きなだけもらいました(写真 12)。またフルーツ畑にも連れて行ってもらい、本物のブルーベリーを手に入れました。



写真 12

いよいよラベンダー収穫祭も終わりの時間です。名残惜しいですが最後にみんなで集合写真を撮りました。すてきな笑顔でいっぱいです(写真 13)。

今回、イベントを企画して子ども達の笑顔や真剣な眼差しを見ることが出来ました。保護者のお母様から「学生の皆さんが元気いっぱい、子どもの相手をしてくださったので、ゆっくり食事もできてありがたかったです」と言葉をいただきました。子ども達は島の自然に触れてどんなことを感じたのでしょうか。また野々島に遊びに来てくれることを信じて、船が見えなくなるまで手を大きく振って子ども達とお別れをしました。



写真 13

この企画は、学生スタッフ 27 名の企画立案によるものです。ここでラベンダー収穫祭当日を迎えるまでの 3 か月間を簡単に振り返りたいと思います。学生達は懸命にがんばりました。4月に顔合わせをした際、まだごちない関係でしたが、交流を重ね次第に関係性を築いていきました。昼休みや放課後の時間を使いミーティングを繰り返し、役割分担の明確化を意識するようになり、準備作業に熱が入るようになりました。6月に入ると気温が上昇し、広大なラベンダー畑には雑草が繁茂しました。背丈ほどの雑草を全部刈り取るには 2 日間を要しました。学生達は土曜組と日曜組に分かれて除草作業に従事しました(写真 14)。学内と学外での作業を繰り返すうちに次第に打ち解けあう部分が見られました。



写真 14

研修会も二つ開催しました。一つは外部講師による自然体験活動の心得や危機管理について、二つ目は支援を必要とする子どもの特性や接し方などについて、座学と演習を通して学びました。開催日直前の現地リハーサルでは新たな問題点に気づき、スケジュールの修正作業もぎりぎりまで行われました。準備が十分でないまま当日を迎えてしまったことを学生達一人一人が自覚していました。その分、係間の繋がりを意識し役割を全うしました。様々な課題点を残したことは事実ですが、来年度の企画に活かしたいと思います。

最後になりましたが、塩竈市教育委員会の皆様、野々島自然塾の皆様、また専門指導では越路先生、菊地先生のご支援により、当企画を開催することができました。ここに心より御礼を申し上げます。

IV. 「ラベンダー収穫祭」係別の事後活動報告

ラベンダー収穫祭では、下記4つの係が主軸となり運営しました。今回、各係の活動を詳細まで振り返り、来年度に活かすため反省点を含めて整理しました。計画段階で想定していたことと実際の本番とでは違う部分がたくさんありました。リハーサルでは全員が集まることができず、係間の連携が当日うまくできませんでした。リハーサルでは、早い時期から日程を決めて全員が予定を合わせることで、リハーサルの日に本番と同じように予行演習をしなければならないことが反省点です。今振り返ると緊張感が足りませんでした。リハーサルは思った以上に大切であることがわかりました。次回のラベンダー収穫祭では同じ失敗を繰り返さないようにしたいと思います。各係がそのような想いを込めて報告させていただきました。

- ①受付・送迎係
- ②会場設営係
- ③食事係
- ④しおり作成係

① 受付送迎係 活動報告

1. リハーサルについて

(1) 送迎係は7月11日に7時15分の船で野々島へ行き、4人全員で本番の動き確認するなど最初から通しで行いました。自分たちの動きを各自で把握するとともに、トトロの森散策ルートの確認もすることができました。その時に目に刺さる高さにある木の枝、滑りやすい草などの撤去も他の係の人たちにも協力してもらいました。

(2) 反省点としては、本当は1週間前の7月4日、5日がリハーサル予定日となっていました。送迎係はその日参加することができず、同じくその日に参加できなかった他の係の人たちと急遽7月11日に現地リハーサルを行わせてもらったことです。

2. 収穫祭当日

(1) 7月12日、7時45分頃に本塩釜駅に到着し、金ゼミの先輩方と仕事の確認など最終打ち合わせをしました。その後、参加者を車で迎える人と、マリゲートで迎える人の、2つのグループに分かれ、受付送迎の仕事に取り組みました。

(2) 参加者の中に、欠席する子どもが出たため、事前に予定していた子どもの人数より少なく、子ども3人、保護者3人の計6人でした。

(3) 参加者の受付が完了した後、一度全員でマリゲート内に集合し、点呼を取り、乗船しました。船の中では、大きなトラブルは特になく、安全に野々島まで行くことができました。

(4) トトロの森散策では、当初は、最年少の男の子とその保護者は別ルートを予定していましたが、みんなと同じルートで行くことを希望したので、全員で同じルートを散策しました。誰一人怪我することなく散策することができました。しかし、元気な子どもたちをうまくまとめ、引っ張っていくことができず、スムーズに次へ次へと進めることができませんでした。

(5) 自然塾での出会いの集いでは、司会担当の方にバトナタッチし、送迎係はこの後の流れを確認しました。

(6) 自然塾からラベンダー畑まで行くときに、どの係の人が子どもたちを引率するのかが、決まっていなかったのか、把握できていなかったのか、少し混乱してしまいました。結局、受付送迎係から、数名を先頭に立たせ、ラベンダー畑まで引率しました。

(7) ラベンダー畑では、設営係を中心として、受付送迎係はサポートに回り、ラベンダーの収穫を行うことができました。

(8) ラベンダー畑から自然塾へ戻る途中、風の丘に寄り、ブランコで遊んだり、松ぼっくりを拾ったり、子どもたちが楽しんでくれました。

(9) 昼食では、食事係中心になると思っていました。受付送迎係の金ゼミの先輩が子どもたちを見てくれました。また、流しそうめんの、そうめんを流すのも最初は受付送迎係の金ゼミの先輩がやってくれていたもので、そこは本来担当する係が率先してやるべきであったと思います。

(10) 帰りの乗船では、無事にマリゲートまで見送ることができました。

帰りの船は行きよりもお客さんが多く、もう少し子どもたちを静かにさせておくべきでした。

3. 学び・課題点抽出と対策

(1) 今回、金ゼミの先輩の協力があり、何とか無事に受

付送迎の仕事をする事ができたが、もともとの係の人数が 2 人だったのを 4 人にしてもらったがそれでも少ないと感じました。

→受付送迎係の人数をもっと増やすべきでした。また、1 日中ずっと仕事があるので、前半後半に分けて仕事をするか、もう少し他の係の人が子どもたちと接する機会を増やすべきだと思いました。全員が子どもと接するイベントなのか、一部の人たちだけが子どもと接するイベントなのかをもう少し考えるべきであると思いました。

(2) 自分たちの係以外の人の動きが全く分からない状態での本番だったので、もう少し、他の係との情報交換や全体を通してのリハーサルを行うべきであると思いました。

(3) リハーサルを最低でも 2 回行い、2 回は参加するようにするべきでした。もっとしっかりと各係が自分の仕事の内容を確認し把握しておくべきだと感じました。

(4) 子どもは 3 人という少ない人数でしたが、想像以上に大変であると学びました。

自由に行動する子どもに合わせて動くのか、それとも計画通りの時間でしっかりと仕事、イベントを進行していくのかももう一度しっかり考え直すべきだと思いました。

4. 次回に向けて

とにかく係ごとの話し合い、他の係との情報共有をもっと積極的に行っていくべきだと思います。また、全員がもっと、積極的にいろんなことに参加していくよう意識していきたいと思います。今回の経験や反省点などを無駄にせず、しっかりと次につなげていけるようにしたいと思います。

② 会場設営係 活動報告

1. ラベンダー畑の環境整備

日程：6 月 20 日

- (1) 除草作業
- (2) ラベンダー畑に危険物が落ちていないか確認
- (3) ラベンダーの収穫方法についての研修

2. リハーサル

日程：7 月 4 日、7 月 5 日、7 月 11 日

- (1) 本番と同じ時間スケジュールでテントの設営、ラベ

ンダー収穫、風の丘経由で野々島自然塾までの散歩ルートの確認を行いました。

(2) 危険な場所、危険物、蜂や蜘蛛の巣など確認をしました。

(3) 島探検のルートを決めるため、実際に歩いてみて危ない場所がないか確認をしました。

(4) 島探検ルートをトトロの森の山道に決定し、危険箇所を念入りに調べました。

危険箇所の発見：地面から突出している金属片、子どもの靴サイズの穴、急な下り坂、枯れ枝や雑草の繁茂により地面が見えない箇所を確認しました。急な下り坂に関しては、男子学生 2 名が通路の脇に立って、子どもの体を抱えて補助することで可能と判断しました。

3. ラベンダー収穫祭当日の設営係のスケジュール

日程：7 月 12 日

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 7:46 | 野々島到着 |
| 8:15 | 物品を準備しラベンダー畑へ移動、会場設営準備（集会場所や荷物置き場の確認） |
| 10:45 | 設営係待機、準備物確認 |
| 11:10 | 参加者到着後、収穫方法の説明や実演、注意事項、収穫祭始めと終わりの号令 |
| 11:45 | 収穫終了後会場片付け作業 |
| 12:30 | 食事へ合流 |
| 13:55 | 別れの集いへ参加、参加者の見送り |
| 14:25 | 物品を自然塾・コンテナハウスへ収納 |

4. ラベンダー収穫時

- (1) 参加者と一緒にラベンダーを収穫しました。収穫の仕方を教えながらの作業となりました。
- (2) 参加した子どもが 3 人だったため設営係全員が子どもと触れ合うことはできませんでした。
- (3) 使っていたハサミの取り扱いを注意したり、移動する際に段差で転ばないように体を支えるなど安全面に配慮しました。

5. 学び・課題点抽出と対策

(1) ラベンダー収穫祭の会場（ウッドデッキ）周辺に放置されていた危険物（錆びた金属片やワイヤなど）にブルーシートを被せただけで済ませたが、やはり見た目が

良くないため、離れたところへ移動させるべきでした。

(2) 当日は風が吹いていたため、テントが風で飛ばされないように紐で縛るなど工夫したのは良かったと言えます。

(3) 設営係の人数が多かった(6名)ため、朝の設営が早く終わってしまい時間を持て余した時がありました。その時、2名程度はメイン会場に残り、他のメンバーは野々島自然塾へ向かい食事係の手伝いや引率係の応援などへ行くべきでした。リハーサルの時にもっと本番のことをイメージして、人数配分や他の係との連携を考えることが大切であると考えました。

6. 次回に向けて

今回、事前準備が足りなかったため、今回は余裕を持って準備を始めたいと思います。係内だけではなく、他の係との情報共有が重要だと改めて感じました。また、リハーサルの参加人数が少なかったことから、各々がスケジュールを調節できるようにリハーサルなどの活動日をもっと早く決めるべきだと考えます。設営係においては全員で協力し合うことが出来たので、来年度も良い面は維持し、課題点を改善して臨みたいと考えています。

③ 食事係 活動報告

1. リハーサル・準備において工夫した点

(1) ラベンダー収穫祭には、3つの大きな活動が準備されています。1つ目はラベンダーの収穫、2つ目はトトロの森散策と風の丘散策、3つ目は昼食です。子ども達にとってどの活動内容が一番の思い出になってくれるか期待と不安を感じながら、私達食事班は一生懸命準備に取り掛かりました。食事の会場については当初ラベンダー畑を考えていましたが、物品の運搬や調理するのが不便であるとわかり、野々島自然塾の庭をお借りすることとなりました。またメニューについては、条件として、食べやすいもの、作り易いもの、気温が高いので衛生的に運べるもの、楽しんで食べてもらえるものなど考えた結果、バーベキューと流しそうめんの2つに絞りました。流しそうめんは、野々島自然塾の方々の案で、竹細工の準備や組み立てを中心にご協力をいただくことになりました。

(2) 本番当日の1週間前の7月4日、野々島に向かい、現地に保管されている食器や道具類を確認し、不足している物が何か分かるように一覧表を作りました。確認作業の後、塩釜のホームセンターやスーパーマーケットなど数店舗周り、皿やボウルなど小物類の買い出しを行いました。使い捨ての物と再利用できる物、子ども達が喜ぶ可愛いイラストの描かれた紙コップやカラフルなセロファン製の袋など商品探しに時間をかけました。そうめんを茹でる寸胴鍋は近隣の店舗に無かったため、山口先生に調理器具専門店で買い出しに行ってもらいました。

(3) 翌日(7月5日)、購入した物品を野々島に運びました。この日は主に野々島自然塾で活動しました。現地に着いてからは、まずコンテナハウスから自然塾へ荷物を運びました。食器や寸胴鍋、コンロなど当日使用する器具類を洗いました。気温が高いので調理器具の衛生面には気を付けました。ガスコンロの火の付け方を練習し、テーブルや椅子を実際に配置し、また流しそうめんに使用する竹細工も設置しました。当日は食材を切って調理するだけに済ませよう、ある程度の準備を行いました。流しそうめんの材料の準備や組み立てについては、野々島自然塾の方々に全面的にご協力をいただき大変助かりました。

(4) 収穫祭前日(7月11日)は、最終確認作業を行いました。またバーベキューの肉類は当初5Kg程度を予定していましたが、自然塾の方々から当日の参加人数を考えると足りないのではないかと助言をいただき、さらに5Kg程度の買い出しが必要となりました。直前の予期せぬ生鮮食品の買い出しとなったため、肉類とそれを詰めるクーラーボックスの買い出しは自分達にはできないと判断し、山口先生に買い出しをお願いしてしまいました。また、火の安全についても考慮する必要性がありました。バーベキューの際、みんなで鉄板を囲んで食べるのが楽しいと思い、そのような光景を思い描いていたため、鉄板やコンロは庭の中央付近に設置することを考えていました。しかし議論を続けていくうちに、万が一のことを考えて子ども達が火に触れないようにすることのほうが大事だということになり、庭の一番奥にコンロを設置することに決まりました。火の回りやコンロの場所には子ども達が入ってこないよう、学生が常時、持ち場を離れないようルール化しました。当日の天気予報は晴れと聞

いていたので、日差しが強いことを想定し、テントの増設も行ない、全ての確認作業を済ませました。

2. 収穫祭当日

(1) 午前 7 時半に本塩釜駅に集合し、駅前のスーパーマーケットで氷や消毒液などを買い足し、その後、9 時半の船で野々島へ向かいました。出会いの集いが終わった後、準備に取り掛かりました。準備の際には、しおり班や金ゼミの先輩方、先生などたくさんの方々を手伝っていただきました。そのおかげで、時間に余裕をもって準備をすることが出来ました。食事の時間も上記の方々に加え、設営班にも準備や配膳など手伝っていただきました。

(2) 当日は、参加予定だった子どもが数名欠席したのに加え、子ども達の相手をして食べ損ねた学生も見られました。食事班自身、食材を焼いたり、流しそうめんの準備をして食べる時間がありませんでした。これらが理由の一つかもしれないが、食材が大量に余ってしまいました。食材の量を少なめにしても足りていたのではないかと思います。

(3) 子供たちは、初めて流しそうめんを体験したようで、ずっとその場所から離れずそうめんに集中していました。流れてくるそうめんをすくいあげる作業がなかなか思うようにならず、何回もチャレンジする子どもの表情を見てはスタッフもお母様方も楽しみました。バーベキューではたくさんのお肉と野菜を食べてもらいました。子どもが楽しんで一生懸命食べる姿を見て、お母様方は大変喜んでくださいました。ある子供は部屋の中でお母様と仲良く食事をされ、それぞれのスタイルで昼食を楽しんでいただけたようです。

(4) 食事班は本当にたくさんの方々の手助けをいただいたと思います。特に、食事担当の金ゼミの先輩方には頼りすぎてしまう場面もありました。自分達だけでは成功することはなかったと思います。収穫祭が終了してから、もう少し自力でやれると良かったと思いました。

3. 学び・課題点と対策

(1) 予算の都合上、先輩にお米や野菜を寄付していただきました。もし寄付していただけていなかったら予算をオーバーしていた可能性があります。また、人数が多かつ

たのでどのくらいの食料が必要になるのか曖昧なまま用意していた部分もあったと思います。この量的な部分をもっと調査し、お金を上手に使っていかねばならないと思いました。

(2) 食事係の人数は 7 名だったが、しおり係、司会、送迎係の手の空いた方達が役割分担をし、食事の準備や後片づけに協力してくださったので、時間通りに進めることができました。協力がなく 7 名のままであったら円滑にできなかったと思います。今回の参加人数の規模を考えると食事係 7 名では少ないと感じました。次回は人数設定を真剣に考えるべきだと思います。

(3) 流しそうめんでは、竹と竹の繋ぎ目から水が漏れてしまっていました。竹の下に食事をするテーブルがあったため水が溜まってしまい、衛生上よくないと思いました。リハーサルの際に、流水を長めに流して漏れる箇所を発見しておけば、事前にテープなどで竹の繋ぎ目を固定することができたはずでした。

(4) 準備段階の時に、コンロなど焼き場の近くに子供たちを近づけないようにと食事係同士で話し合ったのですが、当日、近づいてしまう子どもがいました。子どもは好奇心旺盛なので、怪我をしてからでは遅いので、入れないように囲いなどを設置したほうが安全だと思いました。

4. 次回に向けて

全員が感じたことではあると思いますが、自覚と積極性が足りなかったと思います。そのため、準備が遅くなったり、他の係との連携が上手く取れていなかったりと、当日になって慌てるのが沢山ありました。他人任せではなく、誰が何をするのか、今どの係が何をしているのか一人一人がきちんと理解していなければ駄目だと思います。

また、先輩方の協力がなければ成功していなかったと思います。助けていただけたことに感謝しながら、次回はこれらの反省点を活かし、活動していきたいと思いません。

④ しおり作成係 活動報告

1. しおりのデザイン

表紙は温かみのある感覚を出したいと思い、手書きと

しました。文章をできるだけ避け、見てすぐ理解できるようにイラストをメインで描き、硬い印象にならないように心がけました。しかし、イベントの名称が「ラベンダーしゅうかくさい IN ののしま」であるため、表紙にこのタイトルを書きましたが、今思うと小学生や未就学児が「IN」という言葉は理解できなかったのではないかと思います。

2. 工夫した点

しおりの中身は内容を詰め込み過ぎても飽きられてしまうと考え、最小限に抑え、伝えたいことだけを載せました。漢字を避け、出来るだけひらがな表記にしました。最終ページには、今回収穫したラベンダーを材料にして、大学祭(国見祭)でポプリを作り、家族にプレゼントするという旨を記載しました。大学名やアクセス方法などを記載した箇所は、ひらがなにすると読みづらくなるため、漢字表記にして読み仮名を振って対応しました。その他、表紙は厚地の画用紙を、中身のページは普通紙を用いて、全てカラー印刷とし、見やすく綺麗に仕上げることが心掛けました。しおりは子ども達の首にぶらさげて使って貰うため、左上に穴を空けて、黄色の紐を通して輪を作りました。紐の長さは子ども達の身長に合わせました。黄色を選んだ理由は、島の散策時や広大な畑に



(写真：ラベンダー収穫祭のしおり)

いても見つけやすい色であること、また明るく可愛いイメージで、自然の中で映える色だと思ったからです。

3. 学び・課題抽出と対策

(1) 野々島の地図を描く際、複雑な地形が上手く表現できなかったため、去年のしおりを参考にさせてもらう結果となってしまいました。これに関しては、リハーサルの時に地図を描くことを前提で野々島を散策し、詳しく描けるようにするべきでした。

(2) インターネットからラベンダーのイラスト、宇内浜、船に乗っている際に見られるウミネコの画像を引用させていただきました。また、野々島の地図の横に、望遠鏡を覗いている動物のキャラクターを参考に載せましたが、このような画像やキャラクターのデザインは既に世の中で類似しているものがあることが後になって分かったため、確認不足であったことを反省しています。今後は気を付けなければなりません。

(3) しおりの大きさについて、最初はA4用紙を半分に分けて作成する予定でしたが、これでは小さすぎて見づらいと判断して、B5用紙を折らずに、やや大きめのしおりを作成しました。しかし、実際に子ども達がしおりに首にぶら下げたとき、紙が大きかったため邪魔になっているように見えました。最初の案であったA4用紙を半分に分けた方がすっきりしていたのではないかと思います。子どもの体格を考え、もっと具体的にイメージして作成することが必要でした。

(4) しおりの完成が本番当日の直前となってしまいました。本来は試作品を作り、改良点や修正点など検討する時間を設け、自分達で作成まで手掛ける予定でした。しかし、実際には余裕が無く、しおりを綴じる作業と紐を取り付ける作業については、係ではない人に手伝ってもらうことになってしまいました。もっと早い段階から計画を立てて進めれば問題の無かったことです。優先すべきことを捉え違い、後回しにしてしまい、直前で焦る結果となりました。次回は「何をいつまでやる」ということを明確に決めてから行動したいと思いました。

V. 野々島プロジェクト 大学祭（国見祭）での活動報告

1. 趣 旨

東北福祉大学では、子ども支援プロジェクトの一事業として、震災（津波）で大きな被害を受けた塩竈市内の小学校に通う、小学 4 年生を対象とした自然体験活動「島であそべんちゃー IN 野々島」を行いました。活動の計画及び実施を本学の金ゼミ・山口ゼミ・高村ゼミの学生が主体となって行い、教職員、学外の支援者の協力を得てこの秋「野々島」にて実施いたしました。なお本活動は、今回で 2 年目となります。

今年度も昨年同様、金ゼミが中心となり今回は山口ゼミの協力のもと、東北福祉大学大学祭「国見祭」（以下「国見祭」）で、展示会場を設け活動報告を実施する事といたしました。展示会場では、「島であそべんちゃー in 野々島」での活動を中心に、「野々島プロジェクト」について紹介しました。

主な紹介内容としては、活動までの準備、島の概要、地域の人々との交流、島に生息しているラベンダーを使った匂い袋作り等です。

「国見祭」での活動報告を通して、野々島の素晴らしい自然や、震災からの復興状況などを、様々な人に知ってもらい、ぜひ一度は野々島を訪れていただきたいとの思いから、昨年度に引き続き実施いたしました。また、本活動報告が、野々島の地域活性化にも繋がればと考えています。

2. 主 催

東北福祉大学 金政信ゼミ
山口政人ゼミ（協力）

3. 期 日

平成 27 年 10 月 24 日（土）10 時～17 時
25 日（日）10 時～14 時 30 分

4. 場 所

東北福祉大学 2 号館第 18 演習室

5. 参加者状況

(1) 学生スタッフ数

	男	女	合計
24 日	7 人	8 人	15 人
25 日	5 人	6 人	11 人
合計	12 人	14 人	26 人

※一部重複あり

(2) 来場者数

	人数
24 日	256 人
25 日	271 人
合計	527 人

※一部重複あり

6. 活動状況

(1) 大学祭での活動報告のための準備

9 月 27 日の活動終了後、ゼミ内で反省と活動の振り返りを行いました。その後、活動係りごとに分かれて、大学祭に向けた展示物の作成に取りかかりました。

準備を進める中で、参加児童との活動の思い出に浸りながら、昨年の反省も踏まえ、係りごとにスムーズに準備が行われました。

(2) 準 備

大学祭の前日、山口ゼミとの打ち合わせを行いました。ゼミ生と協力し、未完成だった掲示物を完成させました。来場者の方が入口から順をおって見ることができるよう、活動の流れに沿って模造紙を掲示しました。また、野々島について、解りやすく知ってもらうため、野々島のマップを作り、名所にまつわるクイズを考えました。そして、子どもから大人まで気軽に入場してもらえるように折り紙や風船を使用し、装飾を工夫した準備を行いました（写真 1,2,3）。



写真 1



写真2



写真3

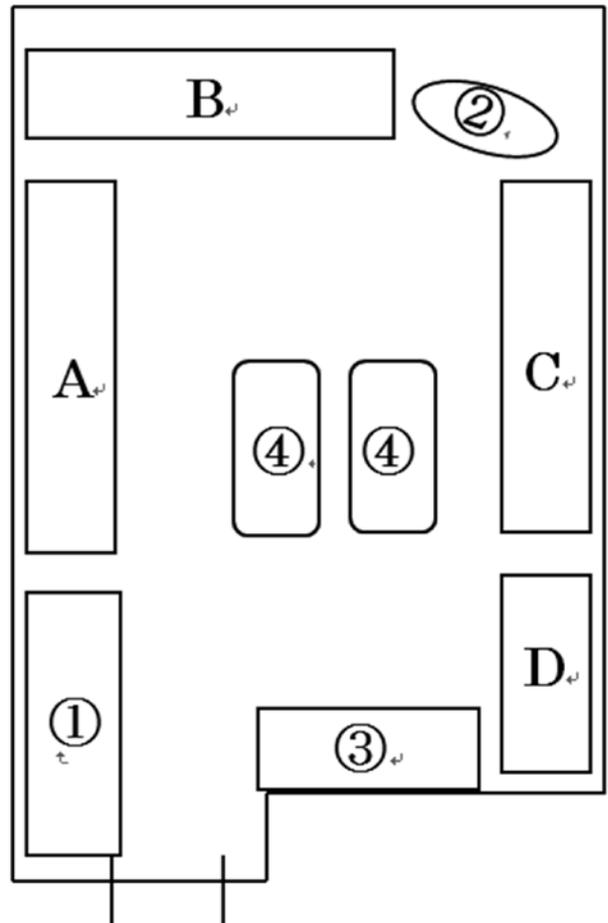
(3) 大学祭当日

私たちが野々島で活動してきたことを4つのブース（A 野々島について、B 島であそべんちゃー IN 野々島、C ラベンダー収穫祭、D ワークショップ）に分けて展示しました（図表1参照）（写真4、5）。

以下で、4つのブースと①受付、本番までの流れ、②スライドショー、③本活動について、④ポップリ作り体験についてくわしく説明します。



写真4



展示室内の配置図 図表1

- A 野々島について
- B 島であそべんちゃー in 野々島
- C ラベンダー収穫祭
- D ワークショップ

- ①受付、本番までの流れ
- ②スライドショー
- ③本活動について
- ④ポップリ作り体験



写真 5

A 野々島について

野々島の人口、面積などの概要や、震災

時の様子、名産品の菜の花、白菜、めだかについて、4月に行った島の方との懇親会や新しく金ゼミに加わった学生に向けての島探検の様子などをまとめた模造紙を展示しました（写真6）。



写真 6

B 島であそべんちゃー in 野々島

本活動の趣旨、目的、活動に向けての事前準備、当日のタイムスケジュール、野々島のマップなどを作成し、展示しました。

また、活動の際にメインとなった探検、食事、お楽しみイベント、カヌー体験の様子を画用紙にて絵本形式で作成し、展示した（写真7、8）。



写真 7



写真 8

C ラベンダー収穫祭

山口ゼミの学生が中心となり、7月に開催されたラベンダー収穫祭の様子を展示しました（写真9）。



写真 9

D ワークショップ

7月に行われた、2人の専門の外部講師を招いて行われた「自然体験学習の心得」、「配慮が必要な子どもたち

への対応」についてのワークショップの様子を展示しました。

また、6月から野々島に建設している小屋、コンテナハウスの内装、外装、8月のゼミ合宿での様子なども模造紙にまとめました（写真10）。



写真 10

①受付、本番までの流れ

大学祭のパフレットにスタンプラリーがあったことから、受付を押印の場としました（写真11）。

また、受付の後方の壁には、本番までの流れを年表形式で書き出しました。



写真 11

②スライドショーについて

本番当日の活動の写真を、スライドショーを作成し、流行の音楽と共にモニターで映し出しました。モニターの周りに椅子を置き、座って休めるスペースとしても活用してもらいました（写真12）。



写真 12

③本活動について

私たちがゼミで行っている活動を通しての教育効果について、金政信先生が、活動写真を交えて作成し、展示しました（写真13）。



写真 13

④ポプリ作り体験コーナー

山口ゼミの学生が中心となり、野々島で収穫したラベンダーのポプリを、来場者の方に作っていただくブースとして、大盛況でした（写真 14、15、16）。



写真 14



写真 15



写真 16

模造紙には、野々島の歴史・紹介、全体のマップ、活動目的、活動本番までの日程、タイムスケジュール、探検・食事の様子を、クイズを交えて展示しました。模造紙の周りには、多くの写真や風船などで装飾しました（写真 17）。



写真 17

テーブルの上には、野々島の名産品についての資料やパンフレット、活動当日に探検隊が活用したクイズの箱を設置しました。

より多くのお客様に興味を持ってもらえるよう、入り口に立ち、呼び込みを行いました。また、来場してくださった方には、教室内の展示品を詳しく説明しながら一緒に歩いて回りました（写真 18、19）。



写真 18



写真 19

野々島の事を知っている方、知らない方、小さな子どもからお年寄りまで、幅広い世代の方々に来場していただきました。野々島についてのクイズコーナーでは、子ども達が一生懸命考えている様子が印象的でした。多くの方々に野々島や私たちの活動を知っていただける良い機会となりました（写真 20）。



写真 20

(4) 片付け

今回、活動報告などで使用した模造紙などは、資料として今後も活用すべく、丁寧に保管しました。昨年度よりも片付けに参加した人数が多かったため、迅速に作業を終える事ができました（写真 21）。



写真 21

7. 反省・感想

今回の大学祭での活動報告は、昨年引き続き、野々島での活動をまとめ展示し、ポップリ作り体験を行いました。

昨年よりも来場者が増え、実際の野々島での活動に参加して下さった子どももいらっしゃいました。

野々島について知らなかった方、昨年に引き続き来場して下さった方など、野々島での活動を知っていただくと共に、野々島について興味関心を持っていただく良い機会となりました。

反省点として、昨年挙げた反省を生かし、早めに準備を始めたのですが、結局当日の朝まで準備が終わらなかったことや、展示物を見ていただくための順路を決めていたのにも関わらず、本番では来場者をうまく案内できず、展示物についての説明がなかなかできなかったことが挙げられました。

今後は、学生一人一人が野々島について把握し、より来場者に興味を持っていただけるように改善して行きたいと思います。

VI. 「島であそべんちゃー IN 野々島」 参加者へのアンケート調査結果報告

本節では、金ゼミ 4 年生が、卒業課題研究として実施した、「島であそべんちゃー IN 野々島」に参加して下さった児童やその保護者に活動後実施した、満足度調査を紹介します。

本調査の概要や、調査結果とその考察については本節に、2 月 16 日に実施した「野々島プロジェクト活動報告会」で使用した資料（パワーポイント）をそのまま掲載しましたので、本節内の、調査結果のまとめとともにご参照ください。なお本節の末尾には、実際のアンケート用紙（集計結果記入済み）も掲載しておりますので合わせてご参照ください。

1. 調査結果のまとめ

「島であそべんちゃー IN 野々島」に参加していただいた児童やその保護者へのアンケート結果において、保護者が参加させたい目的として一番多く挙げられていたのは、「自然体験ができる」（親図表 2）というものでした。自然とのふれあいが少ない現代社会において自然とふれあう機会を与えてあげたいとの思いが強かったのではないのでしょうか。

次に、参加させることの不安に関しては、保護者の 7 割以上の方から不安が無かったとの回答を頂きました（親図表 3）。その理由としては、主催が大学である、後援が教育委員会である、大学生がきちんと引率してくれる等から得られる、信頼感や安心感を保護者に持っていただけたものと推測します（親図表 5）。

また、その反面、参加はさせたいけれども不安感を持った保護者も約 2 割いました（親図表 3）。最も多かったのは「知らない人と友達になれるか」という不安でした（親図表 5）。この事については、児童からの回答の中にも同様な意見が最も多く見受けられました（子図表 4）。

しかしながら、活動を終えての感想では「この活動に参加させてよかった」（親図表 6）。「参加してよかった」（子図表 5）とほとんどの保護者や児童が満足していることから、はじめ抱いていた不安も活動終了時には消えた様です。よって、本活動に参加した児童や保護者の満足度は非常に高かったものと推測することができます。

さらに、保護者の視点で児童の満足度や成長について考察を加えてみると、児童の満足度や成長について、親

問 4 での児童の変化では、約半数から変化が見られたとの回答を頂きました（親図表 9）。その理由として、「チャレンジ精神の向上」や「楽しかったことを今でも話す」といった内容の回答を頂きました（親図表 10）。

また、保護者の意見や要望の中で、参加後の児童の様子や成長に関して記述して下さった方も多く（親図表 24）、「子どもが楽しかったと言っていた」「息子も喜んで」「楽しかった様子がうかがえた」「自立の力になった」「自然に触れる機会や親が出来ることは限られているため今回の活動はいい機会だった」との回答を得る事ができました。単に楽しいだけでなく新たな価値観や心情的な変化を与えることができたようです。

そのほか、アンケート結果からは満足度が高かったという結果だけではなく、改善すべき点としての多くの記述回答を得ることができました。その記述回答から、私たちが考えた来年度へ向けての改善点は以下の 2 つです。

①受付の際に、受付の場所が明確ではなくどこに集まればいいのか分からず迷った。（親図表 13）

→受付場所までの積極的な声かけの徹底や、明確な受付場所の設置をすることで、参加者がスムーズに受付をすることができるのではないかと。

②「知り合いがいるか」「初対面の人と仲良くできるか」等、参加にあたっての不安を示唆する記述が見られた。（親図表 5、子図表 4）

→募集段階：募集のポスターに前年度の参加児童の感想や活動の写真を掲載することで、新たな参加児童の不安を軽減させ、安心して参加してもらえるのではないかと。

→活動時：不安をなるべく早く解消するため、行き船の中で児童全体の自己紹介やアイスブレイキングを取り入れるなどの工夫をするのはどうか。そのような対応により児童の不安を軽減させることで、「島であそべんちゃー」で楽しく活動することができるのではないかと。

以上 2 点が、本アンケート結果から読み取ることのできた改善点です。

今回のアンケートでは、参加児童・保護者共に満足度の高い結果となりましたが、その一方で、改善すべき点

も多く読み取ることができました。以上報告したアンケート結果を参考に、後輩の皆さんには来年度に向けた準備をこれから進めていってほしいと思います。

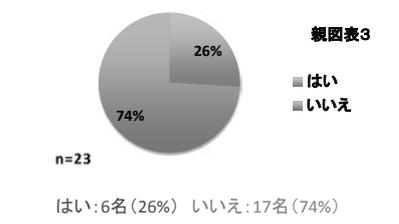
なお、本調査についてくわしくは次項（2、3）をご参照ください。

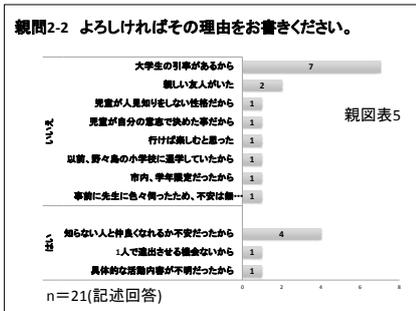
※（ ）内の図表表記については、「2、本調査の概要や、調査結果とその考察（報告会使用資料）」を参照ください。

2. 本調査の概要や、調査結果とその考察 (報告会使用資料・抜粋)

<h3>第1章 調査の概要</h3>	<p>1. テーマ 「島であそべんちゃー in 野々島」の参加児童とその保護者への満足度調査</p> <p>2. 問題意識 学生が中心となって企画から準備、そして実施した「島であそべんちゃー in 野々島」について本調査を通して、活動に参加した児童やその保護者の本活動への満足度、さらには率直な意見や要望をいただきたくアンケート調査を実施することにした。また、この調査の集計結果で得たことを今後の活動に活かしていきたいと考えている。</p>	<p>3. 実施概要</p> <p>(1) 調査対象 塩竈市内の小学校の全4年生を対象に、参加募集を行い、抽選で選ばれた児童とその保護者を対象とした。</p> <p>(2) 調査実施方法 郵送による自述式によるアンケート調査。</p> <p>(3) 調査実施日 10月8日～10月20日</p>
--------------------	--	---

<p>(4) 回収結果 配布数 30 (児童30名、保護者30名) 回収数 23 (児童23名、保護者23名) 回収率 77% 有効回答数 23 (児童30名、保護者30名) 有効回答率 100%</p> <p>(5) 調査主体 金 政信ゼミ 4年生7名</p> <p>(6) 調査の属性 児童 23名(男 12名、女 11名) 保護者 23名</p>	<h3>第2章 調査結果と考察</h3> <p>1. 保護者への質問</p>	<p>(1) 活動全体について</p>
---	---	---------------------

<p>親問1 なぜ、この活動に参加してみようと考えましたか。</p>  <p>親図表2</p>	<p>親問1 まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童の成長にプラスに働く貴重な体験になり得ると保護者目線で捉えられたのだと考えられる。 事前に告知した島での自然体験内容が参加前の児童の注目を集めていたと考えられ、宣伝効果は十分あったのではないかと。 学校生活や社会で不可欠と言える積極性、社交性が本企画を通し培われることに期待して、児童を参加させた保護者も多かったと推測できる。 	<p>親問2 この活動に参加させるにあたり不安はありましたか。</p>  <p>親図表3</p> <p>はい: 6名(26%) いいえ: 17名(74%)</p>
--	--	--



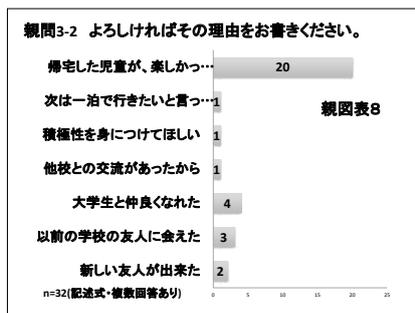
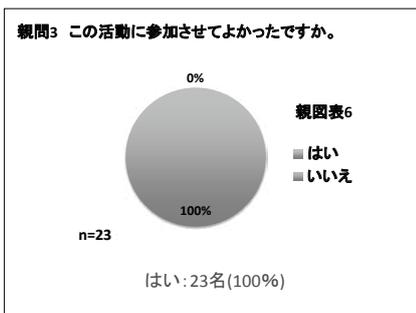
親問2 まとめ

～不安がなかった～

- 大学生が主体で付き添うため、リスク管理の面においては任せても問題はないと考えたのではないかと。
- 主催が大学、後援が教育委員会ということもあって安心して子どもを参加させることができると考えたのではないかと。
- 本企画を行うにあたってのサポートに関しても保護者の評価をある程度得られたと考えられる。

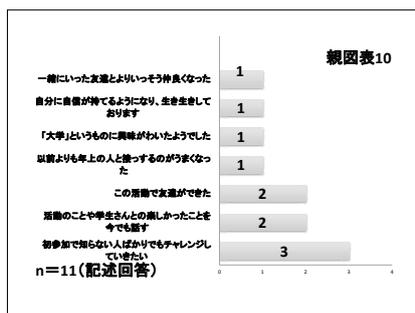
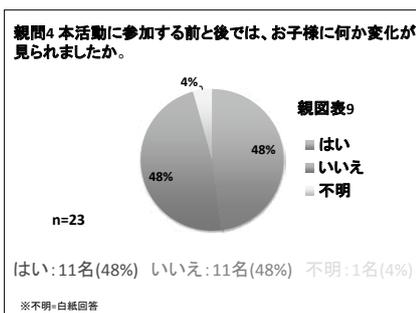
～不安があった～

- 参加児童が今回の企画に参加し、楽しむことができるのかという不安を抱いた保護者が一定数いた。
- 募集要項の活動内容の説明に関しても言葉足らずな部分があれば改善していく必要があるのではないかと。



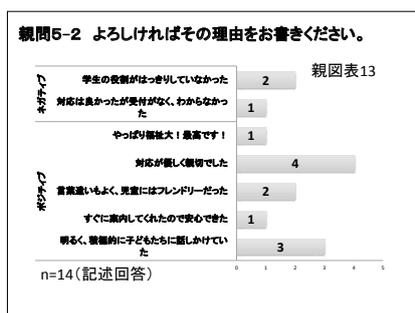
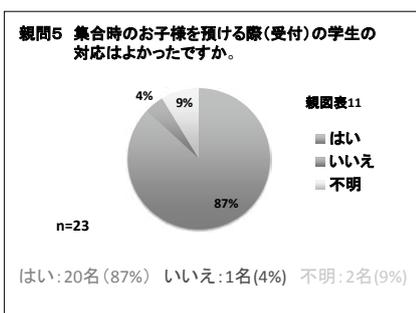
親問3 まとめ

- 満足度が高い要因として、体験に流行を取入れられたり、興味を引くような遊びを考案したことがいい結果に繋がったのではないかと。
- 児童の目線に立って接したことが児童にとっての親しみやすい雰囲気作りにつながったのではないかと。



親問4 まとめ

- すべての記述が前向きなものだった。
- チャレンジ精神の向上。
- 新たな価値観や心情的な変化を与えられたのではないかと。



親問5 まとめ

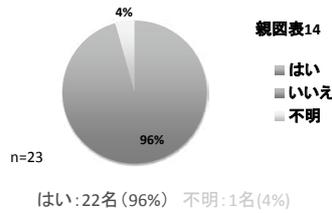
ポジティブな回答

- 活動に参加した学生がしっかりと周りを見渡せていた。
- 参加者に対する気遣いができていた。

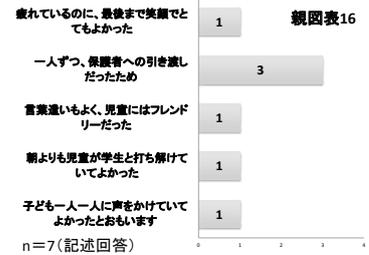
ネガティブ回答

- 学生の役割が明確になっておらず分かりづらかったという指摘があり、この点は改善すべきことである。
- 積極的な声かけの徹底、または明確な受付場所を設置し、その誘導の徹底、といった改善が来年からは必要ではないかと考える。

親問6 解散時のお子様の引き渡しについて、学生の対応はよかったですか。



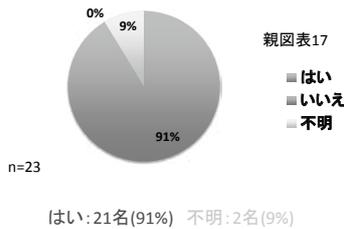
親問6-2 よろしければその理由をお書きください。



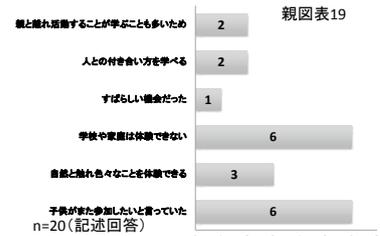
親問6 まとめ

- 学生が子どもたちと打ち解けていた。
- 一人ひとりの引き渡しが安心した。
- 引き渡しの保護者への対応もよかった。

親問7 このような企画があればまた参加させたいですか。



親問7-2 よろしければその理由をお書きください。

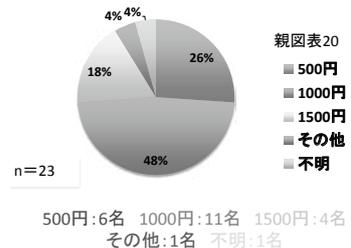


親問7 まとめ

- 学校や家庭で体験できないことにつながるので、児童にとって有意義な体験ができた。
- 児童がまた参加したいと言っていたことから「島であそべんちゃー」の満足度が高かったと推測できる。

(2)参加費と活動時期について

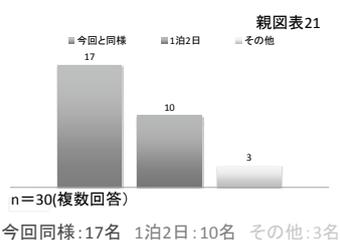
親問8 今回と同様の日帰りの企画で参加費を徴収するならば、いくら位が妥当だと思いますか。



親問8 まとめ

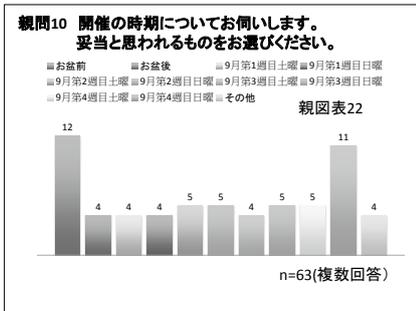
- 交通費や保険、食費、そして学生からのプレゼント等の負担を考えた結果ではないか。
- 1000円が最も多く(48%)、次に500円が(26%)、1500円(18%)と9割以上の保護者が、500円は負担してもかまわないという事であった。よって、今後は500円程度の参加費を考えてもよいのではないかと考える。

親問9 活動時間はどの位が良いと思いますか。



親問9 まとめ

- 参加児童にとっては活動時間が短く感じられたようだった。
- 一泊二日での開催は学生の負担が大きいことや、保護者の心配など様々なリスクや課題が生じてしまうため難しいと考えられる。
- これまで同様の活動時間の枠組みの中でさらに満足してもらえるような、工夫や活動内容の検討を図っていくべきだと考える。

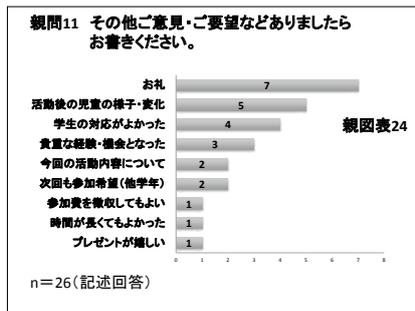


親問10 まとめ

- ・ 児童の夏休み期間に開催を希望する保護者が多かった(一番多く12名)。特に、8月のお盆前は学生の試験期間でもあるため準備が進められないことから、8月の開催は厳しい。しかしながら、9月の第4週の日曜日の開催(今年度と同様に開催日)が妥当と回答した保護者も多く(2番目に多く11名)、次年度も今回同様の開催日となる事が考えられる。
- ・ 今回9月第4週日曜日の開催でも暑さがまだ残っていたため、島探検や屋食の際児童に暑い思いをさせてしまった。暑さ対策は徹底したい。



(3)意見・要望



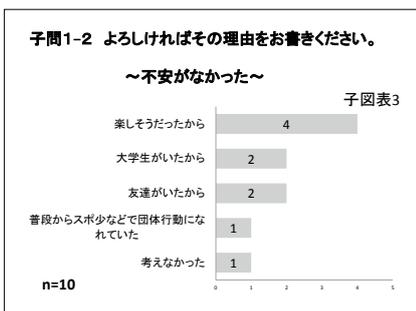
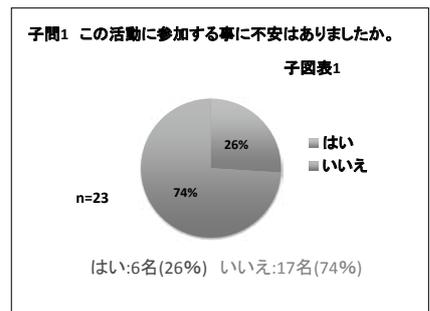
親問11 まとめ

- ・ 御礼
「ありがとうございました」「お世話になりました」
- ・ 参加後の児童の様子・変化
「自立の力になった」「楽しかったと言っている」等

→「島であそべんちゃー」という企画に満足してもらえた。

2.児童への質問

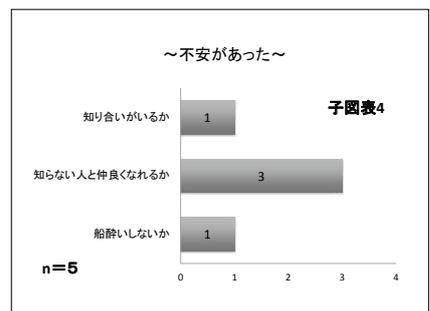
(1)活動全体について



子問1 まとめ

～不安がなかった～

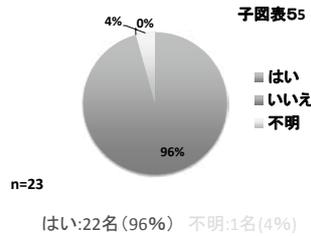
- ・ 自然と触れ合う企画が楽しそうに感じた。
- ・ 保護者やそれより上の年代の支援者(大学の教員等)よりも年代の近い大学生の支援者(存在)が参加児童に安心感を与えたのではないかと。



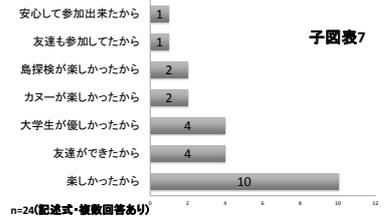
～不安があった～

- ・船酔いについては、酔い止めの薬を服用させることやサポート学生が気を紛らわせるために声掛けするなどの対応が必要である。
- ・募集のポスターや案内に前年度の参加児童の感想や活動の写真を掲載するなどの工夫が必要ではないか。

子問2 この活動に参加してよかったかですか。



子問2-2 よろしければその理由をお書きください。



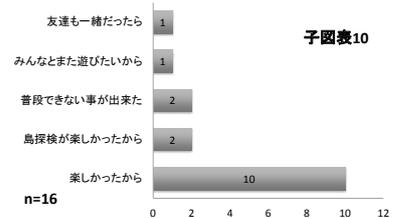
子問2 まとめ

- ・96%にあたる22名の児童が参加して良かったと感じており、今回の活動は児童達を十分に満足させることのできる内容の企画になっていた。
- ・必ずしも初対面の人とも仲良くできる活動にはなっていないかもしれない。
↓
そのため、行き船の中などで児童全体の自己紹介やアイスブレイキングなどを取り入れる必要性もあると考える。

子問3 またこのような企画があれば参加したいですか。



子問3-2 よろしければその理由をお書きください。

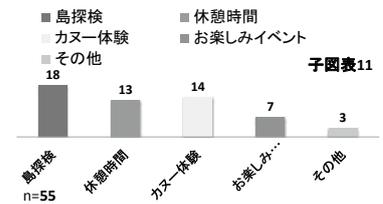


子問3 まとめ

- ・16名中10名が「企画自体を楽しかった」と回答していたので、今回実施した活動は鳥探検やカヌーなど野々島ならではの魅力がある楽しい企画となっていた。
- ・学生が児童同士のつなぎ役となったり、積極的に児童と関わったりするなど、児童への対応について改善の余地があると考ええる。

(2) 個々の活動について

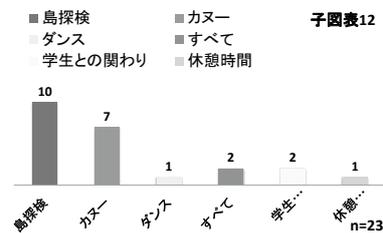
子問4 楽しかった活動は何ですか(複数回答)。



子問4 まとめ

- ・「鳥探検」・・・メイン企画であり、宝探しや島の様々な場所を回るなど、参加児童を飽きさせない工夫がされていた。
- ・「カヌー」・・・なかなか体験することのない活動であったため、参加児童の興味を引くものであった。

子問5 1番楽しかった活動は何ですか。

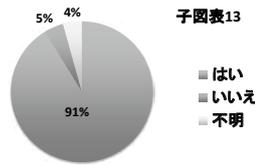


子問5 まとめ

- ・「鳥探検」の狙いである、野々島を知ってもらうという目的も評価されている。
- ・「カヌー」も人気で次回の目玉企画にしてみるとよいかもかもしれない。
- ・「学生との関わり」に票が入った＝児童との関わりを事前に学んだ成果が現れたと考える。

(3) 食事について

子問6 おにぎらず作りは楽しかったかですか。



n=23
はい:21名(91%) いいえ:1名(5%) 不明:1名(4%)

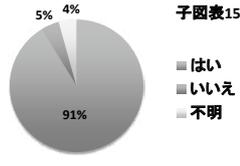
子問6-2 よろしければその理由をお書きください。

- ・ 色々な具材があったから。
- ・ 自分で作るのが楽しかった。
- ・ 料理をするのが好きだから。
- ・ みんなで食べて楽しかった。
- ・ ポロポロになった。
- ・ うまくためなかつた。 など

子問6 まとめ

- ・ 自分で作ることができ、好きなものを選んでもらうという、おにぎらずはとても良い選択だった。
- ・ 学生も一緒に作っていたが、うまくできていない児童もいたので、もう少し気を配るべきだった。

子問7 カレーは美味しかったかですか。



n=23
はい:21名(91%) いいえ:1名(5%) 不明:1名(4%)

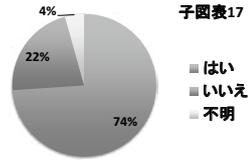
子問7-2 よろしければその理由をお書きください。

- ・ おいしかったから。
- ・ みんなと食べたから。
- ・ 外で食べたからおいしかった。
- ・ 味がおいしかった。
- ・ 辛くなかつたので。
- ・ 自分たちでカレーを作ってみたかった。
- ・ 食欲がなくなり食べませんでした。 など

子問7 まとめ

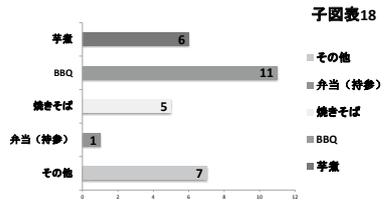
- ・ 自分たちで作れたかったという意見もあった。
- ・ お昼ご飯を食べる時に、屋舎会場のテントに、日陰があるところと日陰が全くないところがあったので、ただ設置すればよいのではなく、環境や参加児童の体調管理を考えた、会場設営の重要性も見えてきた。来年度へ向けて改善すべきと考える。

子問8 今後、同様な企画に参加する場合、他に食べたいものはありますか。



n=23
はい:17名(74%) いいえ:5名(22%) 不明:1名(4%)

子問8-2 はい、と答えてくださった方にお伺いします。なにが食べたいですか(複数回答可)。



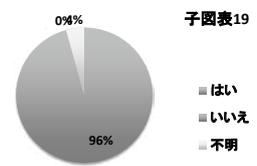
n=30(記述式・複数回答あり)
※その他:ピザ、スイカ割り、餅つき、流しそうめん、アイス作り、かき氷、竹パン焼き

子問8 まとめ

- ・ 普段の生活では、あまり経験できない、野外で大勢かつ自分たちも食事作りに参加しながら食事することに魅力を感じているのではないか。
- ・ 昼食の時間により重点を置いて活動を行うという選択肢も考えられるのではないか。

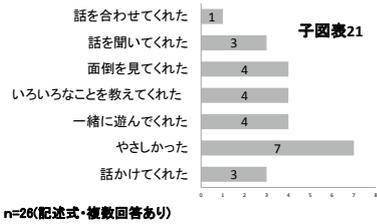
(4) 学生について

子問9 大学生のお兄さんやお姉さんは、きちんと対応してくれましたか。



n=23
はい:22名(96%) 不明:1名(4%)

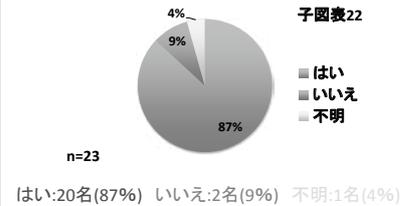
子問9-2 よろしければその理由をお書きください。



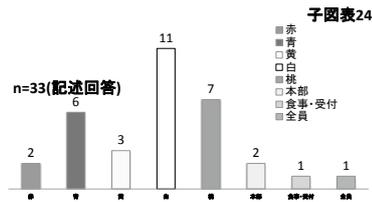
子問9 まとめ

- 学生の多くが参加児童に親近感を持って、細目に接することができた。
- 参加児童は、特出した行動ではなく、一緒に話をしたり、遊んだりする中で、児童の目線に立ち、なおかつ、学生の自然に接してくれる態度に、親近感を持ってくれたのではないかと考える。

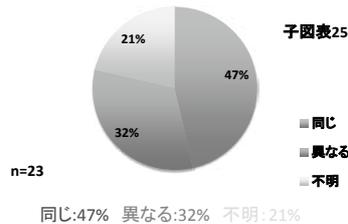
子問10 印象に残ったお兄さんやお姉さんはいましたか。



子問10-2 はい、と答えてくださった方にお伺いします。そのお兄さん・お姉さんのハチマキの色や名前、又は、特徴を覚えていればお書きください。



問10-2 ハチマキの色



子問10 まとめ

- 探検隊として活動することが、学生と最も関わりの深くなる活動であった。
- 班ごとの学生の対応に特別格差はなかった。

→印象的なお兄さんやお姉さんを挙げてくれた児童は「印象的なニックネーム」の学生を選んだと思われるので、個々の学生の対応自体には格差がなかったと考える。

→児童に接する機会が多かった探検隊以外に関わった学生を印象に残った学生として挙げてくれた児童もいたので、学生の対応自体には格差がなかったと考える。

(5)意見・要望

子問11 その他ご意見・ご要望などありましたらお書きください。

- ありがとうございました。
- 一泊二日が良かった。
- 鬼ごっこをやりたい。
- また参加したい。妹も参加したいと言っている。
- もっといろんなことをやりたい。
- 5年生になっても行きたい。
- 楽しかった。最高に楽しかった。

子問11 まとめ

- 「妹も参加したいと言っている」
- 「5年生になっても行きたい」

参加後、家族や友人に話したくなるような活動がこれからもできるように力を合わせて頑張っていきましょう！！

3. アンケート用紙（集計結果記入済み）

「島であそべんちゃーIN 野々島」についてのアンケート

保護者様へ

○活動全体についてお伺いします

問1 なぜ、この活動に参加してみようと考えましたか。
 例)子どもが参加したいと言ったから、自然体験をしてほしいと思ったからなど
 記述あり (23名 100%)

問2 この活動に参加させるにあたり不安はありましたか。
 1. はい(6名 26%) 2. いいえ (17名 74%)

問2-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (17名 74%)

問3 この活動に参加させてよかったですか。
 1. はい (23名 100%) 2. いいえ

問3-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (23名 100%)

問4 本活動に参加する前と後では、お子様に何か変化がみられましたか。
 例) 特に変わらない、以前より明るくなったなど
 記述あり (22名 96%)

問5 集合時のお子様を預ける際(受付)の、学生の対応はよかったですか。
 1. はい (20名 87%) 2. いいえ (1名 4%)

問5-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (14名 61%)

問6 解散時のお子様の引き渡しについて、学生の対応はよかったですか。
 1. はい (22名 96%) 2. いいえ (0名 0%)

問6-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (7名 31%)

問7 このような企画があればまた参加させたいですか。
 1. はい (21名 91%) 2. いいえ (2名 9%)

問7-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (20名 87%)

○参加費と活動時期についてお伺いします

問8 今回と同様の日帰りの企画で参加費を徴収するならば、いくら位が妥当と思えますか(1つ回答)。
 1. 500円 (6名 28%) 2. 1000円 (11名 48%)
 3. 1500円 (4名 17%) 4. 2000円 (0名 0%)
 5. その他 (1000~2000円) (1名 4%)

問9 活動の時間はどの位が良いと思えますか。(複数回答可)
 1. 今回と同様(半日程度) (17名)
 2. 一泊二日 (12名)
 3. その他 (3名)

問10 開催の時期についてお伺いします。妥当と思われるものをお選びください。(複数回答可)
 1. お子様の夏休み期間、お盆前 (8月6日~12日) (12名)
 2. お子様の夏休み期間、お盆後 (8月17日~25日) (4名)
 3. 9月第一週目の土曜日 (4名)
 4. 9月第一週目の日曜日 (4名)
 5. 9月第二週目の土曜日 (5名)
 6. 9月第二週目の日曜日 (5名)
 7. 9月第三週目の土曜日 (4名)
 8. 9月第三週目の日曜日 (5名)
 9. 9月第四週目の土曜日 (5名)
 10. 9月第四週目の日曜日(※今回開催した時期) (11名)
 11. その他 (4名)

問11 その他ご意見・ご要望などがありましたらお書きください。
 記述あり (13名 57%)

参加児童へ(保護者の方が、お子様に聞いてお答えください)

○活動全体についてお伺いします

問1 この活動に参加することに不安はありましたか。
 1. はい (6名 26%) 2. いいえ (17名 74%)

問1-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (15名 65%)

問2 この活動に参加してよかったですか。
 1. はい (22名 96%) 2. いいえ (1名 4%)

問2-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (20名 87%)

問3 またこのような企画があれば参加したいですか。
 1. はい (23名 100%) 2. いいえ

問3-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (16名 70%)

○個々の活動についてお伺いします

問4 活動の中で何が楽しかったですか。(複数回答可)
 1. 鳥探検 (18名)
 2. 休憩時間(ボール遊び、大学生との交流など) (13名)
 3. カヌー体験 (14名)
 4. お楽しみイベント(ダンス) (7名)
 5. その他 (3名)

問5 一番楽しかったのは何ですか、またその理由を教えてください。
 一番楽しかった事
 鳥探検(10名)、カヌー(7名)、ダンス(2名)、すべて(2名)、
 学生との関わり(2名)、休憩時間(1名) ※23名(100%)回答
 その理由
 記述あり (23名 100%)

○食事についてお伺いします

問6 “おにぎらず”づくりは楽しかったですか。
 1. はい (21名 91%) 2. いいえ (1名 4%)

問6-2 よろしければその理由をお書きください。
 例) 食材が選べたから、友達と一緒に食べたからなど
 記述あり (20名 87%)

問7 カレーはおいしかったですか。
 1. はい (21名 91%) 2. いいえ (1名 4%)

問7-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (12名 50%)

問8 今後、同様な企画に参加する場合、他に食べたいものはありますか。
 1. はい (17名 74%) 2. いいえ (5名 22%)

問8-2 はい、と答えてくださった方にお伺いします。なにが食べたいですか。
 (複数回答可)
 1. 芋煮 (6名) 2. バーベキュー (11名)
 3. 焼きそば (5名) 4. お弁当(持参) (1名)
 5. その他 (7名) (びざ、スイカ割り、餅つき、竹パン焼き、流しそうめん、
 かき氷、アイス作り)

○その他のことについてお伺いします

問9 大学生のお兄さんやお姉さんは、きちんと対応してくれましたか。
 1. はい (22名 96%) 2. いいえ (0名 0%)

問9-2 よろしければその理由をお書きください。
 記述あり (18名 78%)

問10 印象に残ったお兄さんやお姉さんはいましたか。
 1. はい (20名 87%) 2. いいえ (2名 9%)

問 10-2 はい、と答えてくださった方にお伺いします。そのお兄さん・お姉さんのハチマキの色や名前、又は、特徴をおぼえていただければお書きください。

記述あり (20名 87%)

問 11 その他ご意見・ご要望などありましたらお書きください。

記述あり (7名 39%)

○最後に、今までお聞きしたことを分析する上で必要な属性についてお伺いします。

問 1 参加児童の性別 1. 男 (12名 52%) 2. 女 (11名 47%)

問 2 参加児童のハチマキの色

1. 赤 (3名 13%)
2. 青 (4名 17%)
3. 白 (4名 17%)
4. 黄 (5名 21%)
5. ピンク (4名 17%)

問 3 所属は、次のどれですか。

1. 第二小学校 (5名 21%)
2. 第三小学校 (5名 21%)
3. 月見ヶ丘小学校 (6名 26%)
4. 杉の入小学校 (2名 8%)
5. 玉川小学校 (5名 21%)

以上で質問は終わりです。

ご協力ありがとうございました。

III . 学生企画事業

学生企画事業

目的

世代的に子どもたちに目線が近く、また日頃のボランティア等で子どもと接している学生の多様なアイデアを活用し、有効な子ども支援を行う。

コンペ形式のプレゼンテーションを行うことで、事業の目的や効果、リスク、留意事項などを明らかにするとともに、学生のプレゼン力を向上させる。

自分たちの活動がコンペを通じて選ばれることによって自己肯定感を高め、学生のやる気と主体性を促進させ、実践力アップを図る。



実施計画

期間	項目	内容	備考
6月22日	説明会	コンペの応募についての説明 企画案と予算を委員会に提出	
6月29日	コンペ本選 審査	各グループ毎の事業構想プレゼンコンペ プロジェクト委員会で審査	
7月1日	審査結果発表	入選団体及び補助金額を発表	
8月～翌2月	活動期間	企画にそって活動を実施	実施に当たっては常に指導教員と連絡をとる
10月5日	荒井地区事前ツアー	今年から加わる荒井地区の視察	
12月2,3日	あらフェス参加	荒井地区イベント「あらフェス」参加、活動内容発表	

事業一覧

団体名 / 企画名	概要	開催日時	募集方法	受付方法	開催場所	募集対象 / 定員	主催者人数
三浦ゼミ 言葉の貯金箱	ことばの貯金箱（NIE活動）を通して、子どもたちに新聞への興味関心を持ってもらうことや、読解力、表現力を向上させること。また、活動を通してのケアをすること。	① 10/18（日）13：00-15：00 ② 11/29（日）13：00-15：00 ③ 12/20（日）13：00-15：00	七ヶ浜町の小学校の各学級にチラシの配布を依頼し、児童に広報する	各回ともメールまたはFAXによる申込み	各回とも七ヶ浜国際村	各回とも小・中学生15名	各回とも15名
ファングループ ASOBO (in 七ヶ浜) ASOBO (in 荒井東)	本企画では、日本語とは言語体系が異なる英語に七ヶ浜の子どもたちが親しめるような支援の一つとして「体験的英語教育」を中心とした指導を実施する。体験的英語教育とは、英語を座学で学ぶだけでなく、実際の物を見て・触って・肌で感じるなど身体全体を動かしながら学習する方法で活動を展開する。	① 11/1（日）13：00-16：00 ② 11/29（日）13：00-16：00	①七ヶ浜町の小学校の各学級にチラシの配布を依頼し、児童に広報する また、学級にチラシのカラー版の掲示を依頼する ②地域で活動している団体に、まちづくりを推進している社団法人を通じて依頼する	①メールまたはFAXによる申込み ②一般社団法人荒井タウンマネジメント様による取りまとめ	①七ヶ浜生涯学習センター ②アライデザインセンター	①小学生20名 保護者20名 ②子ども20名 保護者20名	各回とも20名
森ゼミ あそびの森	たくさんの素材や道具を使い、2～3時間で行うことのできるワークショップを5つ用意。日によりパターンを変え、親子での作品作りを通して、様々なテーマによった表現を楽しんでもらいます。	① 11/29（土）13：00-15：00 ② 1/16（土）13：00-15：00 ③ 1/17（日）13：00-15：00	①七ヶ浜町の小学校の各学級にチラシの配布を依頼し、児童と保護者に広報する ②チラシを作成し、地域で活動している団体にまちづくりを推進している社団法人を通じて依頼する	①メールまたはFAXによる申込み ③一般社団法人荒井タウンマネジメント様による取りまとめ	①七ヶ浜生涯学習センター ②アライデザインセンター	①小学生と保護者20～30名（10-15組） ②③小学生と保護者20～30名（10-15組）	各回とも12名
ジャグリコ ジャグリングって何だろ？ ～みんなと一緒にやってみよう！～	七ヶ浜の小学生を集い、ジャグリングを通した自主企画イベントを開催する。イベントでは、小学生の道具体験、学生によるジャグリングショーの披露などを行う。参加者同士の交流を深めながら、新しいものを見る、学ぶ、体験する力を養う。	開催日時 12/20（日）13:30-15:30 募集期間 11/24-12/10	七ヶ浜町の小学校の各学級にチラシの配布を依頼し、児童と保護者に広報する	メールまたはFAXによる申込み	七ヶ浜国際村セミナー室1	小学生20名 保護者10名	20名
ステーションキャンパス スクラブ（SCC） 学習支援、ミニ運動会、七郷市民祭りの支援	体を動かすことを通して被災した地域の子ども達と交流を深め、元気になる支援を通して、子どもたちが、感謝の心、人を思いやる心、協調性、自制心を身に着けながら、社会のルールやマナーを学ぶような活動に取り組む	学習支援 ① 9/14（月）13：00-16：00 ② 9/28（月）13：00-16：00 ③ 10/13（月）13：00-16：00 ④ 10/26（月）13：00-16：00 ⑤ 11/2（月）13：00-16：00 ⑥ 11/9（月）13：00-16：00 ミニ運動会 ⑦ 11/14（土）9：00-12：00 児童館祭り ⑧ 11/22（日）9：45-15：00	学習支援、ミニ運動会、七郷児童館とも、七郷市民センターによる募集	学習支援、ミニ運動会、七郷児童館祭りととも、七郷市民センターによる受付、取りまとめ	学習支援 七郷児童館及び七郷市民センター体育館 ミニ運動会 七郷市民センター体育館 七郷児童館祭り 七郷児童館	学習支援15～60名 ミニ運動会30名 七郷児童館祭50名	学習支援8名 ミニ運動会10名 七郷児童館祭5名
ダイナミック琉球 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川	群舞「ダイナミック琉球 in 女川」を異世代で共演できるよう構成し、女川町立保育所（第一、第四）の園児・地域高齢者・学生と共に新設「女川町まちなか交流館」ホールで2月開催予定の「健康のつどい」において発表する。	① 7/22（水） ② 7/28（火） ③ 9/9（水） ④ 10/14（水） ⑤ 11/11（水） ⑥ 12/16（水） ⑦ 2/5（金） ⑧ 2/14（日）	第一・第四保育所、女川町保健福祉課による募集	女川保健センター健康福祉課保健師による取りまとめ	女川第一・第四保育所 女川勤労青少年センター 女川町まちなか交流館	女川第一・第四保育所園児36名、 女川運動サポーター50名	20名

I. ことばの貯金箱 活動報告

1. 事業名及び趣旨

事業名：ことばの貯金箱 in 七ヶ浜

趣旨：ことばの貯金箱（NIE 活動）を通して、子どもたちに新聞への興味関心を持ってもらうことや、読解力、表現力を向上させること。また、活動を通して心のケアをすること。

2. 開催団体名

子ども教育学科三浦ゼミ

1. ことばの貯金箱 in 七ヶ浜 その1

報告者 熊谷 佳奈

1. 活動日時

平成 27 年 10 月 18 日 (日) 11:20 ~ 17:00

2. 開催場所

七ヶ浜国際

3. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学生及びその保護者

参加者数：5 人 (小学生 4 人 保護者 1 人)

開催者数：12 人 (学生 11 人 教員 1 人)

4. 開催内容

当日の日程

- | | |
|-------------|---------------|
| 11:20 | 下馬駅前 集合 |
| 11:20~12:20 | 移動 (ぐるりんこ) |
| 12:20~12:50 | 到着、会場設営、昼食 |
| 12:50~13:00 | 受付 |
| 13:00~13:15 | 開始、ことばの貯金箱の説明 |
| 13:15~14:20 | 作成 |
| 14:20~15:00 | 発表、終了 |
| 15:00~15:30 | 撤収作業 |
| 15:30 | 完全撤収 |
| 16:00~16:45 | 移動 (ぐるりんこ) |
| 16:45 | 下馬駅前 解散 |

5. 活動報告

5.1 会場設営の様子 [セミナー室 3]

- ・会場は 4 人がけのテーブルを二つ合わせたものを 3 セットと、ホワイトボードを用意しました。
- ・合わせたテーブルにそれぞれ 4 人ずつ座らせて活動を行う場を設定しました。



5.2 「ことばの貯金箱 in 七ヶ浜」の活動の様子

① 「ことばの貯金箱の活動」の説明の様子



- ・三浦和美先生から、言葉の貯金箱の合言葉である「ちゃりーん」や、誰かが切り取ったものを全員で「いいね！」と評価しあうといった説明がされました。活動を通して語彙を増やせること、それによって表現力が広がることの素晴らしさについての説明がありました。
- ②新聞から好きな言葉や写真を切り抜き、台紙に貼り付ける活動
- ・合言葉である「ちゃりーん」や、切り取った言葉や写真を全員で評価しあう「いいね！」の声会場に響き渡っていました。



6. 発表

作品その 1 (高学年児童の作品…漫画やお祭り)



作品その 2 (自分の好きなものや貯金箱)



7. 参加者の感想

- 高学年男子：今日のことばの貯金箱で新聞を作るのはとても大変で新聞を作っている人はとても頑張っています。それに新聞は全然読まないけれど読むと楽しいのでよく読んでみたいです。
- 中学年男子：このイベントをやる前は、新聞を読まなかったけどこのイベントをやってから新聞を読みたくまりました。
- 低学年女子：絵を描くのが楽しかったです。
 - ・写真を切り取ったり絵を描いたりして楽しかったです。また来てほしいです。
 - ・ことばや絵を切り取ったことがとても楽しかったです。
 - ・難しかったけど、出来てよかったです。
- 教員(三浦和美先生)の感想：昨年度の取り組みを生かし、三年生が二年生に教える形で協力し合い準備を進めてきました。1 回目の参加者は 4 名でしたが、子どもたちは集中して新聞から、ことばやイラスト写真を切り抜いて楽しそうに活動していました。「楽しかった」「また来たいと思います」という声に学生たちもほっとした様子でした。保護者の方の関心も高く、子どもたちの活動を見守っていました。次回への声掛けや申込用紙の配布などを学生が積極的に行っていたことも次につながる手立てになったと思います。
- 学生の感想：子どもたちが新聞を見て「こんな記事があるのか」「これを切り取ろう」など積極的な姿勢が見られてよかったです。ことばの貯金箱を子どもたちと行ってみて、ことばの掛け合いがとても重要であると感じました。初めは緊張して話しかけても大人しかった子どもがこの活動を通して最終的には返事をしてくれたり好きなものを教えてくれたりなど、心の中を表現してくれたのではないかと感じています。
 - ・児童が作業を楽しみ、集中していた。進んで「ちゃりーん」や「いいね」が飛び交っていて良い雰囲気作りができたと思います。児童がより頑張ったと思えるような充実感を目に見えて実感できるように修了証や称号を作るとなると、質の高い活動になるのではないかと考えます。

8. 活動を通じて学んだこと、課題

8.1 よかった点

○学生たちが、ことばの貯金箱の活動を事前に実施していたため、当日の活動の際に良い手順でスムーズに活動を行うことができたという点です。学生自身も児童に対してこのようなサポートをすればよいのか、大まかな活動の流れを頭で把握していた結果、このようにスムーズに進行ができたのだと思います。

○児童より学生の人数が多かったため、常に会話が生まれ楽しく活動することができたという点です。机間指導も充実しており、何より一緒に作成をすることで、学生がしていることを児童が実際に目にすることでどのようにやれば良いのかを見て真似することができたということが一番です。

○活動時間が増えた点である。「ちゃりーん」という声に対して全員が「いいね」と反応することで活動に対しての時間がじっくりと取れたという点はとてもよかったし、当日の時間配分や日程もよかったことも挙げられました。

○今回の活動の参加者が複数校から来られたという点です。前は1校からの参加者でしたが、今回は3校からの参加者が訪れ、次回の参加者の増加が期待

されます。

8.2 課題

●児童に充実感や達成感を目に見える形で実感できるようにしたほうがよいという点です。活動をただ楽しかったというだけで終わらせないように目に見える形で達成感や充実感を実感できるよう、〇〇マスター等の称号や修了証を作る形を次回から行いたい。また、今回その場で用意した児童に書いてもらう感想用紙なども事前に準備するようになりたいと思います。

●用意していた備品の見直しである。今回用意したスティックのりが使用しにくいということが今回の活動で分かりました。実際に活動してみないと見えてこない課題があるのだと感じました。次回は児童のサイズに適した備品をそろえて臨みたいと思います。また、ペンで書く際の下敷きやのりを張る際の台紙なども準備する必要があることが分かったので、次回は万全な準備を行いたいと思います。

●役割分担の見直しです。前回の活動の反省を踏まえ、事前準備できちんと役割分担をしたが、やはり負担が大きい学生が何人か出てきました。今回の活動を踏まえ、役割の人数の編成などをもう一度見直し、次回につなげていければと思います。

2. ことばの貯金箱 in 七ヶ浜 その2

報告者 吉田 美菜子

1. 活動日時

平成27年11月29日(日)
11:20～17:00

2. 開催場所

七ヶ浜国際村

3. 参加者状況

対象者：七ヶ浜町の小学生及びその保護者
参加者数：7人(小学生7人)
開催者数：17人(学生16人 教員1人)

4. 開催内容

当日の日程
11:20 下馬駅前 集合
11:20～12:20 移動(ぐるりんこ)
12:20～12:50 到着、会場設営、昼食
12:50～13:00 受付
13:00～13:15 開始、ことばの貯金箱の説明
13:15～14:20 作成
14:20～15:00 発表、終了
15:00～15:30 撤収作業
15:30 完全撤収
16:00～16:45 移動(ぐるりんこ)
16:45 下馬駅前 解散

5. 活動報告

5.1 会場設営の様子〔セミナー室 3〕



- ・会場は 4 人がけテーブルを 2 つに合わせたものを 3 セットと、ホワイトボードを用意しました。合わせたテーブルに 6 人ずつ座らせて活動を行う場を設定した。

5.2 「ことばの貯金箱 in 七ヶ浜」の活動の様子

① 「ことばの貯金箱の活動」の説明の様子



- ・前回は先生が行った進行役をゼミ長である田中さんが行いました。初めての参加者もいたので、ことばの貯金箱の意味ややり方などを丁寧に説明しました。
- ・活動を通して語彙力を増やせること、それによって表現力が広がることの素晴らしさについての説明がありました。

②新聞から好きな言葉や写真を切り抜き、台紙に貼つける活動



- ・合言葉である「ちゃり〜ん」や、切り取った言葉や写真を全員で評価し合う「いいね！」の声が会場に響き渡っていました。

6. 発表

作品その 1 低学年児童の作品…《2 回目の参加》



作品その 3 (低学年児童の作品 テーマ“ペッパーの悩み”《初参加》テーマ“グリコが考えていること”…)



7. 参加者の感想

- 高学年男子：今日の言葉の貯金箱では、前回のときと新聞が違っていただけで、今回のほううまくできたので良かったなと思いました。新聞の大切さやありがたみなどが分かることができ良かったです。
- 中学年男子：前は4人だけだったけど、今日はたくさん来てくれてよかったし、いろいろ知ったからよかったなと思いました。
- 低学年女子：疲れたけど楽しくて嬉しかったです。大きいのもあったし、小さいのもありました。おうちでもやってみます。
- ・1回目より上手にできて良かったです。3回目もきたいです。おもしろかったです。
- ・絵を描くのが楽しかったです。
- 教員の感想：回数を重ねることで新聞への関心が高まり、子どもたちの生活に活かされていることが分かりました。息の長い支援にしていきたいと思えます。次回への課題も意識して活動できればと考えています。
- 学生の感想：ただ活動をするだけでなく、声かけに目的や意味を持たせ、次回は今回よりも深みのある

活動になるように頑張りたい。

- ・活動を重ねてきたことで、流れや必要な支援を把握出来てきて、スムーズな活動ができるようになってきていると感じた。また、参加者も二度目の参加で慣れてきたのか、うまく時間を活用して工夫を凝らした作品を作っている様子が見られ、回を重ねることの意味を考えられるものになった。また、新たな参加者も増えて一人ひとりの個性を垣間見ること、教育者を目指す身として勉強になる貴重な体験にもなった。

8. 活動を通じて学んだこと、課題

8.1 良かった点

- 参加した子どもたちに配布したことや充実感を目に見える形で実感できるようにしたほうが良いという意見を取り入れ、今回から修了書を制作しました。修了証には、参加した分だけシールがもらえるというシステムにし、活動が終わってから配布したところ、子どもたちは喜んでいました。
- 前回の反省を生かし、子どもたちに合ったサイズのノリを準備したことで、スムーズに活動ができました。ノリで貼る時に下敷きを準備し、片づけの時間も短縮された。
- 活動のグループ編成は、知っている子同士割り振りました。そのため、スムーズに盛り上がっていたり、子どもたち同士話していたり、場の雰囲気が和やかになりました。

8.2 課題

- 低学年の子どもたちへの配慮である。新聞だけでは漢字が多く、言葉も難しいということが1年生と一緒に活動していた学生から挙げられました。絵や写真が多く使われている子ども新聞や広告を3回目の活動では準備していきたいと考えています。また、発表の際、特に1年生は学生の補助をつけるとよいということが挙げられました。
- 活動の空間の見直しで床にブルーシートを敷き広く場所を取って活動したらよいのではないかとという提案があり、次回は伸び伸び活動できる空間を作りたいと思います。

●活動の際の子どもたちへの支援の仕方である。低学年のこどもたちへの配慮も含め、どんな作品を作り

たいのかなど制作中の声かけなどもしていきたいと考えます。

3. ことばの貯金箱 in 七ヶ浜 その 3

報告者 高橋 侑里

1. 活動日時

平成 27 年 11 月 29 日 (日)

11:20 ~ 17:00

2. 開催場所

七ヶ浜国際村

3. 参加者状況

対象者：七ヶ浜町の小学生及びその保護者

参加者数：5 人 (小学生 5 人)

開催者数：15 人 (学生 14 人、教員 1 人)

4. 開催内容

当日の日程

11:20 下馬駅前 集合

11:20~12:20 移動 (ぐるりんこ)

12:20~12:50 到着、会場設営、昼食

12:50~13:00 受付

13:00~13:15 開始、ことばの貯金箱の説明

13:15~14:20 作成

14:20~15:00 発表、終了

15:00~15:30 撤収作業

15:30 完全撤収

16:00~16:45 移動 (ぐるりんこ)

16:45 下馬駅前 解散

5. 活動報告

5.1 会場設営 (セミナー室 3)

・前回までの反省を生かして会場は 4 人がけテーブルを 2 つ合わせたものを 2 セット用意した他、セミナー室半分にブルーシートを広げて床いっぱい活動できるよう設定しました。

5.2 「ことばの貯金箱 in 七ヶ浜」の活動



1 「ことばの貯金箱の活動」の説明

・ゼミ長である田中千智から、簡単な説明とどのような言葉を集めるとよいか話があった

5.3 「新聞から好きな言葉や写真を切り抜く



・「ちゃり〜ん」「いいね!」のやりとりがあふれる会場に楽しくなってきたのか徐々に参加者の声もはつきり聞こえ始めました。今回から子ども新聞も導入したことで、言葉も探しやすくなりました。

5.4 ジャグリの活動鑑賞

実際に皿回しを体験したり、ジャグリングを鑑賞したりしました。驚きの技の連続に参加者からも自然と拍手がおこっていました。時間の関係で途中退室しました。



6. 発表

作品その1 低学年児童の作品…《3回目の参加》



作品その2(低学年児童の作品)

テーマ“くりのすけの頭の中”家庭で事前にことばを切り抜いてきた



7. 備考

今回参加者に感謝の気持ちを込めて前回までに撮影した写真を入れたフォトフレームを配りました。当日2名欠席者には郵送しました。



8. 参加者の感想

- 低学年女子：3回目がいちばんたのしかったです。(はるのがたのしかった。)
- 低学年女子：3回目で、くりのすけがうらないをしたり(お気に入り)、山形にいきたいといって、そこが、お気に入り切ってよかったなあと思いました。また来年したいです。楽しかったです。
- 教員の感想：最後の回では、子どもたちが意欲的でも短時間で活動できていることに驚きを感じました。月に一度定期的に活動する良さが出ました。来年以降も継続して復興の役に立てたらと思いました。
- 学生の感想：いいと思った言葉を探すこととテーマを決めることが順序次第で、矛盾することに苦戦しました。活動の目的を、例えば、新聞に触れて興味

を持たせる、するならば、もはや、自分のいいと思っ
た言葉を探す前にテーマを決めた方が、特に低学年
の子どもたちはやりやすいと感じました。

- ・ブルーシートを敷いたことで、前のめりで新聞に向
かい、個人の活動に集中できるなどの効果がありま
した。
- ・児童と同じ目線になって好きなものや興味のある文
字や写真を見つけて、一緒に作品を作ることができ
ました。しかし、やはりテーマに沿った作品を作る
ための支援や導き方というのは難しく、今後の課題
となりました。このような課題はこれから小学校の
教師になるにあたって必要になることであるため、
貴重な経験ができました。

9. 活動を通して学んだこと、課題

9.1 良かった点

- 前回まではすべて机で活動を行っていたが、もとも
と新聞という大きな対象を扱う活動であることと参
加人数が徐々に増えたことで狭そうな印象を持って
いました。その反省をいかしてブルーシートを敷き、
床での活動を今回導入した。参加者は広々と新聞を
広げ、思い思いの言葉探しに集中できていました。
- 参加者に低学年児童が多いこともあって漢字が多く
読みづらいためか、写真やイラストに偏った作品に
なる傾向が見られました。そこで今回子ども新聞を
何部か用意することで文字も集めやすいよう配慮し
ました。
- 前回から配布し始めた終了証のほか、前回撮影した
作品や集合写真を収めた写真フレーム、ことばの貯
金箱の要領で切り貼りされた感謝状など形に残る参
加記録をプレゼントしたところ、参加者もとても喜
んでいました。また、参加者とその保護者にはアン
ケートを記入してもらい、今後の改善に活かしたい
と考えています。毎回作品とともに渡していた新聞
紙は、家庭でも新聞を開いて読んだり、この活動を

行うことで、親しみを持ってほしいという願いを込
めてのものでした。実際、家庭で気になる言葉を集
めて今回参加してきてくれた参加者もおり、参加者
側も次回を期待してくれているように感じられ、主
催側もこの活動をこれからも続けていきたいという
強い思いを改めて抱くことができました。

9.2 今後の課題

- 良かった点として挙げたブルーシートなどであった
が、予想に反して全員が床での活動を希望したため
に、多少手狭な状態からのスタートとなりました。
幸いにも七ヶ浜国際村のほうで貸し出しが可能で
あったため、急きょ床での活動範囲を広げることが
できたものの、回を重ねたことで得られる経験を活
かして様々な想定をし、しっかりとした準備をおこ
なうことが今後の課題です。
 - 活動の趣旨の確認である。前回の反省をもとにど
うテーマをもたせるかという課題が中心にありまし
た。しかし、テーマにこだわりすぎると趣旨がずれ
るのではないかという意見も挙がり、難しい問題で
あることが分かったのでゼミの中で話し合うことが
大事であると考えます。
 - 他の企画との連携の可能性を考えることです。今回、
同じ東北福祉大学のじゃぐりが七ヶ浜国際村で演
目を披露していました。参加者の保護者の方からも
ぜひ見たいという意見があったことから、タイムス
ケジュールに入れたが、時間の関係上少ししか見学
することができませんでした。最初の設定としてそ
れぞれの企画が連携して少しずついろいろな体験が
できるお祭りのようなイベントにできれば、参加者
の得られるものがさらに増えるのではないだろうか
と考えます。
- 今年度の活動に当たり、ご指導いただきました事務局
の先生方に心より御礼申し上げたい。

II. ASOBO 活動報告

1. 事業名及び趣旨

事業名：「ASOBO」

趣旨：本企画では、日本語とは言語体系が異なる英語に七ヶ浜町の子どもたちが親しめるような支援として「体験的英語教育」を中心とした指導を実施する。また、体験的英語教育を通して、英語を座学で学ぶだけでなく、実際の物を見て・触って・肌で感じるなど身体全体を動

かしながら学習をする方法で子どもたちに英語の楽しさを知ってもらうことを目的とする。

2. 開催団体名

東北福祉大学子ども支援プロジェクト
ファングループ

1. ASOBO in 七ヶ浜 その1

報告者 平野 裕司

1. 活動日時

平成 27 年 11 月 1 日 (日)

12:30~16:00 (参加者活動時間)

2. 開催場所

七ヶ浜町中央公民館 (生涯学習センター)

宮城県宮城郡七ヶ浜町吉田浜字野山 5-9

電話 :022-357-3302

3. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学生及びその保護者

募集人数：七ヶ浜町の小学生 20 名、保護者 20 名

参加児童数：17 人

(小学生 1 年生 8 人、2 年生 4 人、3 年生 3 人、
4 年生 1 人、5 年生 1 人)

保護者：3 人

開催者数：28 人 (学生 27 人 教員 1 人)

4. 開催内容

当日の日程

11:10 ~ 12:30 会場設営

12:30 ~ 13:00 受付

13:00 ~ 13:15 開始 はじめの会 (活動内容と注意事項を参加児童に対して話す)

13:15 ~ 15:00

活動：「自己紹介」「the big pig」「英語で季節を学ぼう！」
「ハロウィンについて」

15:00 ~ 15:45 ハロウィンパーティー

15:45 ~ 16:00 終わりの会

16:00 ~ 16:45 片付け

17:00 解散

5. 活動報告

5.1 会場設営の様子

英語活動を行う場所として和室 (二部屋) を借りた。1 つの部屋にはプロジェクター、もう一つの部屋に黒板を設置した。真ん中は襖で区切り、活動ごとに子どもたちに移動できるようにした。

また、保護者の情報交換会を行うために研修室を (一部屋) 借りた。保護者の情報交換会の他、保護者の待機スペース、学生の控室として利用した。

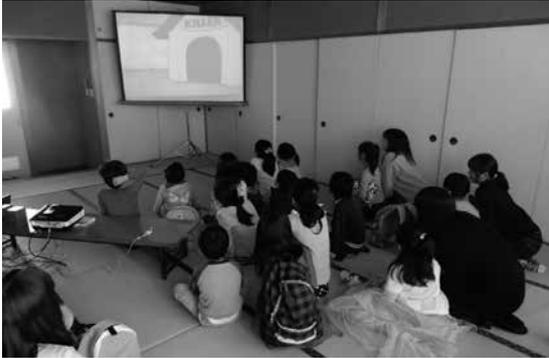
5.2 「ASOBO in 七ヶ浜」活動の様子

①受付 12:30~13:00

会場に到着した次第名札の作成を行ってもらった。作成時は学生がサポートを行った。



名札の作成の終わった子どもから英語の DVD 鑑賞をして、13:00 まで待機。



②はじめの会

活動の説明、活動の注意事項（楽しく活動を行うためのルール）を説明した。

また、担当教員のファン先生からのご挨拶をいただいた。



③自己紹介

魔女が登場し、自己紹介のお手本をみせた後、子どもたちも一緒に簡単な自己紹介を行った。自己紹介は多くの子どもができており、子どもによっては「I like~」まで話せる子どもも多かった。参加学生の方から次回、荒井東で実施する際はもう少しレベルをあげて自己紹介を実施しても良いとの意見があった。



④「The big pig」

ブタのぬいぐるみ（大・小）を子どもたちに見せて、「大きい」と「小さい」など視覚的に分かりやすい英単語を学習した後、簡単な動作を付け加えて（歩く、走る、食べる、泳ぐなど）英語を文章でいう練習を行った。子どもたちは座学で学習を行うのではなく、ブタが何をしたのか発音し、一緒にその動作を行った。保護者の方からは普段の学習方法と違う体験的学習が効果的であると好評をいただいた。

一方、「too」などの英単語の意味を理解していない子どもも多く、指導方法における改善の必要を感じた。



⑤「英語で季節を学ぼう」

季節のカード（サンタクロース・ハロウィンのかぼちゃ・すいかなど）を準備し、季節ごとに分類する活動を行った。その後、グループまたは個別に絵に該当する季節を英語で言う練習をした。

子どもたちは「Spring・Summer・Winter」はわかっていたが、「Autumn：秋」がわからない子どもが多かった。

今後、子どもに対して「Autumn：秋」など覚え方（意味づけ法等）も指導できるように準備をしたい。また、活動時間が長いのではないかと意見がでたので、次回（荒井東での活動）までに修正する予定である。



⑥保護者情報交換会

3名の保護者の方が参加。

担当教員の先生が挨拶を行い「気軽に保護者同士での情報交換や、私たちに質問したいこと、要望等話しましょう」という和やかな雰囲気の中で保護者情報交換会が行われた。

※参加者の方に話の内容を報告書等に掲載すると事前に了承をいただいた。

Aさん

「子どもの祖父はアメリカ人で英語が話せます。でも、私の子どもは英語が全く話せないのでコミュニケーションはとれないし、英語があまり好きではありません。親としては祖父と会話をするのに英語が必要だし、英語が話せたらこれから社会に出た時に役立つと思うし。英語の塾にも行ってもらいたいと思ってはなしたが、いつも嫌と言っている。今回は『ハロウィンパーティーに行かない?』と聞いたところ『行きたい』と言って参加しました。英語が苦手な子どもは行事とか楽しい活動とセットのほうが参加すると思うので、今後継続してこのような活動を行ってもらいたいです。」

Bさん

「昨年と今年2回目の参加です。子どもが学校から案内をもらってきたので申し込みを行いました。七ヶ浜ではわりと地区対抗行事やスポーツイベントが多くて、なかなか英語などの活動はありません。なので、このような活動があつてすごく良いと思います。子どもに親がいくら『英語を勉強しなさい!』と言っても嫌がるのに、昨年の活動から本人が英語に興味を持ち始めたようで今年も参加したいとのことで申し込みを行いました。昨年よりは内容が簡単なようにも思えました。もう少し難しくしても良いかもしれません。あと、継続してこのような活動を行ってもらいたいです。」

Cさん

「初めての参加です。友達のお母さんから話を聞き参加しました。英語の塾に通っている子どもは季節の活動でハロウィンパーティーなど行っているようなのですが、そのほかの子どもはなかなかそのような体験ができないので良い機会と思って参加することにしました。英語＝

難しい・大変になりつつあるので、このような活動を通して英語が何故必要なのか、英語の楽しさ等を学ぶきっかけになればよいと思います。

また、大学について子どもも大人も知らない人が多くいます。大学がどのようなところなのか将来に向けて知りたいので、七ヶ浜での開催だけでなく大学での開催等もあるといいなと思います。」等の意見がでた。

この後、ハロウィンパーティーの会場に移動をした。ハロウィンパーティーの会場では情報交換会には申し込みをしていなかった人もおり、その人たちも英語教育に対する不安や教育に対する不安・取り組みなど先生・学生に話す姿がみられた。

今回、情報交換会を行い、七ヶ浜町の英語活動の取り組みや、保護者の方が抱える悩み、実践している取り組み等を知ることができた。まとめとして今回でた意見を来年度の活動につなげたい。また、保護者の方からはもっと活動をしてほしいとの意見もあった。

⑦「ハロウィンパーティー」

子どもたち最初にハロウィンの映像をみて、どのようなお祭りなのか質問した。

映像を鑑賞したあとは、保護者の待つハロウィンパーティーの会場に移動。ここでは、子どもが保護者に今日の活動を話す場面がみられた。また、ハロウィンパーティーでは子どもは仮装をし、各ブースを回った。ブースはチェキで写真を撮るブース。お化けの手を作るブース。飲みものをもらうブースなどを設置した。それぞれ、学生がサポートしてブースを回った。

子どもから「ハロウィンの活動を始めてやった。ポップコーンでお化けの手を作ったり、お兄さんとお姉さんと一緒に英語を勉強できて楽しかった。」「お母さんにがんばったねえ!と褒めてもらえて嬉しかった。ご褒美のお菓子ががんばった分もらえてよかった。また、参加したい。」との感想をいただいた。

保護者のからは「写真に残してくれるので、思い出になる。普段は忙しくて写真を撮っても整理することもできない。学生さんと子どもと一緒に写真を貼ったカードを作ってくれたので良かった」と特にチェキのコーナーが好評であった。



6. 参加者の感想

小学校 1 年生

「ブタの活動が楽しかった。英語頑張って勉強したいと思った。」

「お姉さんが一緒にいて、わからないところと一緒に言ってくれた。学校とちがって楽しかった」

小学校 2 年生

「英語をもっと勉強したい。」

「幼稚園が一緒だった友達と一緒に勉強できて良かった。」

小学校 3 年生

「少し簡単だったけど、お兄さん・お姉さんと勉強できて良かったです。」

小学校 4 年生

「学校とは違う勉強の仕方楽しかった。ほかの単語の覚え方とかも知りたいと思った。」

小学校 5 年生「低学年ばかりで少し暇かと思ったけど、お姉さんが一緒に活動をしてくれたので楽しかった。中学校に向けて英語をもっと勉強したい。」

7. 活動を通じて学んだこと、課題

今回の企画を実施するにあたり、良かった点は 3 点ある。

1 点目は、子ども達が積極的に活動に参加し、異文化を理解し、楽しむことができたということが挙げられた。ハロウィンという異文化の行事を中心におくことで英語に対して興味を持つことができたなどの肯定的意見が多数みられた。

2 点目は、「学校と違う勉強の仕方わかりやすかった」という感想が多かったことである。私たちは今回、体験的英語学習ということで座学ではなく、実際に触ったり、動いたりする活動を取り入れて行った。学校で学ぶ方法とは違った、体験的英語学習の方法の効果を明らかにし、これから行う活動でも実施していきたい。

3 点目は、保護者から子どもたち英語を学ぶことにおいて不安を減らし、モチベーションをあげるきっかけになったとの肯定的評価が得られたことが挙げられる。以下、保護者からいただいたお礼の電話内容を紹介する。

「普段、いくら英語の塾に行こうと言ってもダメだった子どもが『楽しかった』と言って帰ってきました。また、写真に残してくれたので思い出になる。普段は忙しくて写真を撮っても整理することもできない。学生さんと子どもと一緒に写真を撮って、撮った写真を貼ったカードを作ってくれたので良かったです。私は今日行けなかったのでどうしてもお礼が言いたくて電話をしました。情報交換会に参加したお母さんから英語の学習方法や他の子どもが通っている塾についても聞きました。また、是非七ヶ浜で活動を行ってください。」

今回は 1 回で活動が終了してしまうので今後どのようにしたら継続できるのか検討していきたい。

一方、改善点は 2 点挙げられた。

1 点目は、自己紹介が単純すぎて興味を引く要素が足りなかったという反省である。子どものほとんどは学校での活動等で自己紹介をすでに経験していることが多かった。英語の学習の程度を事前に把握して学習の程度にあわせた活動を展開できるようにしたい。

2 点目は、全体の活動における時間の配分である。一つの活動にあまり時間をかけすぎると全体のバランスが取れにくいことと、子どもたちが飽きる可能性もあると思われるので次回の活動の際は、話す時のテンポ等も考

えてプログラムを作成する必要があるとの意見がでた。
1月29日実施の荒井東での活動に向けプログラム内容の見直しを実施する。

最後に

昨年に続き七ヶ浜での活動は2年目になる。参加者の中には昨年も参加した子ども、保護者もあり、子どもの成長を聞く場面もあった。

今回の活動で私たちは大学の授業で学ぶだけでなく、

現場に出て実践することの意味・継続して行うことの大切さを改めて感じた。

保護者の方、子どもと関わり、「どのような現状にあり、どのように考えているのか。どのような支援が必要なのか」改めて考えるきっかけになった。

昨年も参加してくれた子どもの成長や保護者の方から聞く話で私たちは逆に多くの学びとパワーをもらった。

今回、感じたこと学んだことを忘れることなく、これからの活動に取り組みたいと考える。

2. ASOBO in 荒井東

報告者 平野 裕司

1. 活動日時

平成27年11月29日(日) 12:30～16:00(参加者活動時間)

2. 開催場所

一般社団法人 荒井タウンマネジメント
仙台市若林区荒井御散田3

3. 参加者の状況

対象者：荒井東地区の幼稚園年中・小学生

募集人数：荒井東地区の幼稚園年中・小学生20名

参加者小学生内訳19人・幼稚園児3人・保護者12名

合計34名

学生スタッフ：36名(東北福祉大学学生)

担当教員：1名

合計：71名

4. 開催内容

当日の日程

11:00 学生到着・ミーティング

12:30 受付開始(2階で受付。終わった人から3階へ移動。DVD準備。)

13:00 はじめの会(担当教員挨拶等)

13:10

～移動～(2階・3階が英語活動場所になります。階段で移動)

13:25

14:25 保護者活動見学(15分くらい見学)

15:00 全体会

①活動の振り返り(当日撮影した写真を保護者の方に見ていただいた。)

②写真撮影

15:45 閉会式(1階カフェスペース)

16:00 解散

5. 活動報告

5.1 会場設営の様子

英語活動を行う場所として2部屋(2・3F)を確保。

また、保護者の情報交換会を行うためにカフェを借りた。保護者の情報交換会の他、全体会の実施場所として利用した。

5.2 「ASOBO in 荒井東」活動の様子

①受付 12:30～13:00

会場に到着した次第名札の作成を行ってもらった。作成時は学生がサポートを行った。

名札の作成の終わった子どもから3Fの会場に移動し、13:00まで待機。

②はじめの会

活動の説明、活動の注意事項(楽しく活動を行うためのルール)を説明した。

また、担当教員のファン先生からもご挨拶をいただいた。



③英語活動：自己紹介

自己紹介のお手本をみせた後、子どもたちも一緒に簡単な自己紹介を行った。自己紹介は多くの子どもができていた。幼稚園児の子どもには学生がサポートとして入った。また、話せる子どもはレベルを上げて行ってもらった。



④英語活動：「The big pig」

ブタのぬいぐるみ（大・小）を子どもたちに見せて、「大きい」と「小さい」など視覚的に分かりやすい英単語を学習した後、簡単な動作を付け加えて（歩く、走る、食べる、泳ぐなど）英語を文章でいう練習を行った。子どもたちは座学で学習を行うのではなく、ブタが何をしたのか発音し、一緒にその動作を行った。保護者の方からは普段の学習方法と違う体験的学習が効果的であると好評をいただいた。



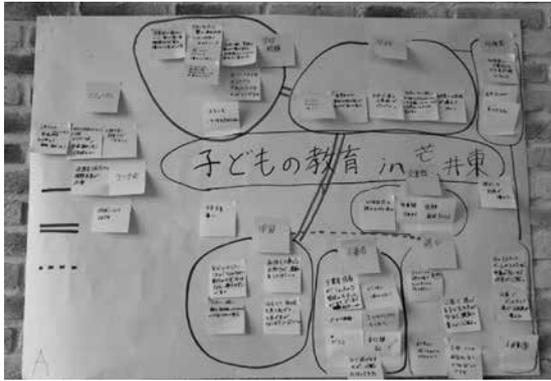
⑤英語活動：「英語で季節を学ぼう」

季節のカード（サンタクロース・ハロウィンのかぼちゃ・すいかなど）を準備し、季節ごとに分類する活動を行った。その後、グループまたは個別に絵に該当する季節を英語で言う練習をした。



⑥保護者情報交換会

荒井東地区での活動は今回がはじめてである。荒井東地区は地下鉄が 12 月に開通することにより便利になることにより、多くの人が移住をしてきている。一方で復興公営住宅も建設された。そのような状況で荒井東地区にどのような教育ニーズがあるのか BS 法と KJ 法を用いて実施した。



⑦全体会

活動の振り返り（当日撮影した写真を保護者の方に見ていただいた。）

写真撮影



6. 参加者の感想

小学校1年生

「楽しかった。英語おもしろかった。」

小学校2年生

「英語をもっと勉強したい。」

「みんなと活動できてよかった。」

保護者 A 様

昨日はありがとうございました。

子どもたちも楽しかった！とても喜んでいました。私も色々お話ができてよかったです。

また参加させていただければ子どもたちも喜ぶと思います (^_^)

保護者 B 様

昨日は親子共々、貴重な体験をさせていただきました。楽しい時間をありがとうございました。

保護者 C 様

今までにない、充実したイベントだったと思います。皆さま方、お世話様でした。

次の予定が決まりましたら、また、ご連絡よろしくいお願いいたします。

保護者 D 様

昨日は大変有意義な時間をもつことができ、また子どももとても楽しかったと大満足でした。ありがとうございました。

どんどんこういう機会を作っていただき、勉強だけでなく人の付き合い方や集団行動力を身につけてほしいです。ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

7. 活動を通じて学んだこと、課題

「ASOBOin 荒井東」の活動を実施し、地域に出て実際にボランティアを行うことの大切さ、難しさを改めて感じた。

今回、私たちが活動を行う上で心がけたことは「ニーズに基づく支援」である。ボランティア活動の多くはあらかじめ決まった企画を提案し、募集を行う。そのため実施地域のニーズに基づかない活動になり、支援者側からの一方的な支援になりがちである。私たちは昨年からの取り組みである子ども支援プロジェクトに参加し、相互理解がされた活動、ニーズに基づく支援を目指し実施してきた。今回実施した「ASOBOin 荒井東・七ヶ浜」の活動においても、地域の人のニーズに基づく支援を展開すべく取り組んだ。

今回の活動を通しての成果は以下のことがあげられる。

1 点目は、子ども達が英語に親しみながら楽しんでいったということである。子どもたちが「英語できた！」「楽しかった」「A君と仲良くなれた」などの話をしてくれた。保護者の方との振り返りでは「今まで嫌がっていた英語を『楽しい』と言って勉強をしてくれてよかった。また、英語を楽しく勉強するだけでなく、英語の活動で子どもたち同士の交流もできた」と話してくれた。最後に子どもたちが「また来たい！」という発言も聞かれた。

2 点目は保護者の情報交換ができたことである。今回、プログラムの一貫として KJ 法を用いた保護者の情報交換会を実施した。事前に子育てグループの代表の方に相談した際、保護者の方々が課題と思っていることがなかなか思っているだけで、明確になっている課題があると相談を受けていた。今回は子育てグループに所属する保護者の方、所属していない方がいた。KJ 法を行ってみると、1 人の方が普段課題と思っていることを、他の人も課題に思っており、保護者の方同士共感し改めて問題意識を持ち、今後協力して取り組んでいく方向になった。今回の KJ 法を用いた情報交換会では改めて目に見えるかたちにすることの大切さを感じた。

子どもの英語活動については保護者の方より『「子どもが英語楽しかった!」と話してくれてよかった。「学生が思った以上に子どもたちの世話になれていて驚いた」「今

後もこのように勉強と遊びを提供してほしい」「今後、一緒に活動をやりたいです』』とっていただいた。

反省点としては以下の通りである。

今回、子どもの英語の学習状況を事前に把握するため、参加申込書に英語の学習状況に関するアンケートを掲載した。しかし、記入はしていただいたもののあまりいかすことができなかった。今後、活動を行う際検討したい。

最後に

今回の活動で私たちは大学の授業で学ぶだけでなく、現場に出て実践することの意味・継続してボランティアを行うことの大切さを改めて感じた。また、保護者の方や子どもと関わり、「どのような現状にあり、どのような課題があるのか」「どのような支援が必要なのか」改めて考えるきっかけになった。

Ⅲ. あそびの森ワークショップ

1. 事業名及び趣旨

事業名：あそびの森ワークショップ

趣旨：たくさんの素材や道具を使い、子どもたちの想像力を掻き立てる

ワークショップを実施する。親子や友だち同士のペアで創作活動を行うことで、協力し合うことの大切さを知ってもらう。

1. あそびの森ワークショップ その1

報告者 外館 みなみ

1. 活動日時：

平成27年11月29日（日）

13:00～15:00（12:45受付）

2. 開催場所：

七ヶ浜町生涯学習センター

3. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学生とその保護者

参加者数：6名（小学生5名、保護者1名）

開催者数：11名

4. 開催内容

当日の流れ

11:00 会場到着、リハーサル開始

12:45 受付

13:00 イン트로ダクション（あいさつ、今日の予定、注意事項）

13:10 自己紹介

13:20 ガイダンス（WS内容、テーマ、サンプル紹介）

13:30 素材・道具説明

13:35 制作①（まゆだま）

13:50 制作②（おはなしてぶくろ）

14:15 発表会

14:45 鑑賞会

14:55 リフレクション

15:00 終わりのあいさつ

16:00 撤収

活動報告

2. 開催団体名

東北福祉大学森ゼミ

5. 活動報告

①イントロダクション



受付を済ませた子どもたちの、今日呼んでほしい名前を名前シールに書いてもらい、WS開始時間になるまで簡単なアイスブレイクを行い、参加者の緊張をほぐしていく。

13:00となり、はじまりのあいさつ後、チーフファシリテーターから今日の予定、注意事項についてはなしをした。

②自己紹介



受付で書いてもらった名前シールに書いた今日呼んでほしい名前と、好きな動物について話してもらい自己紹介を行った。

③ガイダンス



まゆだま、おはなしてぶくろとは何かを、実際に見てもらいながら説明をし、今日のテーマ「あそびの森の動物園を作ろう」に沿って制作をしてもらうことを説明した。また、事前に学生で作成したサンプルを見てもらった。

④素材・道具説明



まゆだま作り、おはなしてぶくろ作りに使う素材、道具の材質や注意点を話しながら説明を行った。

⑤まゆだま制作開始

最初に手順説明を行い、それぞれまゆだま制作開始。フロアファシリテーターは、子どもたちの制作過程を見守りつつ、話しかけ、創作をしやすい環境作りを行った。

完成後は子どもたち全員で遊べるよう、ひとつの場所に集まってもらい遊んでもらった。



⑥おはなしてぶくろ制作開始



まゆだま同様、最初に手順説明を行い、それぞれおはなしてぶくろ作成開始。フロアファシリテーターは手順確認や、道具使用時の注意喚起なども合わせて行った。

完成後は、またひとつの場所に集まってもらい友だち同士、親子、ファシリテーターと一緒に遊んだ。

⑦発表会・鑑賞会



完成後書いてもらった作品レポートと作品を持ち、制

作者、作品の名前、作品の説明、作った感想を発表してもらった。子どもたち同士の質問もあり、終始和やかな発表会となった。

発表会后作品を集め、友だちの作品を見て付箋に感想を書いてもらう鑑賞会を行った。

⑧リフレクション

アイスブレイクから、ガイダンス、制作時、発表会などWSを通して撮影した写真をみながら振り返りを行った。自分が映ると恥ずかしがりながらも、子どもたちみなが写真に見入っていた。

⑨おしまいのあいさつ

最後に、チーフファシリテーターから2時間を通してのはなしがあり、全員でWSの恒例である「ありがとう、さようなら」を言い、終了となった。

終了後、感想を書いてもらい子どもたちを見送った。

6. 活動を通じて感じたこと、課題

今回、2度目の七ヶ浜町でのワークショップ開催だったが、今回も前回同様子どもたちに楽しんでもらえた活動となったのではないかと感じる。その証拠に受付時は、硬い表情で会場に入ってきた子どもたちが、ワークショッ

プ終了後会場を後にするときには、みなが笑顔で帰って行く様子がみられた。毎回、ワークショップ終了後に笑顔で帰って行く子どもたちを見る度に、嬉しさと、楽しんでくれたことや、無事ワークショップを終えることができたことで安堵の気持ちとなる。

しかし、楽しく、良い思い出ばかりではなく今回の活動を通して今後の課題も残った。課題点は2つ。

ワークショップ当日は、前日と当日にリハーサルを重ね、心配な点を取り除いていったため、アクシデントや当日の流れに心配な点はなかったが、前日準備段階で機材の持ってき忘れなどがあり、手間取っていた。そのため、すべての行動において予めリストを作成しておくべきであると感じた。その点を改善できれば、準備時間を短縮しリハーサルに時間をさくなどができ、効率も上げられるのではないかと思う。

2つ目は、広報活動についてである。七ヶ浜町でのワークショップ開催は2度目であるが、1度目の参加者は4名、そして今回2度目の参加者は6名となった。七ヶ浜町の多くの子どもたちを元気づけ、楽しんでもらうにはこの課題を解決していかななくてはならないため、今後も継続して七ヶ浜町でのワークショップ開催をしていきたいと感じた。

2. あそびの森ワークショップ その2

平成28年1月16日 報告者 本田 沙希

1. 活動日時：

平成28年1月16日（土）

13:00～15:00（12:45受付）

2. 開催場所：

アライデザインセンター3F

3. 参加者の状況

対象者：荒井東の小学生とその保護者

参加者数：5名（未就学児1名、小学生3名、保護者1名）

開催者数：11名

4. 開催内容

当日の流れ

10:10 会場到着、リハーサル開始

12:45 受付

13:00 イン트로ダクション（あいさつ、今日の予定、注意事項）

13:10 自己紹介

13:20 ガイダンス（WS内容、テーマ、サンプル紹介）

13:30 素材・道具説明

13:35 制作①（マラカス）

13:50 制作②（おはなし手ぶくろ）

14:15 発表会

- 14:45 鑑賞会
- 14:55 リフレクション
- 15:00 終わりのあいさつ
- 16:00 撤収

5. 活動報告

①イントロダクション

受付終了後、子どもたちに今日呼んで欲しい名前を名札に書いてもらい、WS 開始時間までアイスブレイクを行う。13:00からは始まりの挨拶、ワークショップの流れと注意点について説明した。



②自己紹介

自己紹介として、今日呼んで欲しい名前と好きな動物を発表した。



③ガイダンス

ワークショップでつくるマラカス、おはなし手ぶくろのサンプルを実際に見てもらい、全員で「あそびの森のなかまをつくろう」というテーマに沿ってアイデア出しを行う。



④素材・道具説明

マラカス、おはなし手ぶくろ制作の前に、制作の際に使う素材と道具の説明と注意点や怪我をした際の説明をした。



⑤マラカス制作

ファシリテーターから制作の手順の説明を行ってから制作に入った。プラスチックの容器の装飾が難しいこともあり、ファシリテーターがアドバイスをしながら作業を進めた。

つくり終わった後は、広いスペースに集まりみんなで遊んだ。



⑥おはなし手ぶくろ制作

マラカス同様、ファシリテーターが制作の手順を説明してから制作に入った。

紙だけでパペットを作るということで、素材も少なく、装飾もしやすかったので、子どもたちの作業もスムーズに進んだ。

つくり終わった後は、みんなで集まり遊んだ。

⑦発表会・鑑賞会



一人ずつ、作品の名前や説明、今日の感想などの発表をした。発表の後には、質問する時間もあり、お互いの作品について、気になったところについて質問があった。

発表会の後は、机の上に作品を集めて鑑賞会を行った。その際に、友だちの作品を見ての感想を付箋に書いてもらった。

⑧リフレクション



鑑賞会の後、もう一度集まってもらい、ワークショップを通して記録していた写真を流してみんなでワークショップを振り返った。子どもたちも自分が写真に写るとうれしそうに笑っていた。

⑨おしまいのあいさつ

最後に、チーフファシリテーターがワークショップの振り返りをした。その後、参加してくれた子どもたちとファシリテーター全員で「ありがとう、さようなら」の挨拶をしてワークショップを終えた。

6. 活動を通じて感じたこと、課題

今回の活動は荒井東での初めての活動であったため、会場準備の際などには大変苦労したが、ワークショップの終わりには、子どもたちから「楽しかった」という言葉を聞くことができた。私たちも無事に子どもたちとワークショップを終えられたことに安心した。荒井東での活動1日目に参加した子どもたちは、大人しく静かな子どもが多く、終始和やかな雰囲気で進化した。ファシリテーターも活動の中で声がけをし、円滑に進行できるように努めた。始めは、子どもたちも緊張しており、表情が硬かったが、ワークショップが進むにしたがって笑顔が増え、開催者側も参加者側も有意義な時間だったのではないと思う。

また、今回のワークショップを開催していく中でいくつかの課題を発見した。1つ目は、ワークショップへの応募の広報についてである。実施日が1月中旬だったため、年末年始を挟む形での広報となってしまい、参加者の呼び込みが上手く進まなかった。結果、前日まで参加者未定のまま準備をすることとなった。今後は、早めの広報を心がけたいと思う。2つ目は、ワークショップの内容である。今回のワークショップでは、未就学児の参加者がいた。もともとは、小学生向けの内容で考えていたため、作品シートの記入など、一緒に取り組めないこともあった。今回は、事前に参加者の年齢が確認できなかったため、対応が難しかったが、今後は、未就学児の参加も考慮し、誰でも楽しめるワークショップを開催できればと思う。3つ目は、危機管理である。ワークショップ中に子どもが椅子から降りようとしたときに、椅子が傾き、倒れてしまうことがあった。部屋のレイアウトなどには、配置にゆとりをもたせるなどの配慮はしていたが、椅子が倒れることまでは、気が回っていなかった。以上の点に気をつけて準備を進めれば、より良いワークショップになると思い、今後の課題として挙げた。今回、ワークショップを開催する中で、多くの学びと課題が見つかった。これらの学びを活かし、今後も活動を続けたいと考えている。

3. あそびの森ワークショップ その3

報告者 外館 みなみ

1. 活動日時：

平成28年1月17日（日）

13:00～15:00（12:45受付）

2. 開催場所：

アライデザインセンター3F

3. 参加者の状況

対象者：荒井東の小学生とその保護者

参加者数：8名（小学生6名、保護者2名）

開催者数：9名

4. 開催内容

当日の流れ

10:10 会場到着、リハーサル開始

12:45 受付

13:00 イン트로ダクション（あいさつ、今日の予定、注意事項）

13:10 自己紹介

13:20 ガイダンス（WS内容、テーマ、サンプル紹介）

13:30 素材・道具説明

13:35 制作①（まゆだま）

13:50 制作②（なりきり仮面）

14:15 発表会

14:45 鑑賞会

14:55 リフレクション

15:00 終わりのあいさつ

16:00 撤収

5. 活動報告

① イン트로ダクション

受付を済ませた子どもたちの、今日呼んでほしい名前を名前シールに書いてもらい、WS開始時間になるまで簡単なアイスブレイクを行い、参加者の緊張をほぐしていく。

13:00となり、はじまりのあいさつ後、チーフファシリテーターから今日の予定、注意事項についてはなしをした。



② 自己紹介

受付で書いてもらった名前シールに書いた今日呼んでほしい名前と、好きな色について話してもらい自己紹介を行った。



③ ガイダンス



まゆだま、なりきり仮面とは何かを、実際に見てもらいながら説明をし、今日のテーマ「あそびの森の仲間を作ろう」に沿って制作をしてもらうことを説明した。また、事前に学生で作成したサンプルを見てもらった。

④ 素材・道具説明



まゆだま作り、なりきり仮面作りに使う素材、道具の材質や注意点を話しながら説明を行った。

⑤ まゆだま制作開始

最初に手順説明を行い、それぞれまゆだま制作開始。フロアファシリテーター

ーは、子どもたちの制作過程を見守りつつ、話しかけ、創作をしやすい環境作りを行った。

完成後は子どもたち全員で遊べるよう、ひとつの場所に集まってもらい遊んでもらった。



⑥ なりきり仮面制作開始

まゆだま同様、最初に手順説明を行い、それぞれなりきり仮面制作開始。

フロアファシリテーターは手順確認や、道具使用時の注意喚起なども合わせて行った。

完成後は、またひとつの場所に集まってもらい友だち同士、親子、ファシリテーターと一緒に遊んだ。



⑦ 発表会・鑑賞会



完成後書いてもらった作品レポートと作品を持ち、制作者、作品の名前、作品の説明、作った感想を発表してもらった。子どもたち同士の質問もあり、終始和やかな発表会となった。

発表会后作品を集め、友だちの作品を見て付箋に感想を書いてもらう鑑賞会を行った。

⑧ リフレクション

アイスブレイクから、ガイダンス、制作時、発表会などWSを通して撮影した写真をみなで見ながら振り返りを行った。自分が映ると恥ずかしがりながらも、子どもたちみな写真に見入っていた。

⑨ おしまいのあいさつ

最後に、チーフファシリテーターから2時間を通してのはなしがあり、全員でWSの恒例である「ありがとう、さようなら」を言い、終了となった。

終了後、感想を書いてもらい子どもたちを見送った。

6. 活動を通じて感じたこと、課題

荒井東ワークショップ2日目は、今までワークショップを開催してきた中で一番やんちゃな子どもたちが集まったワークショップとなったことが一番印象に残る。そのやんちゃさ加減は、受付から、ワークショップ終了後の見送りまで見られた。しかし、そんな元気いっぱいな子どもたちに圧倒されながらも、無事ワークショップを終えることができ、安堵の気持ちと楽しい空間であったなという思いで胸がいっぱいである。また、2時間という短い時間ではあったが、参加してくれた子どもたち一人ひとりに、小さいながらも成長が見られたのではないかと感じる。受付時はお母さんから離れられずにいた子が、発表会ではしっかりとひとりで発表する姿を見ることができたり、終始はしゃいでいた子が、制作開始となると誰よりも集中して黙々と作品を作る様子を見ることができた。ほんのわずかな時間で子どもたちが成長をする姿を見ることができるのは、私たちにとってとても嬉しいことであり、このワークショップを開催して本当に良かったなと感じる場面でもある。

今回、子ども支援プロジェクト最後の活動ではあったが、まだまだ課題があるように思えた。

1つ目としては、ワークショップ前日準備段階での、お借りした会場の壁を不注意により破損させてしまったことである。ワークショップ当日の子どもたちへ怪我をさせないよう、私たち自身も怪我をしないよう注意を怠らず行ってきたが、活動の慣れからか、前日準備での注

意を怠ってしまったことを反省すべきであると感じる。今後、活動の場合には、前日準備からワークショップ開催、片付けまで、改めて気を引き締めて行っていきたいと思う。

2つ目としては、場所のメリハリ、時間のメリハリについてである。私たちの行うワークショップは SCSK 株式会社 CAMP さんから教えていただいた、ワークショップのあり方、ファシリテーターのあり方に基づいて行われているのだが、ワークショップを行う際重要なこの2点への配慮が疎かになってしまった。場所の問題としては、子どもたちが作品の発表会をする際、ステージ等を設けず円陣になった状態で発表会をしたことにより、子どもたちに「発表をする」こと、「友だちの発表を見る」ことについて、しっかり学んでもらえなかったのではないかと思う。次に時間の問題としては、会場に時計がなかったこと、時計がなかったら準備をしなくてはならなかったことである。ワークショップの流れを説明し、時間を分けたプログラムを設けていることから、子どもたちに時間を意識してもらいながらの作品制作をし、時間への意識を学んでもらいたいという意図があったが、時計の準備忘れにより学んでもらえなかったのではないかと思う。今後、この2点の改善を含めたワークショップづくりを行って行きたいと考える。

この活動で、今年度の子ども支援プロジェクトの活動が終了となったが、昨年度に引き続き、学ぶこと、感じることがとても多かったように思う。私たちが行ってきた活動によって、七ヶ浜町、荒井東の子どもたちの役に少しでもたてていたら嬉しく思う。

IV. ジャグリングって何だろう？ 活動報告

1. 事業名及び趣旨

事業名：「ジャグリングって何だろう？ ～みんなで一緒にやってみよう！～」

趣旨：七ヶ浜の小学生を集い、ジャグリングを通した自主企画イベントを開催する。

イベントでは小学生の道具体験、学生によるジャグリ

ングショーの披露などを行う。参加者同士の交流を深めながら、新しいものを見る、学ぶ、体験する力を養う。

2. 開催団体名

学生サークル「ジャグリコ」

1. ジャグリングって何だろう？ ～みんなで一緒にやってみよう！～

報告者 藤澤 寿美佳

1. 活動日時

平成 27 年 12 月 20 日 (日) 13:00 ~ 15:30

13:40 イベント本番 (7)

アンケート記入、閉会式

15:30 イベント終了、撤収作業

16:30 七ヶ浜国際村 出発、解散

2. 開催場所

七ヶ浜国際村 セミナー室 1

3. 参加者の状況

対象者：七ヶ浜町の小学生及びその保護者

参加者数：10 名 (小学生 5 名、未就学児 2 名、保護者 3 名)

この他 3 件 (小学生計 3 名、保護者計 2 名) の申込があったが、前日までにキャンセルの連絡が入り、不参加となった。

開催者数：19 名 (指導教員 1 名、学生 18 名)

4. 活動内容 (タイムスケジュール、イベント内容、活動状況)

タイムスケジュール イベント内容

10:00 七ヶ浜国際村 到着完了、会場準備
受付・開会式 (1)

10:30 リハーサル、最終確認
「みんなで遊ぼう！」 (アイスプレイング) (2)

11:45 昼休憩
道具体験 (3)

12:15 リハーサル、最終確認
休憩 (4)

12:45 受付準備開始
ジャグリングショー披露 (5)

13:00 ~ 30 受付
バルーンアート プレゼント、記念撮影 (6)

活動状況

集合、会場設営：

当日は移動する荷物が多く、公共交通機関での持ち運びが困難であると考えたため、指導教員の運転するレンタカーを使用した。その際、可能な限り大学周辺の参加学生も同時にレンタカーにて会場まで移動し、到着後すぐに会場設営を開始した。その他の参加学生は各自で多賀城駅まで移動し、一度会場にて荷物と学生を降ろしたレンタカーによる送迎で、後から会場に到着して合流した。

会場の設営に関しては、まず必要最低限の長机と椅子を残して活動可能なスペースを十分に設けた。床には参加者が座るためのジョイントマットを敷き、その後に壁やホワイトボードにクリスマス風の装飾やタイムスケジュールの貼り付けを行った。

会場設営終了後は昼食を取り、イベントのリハーサルや最終確認を行った。

受け付け、開会式：

受け付け時には、会場のセミナー室 1 の入り口付近にて参加者を迎えた。受け付けを早く済ませ会場に入った参加者に対しては、学生が雑談やジャグリング道具を少し披露したりするなど、緊張をほぐすために交流を図った。

開会式では学生代表の挨拶、企画目的の説明、本日のスケジュール確認、企画の盛り上げ役としてピエロに扮した学生の紹介等を行った。ここで参加者は企画の流れを理解したと思われ、その後のピエロの登場には特に興味を示しており、イベントの雰囲気作りのきっかけとすることができた。

「みんなで遊ぼう！」(アイスブレイキング)：

会場の緊張する雰囲気を解き、コミュニケーションを図りやすくするためにアイスブレイキングとして手遊びと仲間づくり遊びを行った。その中で自己紹介の時間も設けたことで、学生も参加者も互いを知る場をつくることができた。活動の中では学生の不慣れな部分があり、説明が伝わらず参加者が少し飽きてしまう場面もできてしまった。しかし活動自体は楽しむ様子で、笑顔が多くみられた。

道具体験：

ジャグリングの道具にはどのようなものがあるのか、参加学生が実際にやって見せながら [4 つ] の道具の簡単な説明を行った。その後、参加者には説明した道具のうち 2 つ、お皿回しとディアボロ (中国ゴマ) を体験してもらった。お皿回しでは、子どもたちは皿を自力で回すことが難しい様子だったが、参加学生の説明や補助の中、終始熱中して取り組んでいた。最後は、皆で輪になって皿を隣の人へ受け渡す「お皿回しリレー」を行った。皿が止まりそうになりながらも、「がんばれ！」「もうちょっと！」などと声を掛け合いながら、楽しく進めることができた。

ディアボロ体験では、回し方やその他基礎的な技に取り組んだ。子どもたちは最初、回すことに苦労していた様子だったが、参加学生の説明や補助により徐々にコツをつかみ、最後は皆で技を成功させて終わることができた。

またこの道具体験時には、当日の現地別室にてイベントを行っていた三浦ゼミの方とその参加者が見学を訪れた。こちらの方々にも、簡単なジャグリング体験として「お皿回しリレー」の体験と、ちょっとしたジャグリングの披露を行った。初めて触れるジャグリングに興味を示し、楽しんでいる様子が見られた。

ジャグリングショー披露：

これまで体験した道具に加え、参加学生がさらに 4 種類の道具を加えてショーを披露した。参加者 (三浦ゼミの方々も途中まで見学) は、終始興味津々な様子でショーを見ていた。技が成功したときは「おお！」などと声を上げたり、拍手をしたりして楽しくショーを見ていたようである。

しかし、ショーの中で演者が道具を落としてしまった際、子どもたちが身を乗り出して拾いにきてしまうという場面がみられた。これには道具が当たってしまう危険があり、事前によく注意しておくなどの対策が必要だと感じた。

バルーンプレゼント、記念撮影：

参加してくれた子どもたち全員に、学生がバルーンアートで作った花束をプレゼントした。プレゼントは、サンタとトナカイの衣装を着た学生が手渡しした。突然のサンタ登場に子どもたちは興奮した様子であった。手渡ししている中、バルーンが 1 つ割れてしまうというハプニングがあったが、その場で作り直して対応した。その後、子どもたちにはそのバルーンを手にもってもらい、参加者全員で記念撮影を行った。

アンケート記入、閉会式：

本イベントの感想を聞くため、子どもたちと保護者の方に簡単なアンケートを記入してもらった。子どもたちは、「次はこれがやりたい！」などと口にしながらかアンケートを書いていた。

閉会式では、「今日のイベントに参加して楽しかった？」と問いかけると、参加者は全員が手を挙げて応えてくれた。この後に学生全員が前に並んで挨拶をし、イベントは終了した。

イベント終了後は、保護者の送迎を待つ子どもたちが残っていたため、イベント中に行った道具体験を再び行った。保護者の方が迎えに来ると、「できるようになったよ！」と言って技を披露していた。最後は、「バイバイ！」「ありがとう！」と挨拶を交わしながら参加者を見送った。

5. 感想（参加者、参加学生）

○参加者の声（アンケートより1部抜粋）

- ・ディアボロでもっと遊びたい。(小学2年生男子)
- ・ショーがとても楽しかった。「ポイ」をやってみたと思いました。(小学2年生男子)
- ・サンタさんが来て、風船くれたのでうれしかったです。(小学4年生女子)
- ・3つボールを投げるのをやってみたかったです。(小学6年生男子)
- ・いろんな体験ができ、道具にふれる事ができ良かった。ショーも見ごたえがあり、リズムにのって楽しかったです。小さい子でも参加させていただきうれしかったです。(保護者 女性)

○参加学生の声（イベント後の反省会より）

- ・参加者に楽しんでもらうだけでなく、自分たち自身も楽しんでイベントを行うことができて良かった。
- ・イベント開始前や終了後も、子ども達と積極的にコミュニケーションをとることができた。特にイベント終了後に道具体験を行った際は、少しレベルアップした技も体験してもらったが、子どもたちが楽しそうにしている良かったと思う。
- ・予想外の事態があっても、臨機応変に対応することができた。しかし、準備の段階で予想外のことが起こった際に「何をやる必要があるのか」など事前に確認しておけば、よりスムーズに対応できたことも多いと感じた。
- ・子どもたちに対して参加学生の数が多く、手の空いている人がでてきてしまった。手の空いている時に何ができるのかを事前に確認しておくようにしたい。
- ・ショー披露は、後半で喋りを入れるなどの工夫によって、最後まで楽しんで見てもらえたと思う。
- ・動き回ったり、落ち着きがなかったりする子への対応の仕方に戸惑った。今後は、対策を考えるとともに、より適切な対応の仕方を身につけていきたい。

6. 活動を通して学んだこと、今後の課題、まとめ

今回のイベントは、昨年までジャグリコが大学周辺地

域を対象として独自に行ってきた企画イベントをベースとして行ったものであった。「子ども支援プロジェクト学生企画事業」へは初めての参加ということで、手探り状態でイベントの企画・運営を進める場面もあった。その中で、子ども支援プロジェクト推進委員会の諸先生方や、指導教員の先生、他団体の皆様のたくさんのご指導、ご協力のおかげで、最後まで活動をやり遂げることができた。

私たちの企画イベントの趣旨は「参加者同士の交流を深めながら、新しいものを見る、学ぶ、体験する力を養う」ことであった。まず交流という面に関しては、イベント冒頭にアイスブレイキングを設けたことで、参加者は遊びを通してコミュニケーションを図ることができ、交流を深めるきっかけをつくることができたと感じる。その後、メインとなる道具体験の際は、参加者同士の仲を深めつつ進行することができた。ここでは参加者自身が今まで触れたことのない、ジャグリングという新たなものへと積極的にかかわる姿勢が見られたとともに、参加者は学生のアドバイスを聞き入れつつ楽しんで活動していた。イベント終盤のアンケートの回答においては「もっと遊びたかった」「次はこの道具をやりたい」という記述が多数見られ、ジャグリングという新たなものに触れたことから「もっとやりたい」という形で、意欲につなげることができたのではないかと考える。

次に活動から学んだことと、今後の課題について報告する。

企画イベントを計画・進行していく中で、私たちは以下のようなトラブルに直面した。

まず今回の活動を進めるにあたっては手探り状態で進行し、詳細に計画を立てることなく大まかな計画の中で進めていった。そうした結果、進行は思うようにならず、企画イベント当日が近づいてから必要な物事に気づき、急いで準備しなければならない事態が発生した。イベント当日においては、「道具体験」や「ジャグリングショー披露」の場面において、参加者の体験スペースの狭さや、道具がぶつかることの危険などから、参加者に危害が及ぶ可能性が出てしまった。また、当日にはイベントに対する学生側の工夫の不足や不慣れなことが原因となり、実施している中で参加者全員が楽しめていない状況ができてしまった場面もあった。

このようなトラブルがあったことは悔やまれるが、こうしてサークル活動が困難に直面したゆえに反省点もあり、そこから学んで今後の課題が見えてもきた。

今回の活動を通して、活動のスムーズな進行のためには早い段階で「どのような流れで活動を進めるか」について日程や期限など詳細を明確にし、それに沿って確実に行動することが重要であると実感した。そして計画段階ではしっかりとリスクマネジメントを行うことが大切だと学んだ。そのためにはプログラム 1 つ 1 つについてより子どもの視点に立ち、「安全に活動するために改善すべきものは無いのか」と検討することが必要であると考える。次にイベント当日に関してだが、当日は設定した定員よりも少ない人数で行われた。しかし実際にイベントを行うと、予想に反して会場のスペースは当日の全体的な人数に対して適切であったと感じる。それゆえに、もし設定した定員に達する人数でイベントを行っていたら、会場は狭く十分に活動できなかっただろう。自分たちが会場を選定する際には、参加者が十分に活動できるスペースが存在すると考えて選んだが、実際には不十分であった。会場視察の際に参加者と学生、その他保護者がいても十分なスペースを取って活動できるのかをよく確認し、選定する必要がある。もしくは、会場設定の際に主催会場が限られている場合には、参加定員を減らすなどの修正もできたのではないかと考えられる。次に、イベントに対する学生側の工夫の不足や不慣れの原因については、計画ミスによる進行の遅れからリハーサル・練習の不足が起こったことにあると考える。よってこれに関してはリハーサル・練習を多くすることで内容を煮詰め、参加者がどうしたらより楽しめる内容や振舞いとなるのか等、より多くの工夫点を考えられたのではないかと反省する。

以上のことから、今後の活動における課題として、「詳細な計画の立案と、本番を深く想定したリスクマネジメントの実施、多数のリハーサル実施を通しての工夫点、改善点の話し合い」が挙げられる。この課題をサークル全体で共有し、対策を講じて、これからの活動に取り組んでいこうと強く思う。

7. 活動風景

(活動風景の写真は、参加者に許可を得て撮影しております)

○みんなで遊ぼう！



○道具体験



(お皿回し)



(ディアポロ)



○ジャグリングショー



○バルーンアート プレゼント



○全体 記念撮影



V. 学習支援、ミニ運動会、七郷市民祭りの支援 活動報告

1. 事業名および趣旨

○事業名

「七郷地区における学習支援並びにミニ運動会、七郷市民祭りのお手伝い」

○趣旨

体を動かすことを通して被災した地域の子ども達と交流を深め、元気になるお手伝いをします。また、子ども

達が感謝の心、人を思いやる心、協調性、自制心を身に着けながら、社会のルールやマナーを学べる活動に取り組みます。

2. 開催団体名

ステーションキャンパスクラブ

1. 学習支援 その1

報告者 山口 真次

1. 活動日時

平成 27 年 9 月 14 日 月曜日 15 時 30 分頃～16 時 30 分

2. 開催場所

七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

対象者：七郷児童館に通う子ども達

参加者：28名

開催者数：山口真次、平井維子、
山内陽（ステーションキャンパスクラブ）
油井寛（ステーションキャンパスクラブ）
担当職員）
七郷市民センター職員 2 名

以上 6 名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

14 時 50 分頃～15 時 30 分頃	移動（ステーションキャンパス発）
15 時 30 分頃～16 時 30 分頃	七郷市民センター体育館で活動
16 時 30 分頃～16 時 35 分頃	片づけ
16 時 35 分頃～17 時 20 分頃	移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

始めに、七郷児童館の職員が子ども達に体育館で体を動かす企画を行うことを伝え、参加する人を集めた。参加人数を確認した後、一列になって体育館に移動しました。体育館では、ステーションキャンパスクラブメンバーが自己紹介を行い、準備運動の代わりに鬼ごっこを 5 分程度行いました。その後、体育館を半分に区切り、ドッジボールとキックベースの 2 種目に分かれて試合をすることになりました。

2 種目ともゴムボールを使用し、七郷市民センターの職員 2 名が各競技の審判を行い、ステーションキャンパスクラブメンバーが子ども達の中に混ざって試合をしました。

キックベースには活発な男の子が集まり、ドッジボールには女の子多く参加していたように感じました。

一般的にドッジボールは内野と外野に分かれ、外野が相手内野にボールを当てることで、自陣の内野に戻ることができますが、今回は内野・外野に関わらず、相手内野に当てることで、外野が自陣の内野に戻ることができるというルールで行われました。

キックベースは野球のルールに則り行われました。しかし、キックベースのルール上、ランナーに対してボールを当ててもアウトにすることができるため、子ども達は一生懸命ランナーにボールを当てようとしていますが、なかなか当たらず攻撃が長引くこともありました。

15 時 30 分から始まった学習支援は、16 時を過ぎると習い事やお迎えなどで人数が徐々に減りました。習い事の時間やお迎えが来た際は、七郷児童館職員が体育館に来て、子ども達に伝えるというシステムになっているようです。

16時30分には他団体が体育館を使用するため、速やかに体育館から移動し、七郷児童館へと戻りました。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

名前と顔を覚えてもらうために、本サークルでは大きなネームを準備しました。最初は恐る恐る近づいていた子ども達も、時間が経つにつれて子ども達の方から近づいて来たり、本サークルメンバーの名前を呼んでくれたりしました。しかし、本サークルメンバーが子ども達の名前を呼んであげることができませんでした。名前を呼ぶことは、相手を安心させたり親近感を持たせたりすることができると思う。次回は、子ども達に名前を呼んでもらうだけでなく、本サークルメンバーも子ども達の名前を呼んで覚えることを目標としたい。

また、ルールや順番を守らない子やボールを当てられた腹いせに相手を叩く子が数人見受けられました。これらの活動を通して、ルールや順番と言った社会の仕組みを学び取るとともに、思いやる心・自制心・協調性などを身に付けてもらえるようサポートしていきたいです。

6. 活動風景

*本サークルでは子ども達の許可を取って撮影しております。



キックベースの試合前に整列する子ども達



ドッジボールの試合をする子ども達と
本サークルメンバー



参加した本サークルメンバー



2. 学習支援 その2

報告者 山口 真次

1. 活動日時

平成 27 年 9 月 28 日 月曜日 15 時 00 分頃～ 16 時 30 分

2. 開催場所

七郷児童館、七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況

対象者：七郷児童館に通う子ども達

参加者：24名

開催者数：山口真次、平井維子、山内陽、
江口準（ステーションキャンパスクラブ）
油井寛（ステーションキャンパスクラブ
担当職員）
七郷市民センター職員3名

以上8名

4. 開催内容

○当日のスケジュール

14 時 30 分頃～ 15 時 00 分頃	移動（ステーションキャンパス発）
15 時 00 分頃～ 15 時 25 分頃	七郷児童館で活動
15 時 25 分頃～ 15 時 30 分頃	参加者確認後、七郷市民センター体育館へ移動
15 時 30 分頃～ 16 時 25 分頃	七郷市民センター体育館で活動
16 時 25 分頃～ 16 時 30 分頃	片づけ
16 時 30 分頃～ 16 時 35 分頃	次回の打合せ
16 時 35 分頃～ 17 時 15 分頃	移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

・七郷児童館（15 時～ 15 時 25 分）

本サークルメンバーが 2 組に分かれて、七郷児童館学習ホール並びに附属の図書室で子ども達と触れ合いました。学習ホールでは、積木ブロックを使ってお城を建て

るお手伝い、格闘ごっこ、子ども達を背負って走り回るなど、子ども達のニーズに合わせて一緒に遊んだ。図書室では、話し相手、読み聞かせ、本（間違い探し）を使って一緒に考えるなど、子ども達のニーズに合わせるだけでなく、本サークルメンバーが積極的に誘い、読み聞かせや間違い探しをする姿が見受けられました。

その後、体育館で遊ぶ子ども達を集め、人数確認した後、市民センター体育館へ誘導しました。

・七郷市民センター（15 時 30 分～ 16 時 25 分）

今回の体育館での学習支援の内容は、本サークルが企画したことを実施しましたが、事前に市民センター職員へ連絡をしていたため、職員の方々との直前の打ち合いをスムーズに進めることができました。

子ども達を体育館へ誘導後、改めて本サークルメンバーの自己紹介をしました。続いて、今回は準備運動の代わりにランニングすることにしました。前回、準備運動で行った鬼ごっこは、衝突してしまうことや他の人に動きを制限されてしまうことがあったため、今回は壁から反対側の壁までランニングをすることにしました。子ども達を 3 列に分け、本サークルメンバーも各列に入り、一緒に走りました。スタートの合図には赤と白の旗を使うという工夫だけでなく、赤旗を振り上げたらスタートすることや、フライングをしたら次の列の子ども達と一緒に走る、というルールを設けたことで、子ども達は面白いと感じ、予定回数より多く実施しました。

その後、体育館を半分に区切って、ドッジボールとポートボールを行うことにしました。それに先立って、本サークルメンバーが今回から新しく行うポートボールのルール説明をしました。子ども達が理解しやすいように簡単なルールに変更したものの、初めての競技を説明することは難しく、ルール説明を聞いてもわからない子ども達が続出してしまいました。子ども達からは、「つまらない」「前にやっていたゲームの方がいい」「わからないから、ドッジボールをやる」という声も聞こえ、ドッジボールに人数が偏ってしまいそうになりました。しかし、1 人の男の子が「せっかく大学生が考えてきてくれたから、やってみよう！」と周りの子ども達を誘い、ポートボー

ルのコートに集まってきてくれました。ルール説明ではなかなか伝わりづらかったことも、実際にゲームを体験することで、自然とルールや面白さを理解することができました。また、時間が経つにつれて参加したいと思う子ども達が増えました。

結果的には、ドッジボールもポートボールも同じぐらいの人数で活動することができたので、両競技でも全員がボールに触ることができたと思います。

16時30分には他団体が体育館を使用するため、速やかに体育館から移動し、七郷児童館へと戻りました。その後、市民センター職員と次回の学習支援の打ち合わせをしました。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回、本サークルが企画した競技で活動をしましたが、子ども達にルールを説明することや、理解してもらうことの難しさを感じました。自分達が理解していても、相手に伝わらなければ一緒に活動することはできません。このことは子ども達に限らず、大人に対しても同様のことが言えるでしょう。相手に物事を伝える際は、端的にわかりやすい言葉を用いなければならないと感じました。11月に実施されるミニ運動会では、これから行う種目を子ども達に対してたくさん説明することになります。今回の反省を生かして、どのような言葉遣いや実演が伝わりやすいのか、ということ話し合い、疑似練習を行うようにしていきたいです。

また、今回のポートボールの試合後、1人の男の子が泣いてしまいました。その男の子は、チームのリーダーとして活躍していましたが、試合には惜しくも1点差で負けてしまい、悔しくて泣いてしまいました。このように子ども達は、本サークルの企画した競技を真剣に取り組み、喜びや面白さ、悔しさやもどかしさを感じて成長するのだと思います。無我夢中で取り組める競技づくり

ができたことは、企画する側としても喜ばしいことです。残りの学習支援並びにミニ運動会でも、1人でも多くの子ども達に楽しんでもらうとともに、熱中して取り組める競技づくりをしていきたいです。また、子ども達にはこれらの活動の中から様々なことを学び取って、成長してもらいたいです。

8. 活動風景

(*本サークルでは子ども達の許可を取って、撮影しております。)



ポートボールの試合で子ども達を鼓舞する
本サークルメンバー



休憩中に子ども達に話しかける本サークルメンバー

3. 学習支援 その3

報告者 江口 準

1. 活動日時

平成 27 年 10 月 13 日 火曜日
15 時 30 分頃～ 16 時 30 分

2. 開催場所

七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況

対象者：七郷児童館に通う子ども達

参加者：25名

開催者数：江口準、池田瑞希、佐々木駿、
藤井秀平（ステーションキャンパスクラブ）
油井寛（ステーションキャンパスクラブ
担当職員）
七郷市民センター職員2名

以上7名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

14 時 50 分頃～ 15 時 30 分頃
移動（ステーションキャンパス発）
15 時 30 分頃～ 16 時 30 分頃
七郷市民センター体育館で活動
16 時 30 分頃～ 16 時 35 分頃 片づけ
16 時 35 分頃～ 17 時 20 分頃
移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

始めに、七郷市民センター職員が体育館で遊ぶ子ども達を集めて、参加人数を確認後、子ども達と一緒に体育館へ移動しました。体育館へ移動後、本サークルメンバーが主体となって活動を進めました。

今回は、初めて参加する本サークルメンバーが多かったため、子ども達に名前を覚えてもらえるようネームプレートを見せながら、各々工夫して自己紹介を行いました。子ども達も名前を繰り返し呼んでくれるなどメンバー

の顔と名前を一致させようとしてくれている様子でした。

続いて準備運動として、体操とリレー形式のランニングを行いました。体操は本サークルメンバーが指揮をとり、同じ動きをしてもらう形式で行いました。リレーに関しては、市民センター職員の提案で、子ども達を3チームに分け、職員の合図でスタートし、スタート位置の反対側にあるコーンに触れてからスタート位置にいる次の走者にバトンタッチようにしました。最終走者がゴールし、全員が着席するまでの時間を競い、順位づけすることで、子ども達も真剣なまなざしで取り組んでいました。子ども達からの要望があり、リレーを2度行うことになりました。

次に体育館を半分に区切り、ドッジボールとキックベースを行いました。サークルメンバーは2名ずつに分かれ、各競技に参加しました。どちらの競技をやるかは子ども達の希望で分かれたが、女の子はドッジボール、男の子はキックベースといったように偏りが出てしまったと感じました。どちらの競技も適度な休憩と、チーム替えを行いながら進行了しました。私はキックベースを担当したが、子ども達の「蹴りたい！」「ピッチャーをやりたい！」という声を考慮し、私から子ども達に順番で交代するよう提案しました。その他にも、順番を待つ時は蹴る人の邪魔にならないように離れて待つことや、盗塁を禁止するなど、子ども達が楽しんで活動できるような工夫を行いました。ドッジボールは初めて参加した本サークルメンバーが担当したが、大きな声で説明や進行を行い、目立ったトラブルもなく子ども達とサークルメンバーが共に楽しみながら体を動かすことができました。

活動終了時間の5分前には体育館中央に集合し、終わりの挨拶を行いました。子ども達が体育館から児童館へ移動する際に本サークルメンバーに、「また、来てね。」と声をかけてくれ、こちらも嬉しさとやりがいを感じることができました。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回は初めて参加したサークルメンバーが多く、上手く進行できるか、子ども達を楽しませることができ

不安でしたが、実際に子ども達と触れ合い、活動することで始めの不安は自然になくなり、皆が笑顔で活動することができました。

反省点としては、子ども達の整列や集合に手間取ってしまったことです。本サークルの不手際で活動時間を減らしてしまうことは、子ども達にとっても、本サークルメンバーにとってももったいないことであるため、次回からはより入念な打ち合わせとどのように呼びかければ子ども達が耳を傾けてくれるのか、しっかりと話し合ってから活動に臨みたいと思います。また、市民センター職員から集合の際にはホイッスルを使用することで子ども達の注意を引くことができるのではないかとという提案を受け、今後の活動に必要な道具を想定し、事前に準備したいです。

本サークルメンバーは、子ども達からたくさんの刺激や元気をもらえる時間だったと思います。これからも子ども達と楽しく遊ぶことを通して、子ども達が身体的にも精神的にも成長できるような活動をしていきたいです。

6. 活動風景

*本サークルでは子ども達の許可を取って撮影しております。



リレー形式のランニングの様子



ドッジボールの前の作戦タイム

4. 学習支援 その4

報告者 山口 真次

1. 活動日時

平成27年10月26日 月曜日 15時15分頃～16時30分

2. 開催場所

七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況

対象者：七郷児童館に通う子ども達

参加者：35名

開催者数：山口真次、佐々木駿、

佐々木捷吾（ステーションキャンパスクラブ）

油井寛（ステーションキャンパスクラブ

担当職員）

七郷市民センター職員3名 以上7名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

14時40分頃～15時15分頃

移動（ステーションキャンパス発）

15時15分頃～15時30分頃

七郷児童館で子ども達と交流

15時30分頃～16時25分頃

七郷市民センター体育館で活動

16時25分頃～16時30分頃 片づけ

16時30分頃～16時40分頃

七郷市民センター職員と打ち合せ

16 時 40 分頃～17 時 25 分頃
移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

●七郷児童館

今回は、子ども達と交流する時間はあまりありませんでしたが、何度か活動に参加した本サークルメンバーの顔を子ども達が覚えており、メンバーの名前を大声で呼んでくれたり、子ども達から近づいてきてくれたり、話しかけてくれたりする姿が見受けられました。活動当初は、お互いに緊張してしまい、なかなか話しかけることや上手に接することができませんでしたが、活動を重ねるごとにお互いの警戒心もなくなり、気軽に接することができるようになってきていると思います。今後は、子ども達と交流する時間を増やすために、出発時間を早めるようにしたいです。

●七郷市民センター体育館

今回は、本サークルが携わった活動の中で最多となる 35 人の子ども達が参加してくれました。

前回の活動から期間があいてしまったので、ネームプレートを見せながら、改めて自己紹介を行いました。しかし、子ども達にとっても久しぶりの活動であったため、早く体を動かしたいという気持ちが先走り、自己紹介中も雑談を続けたり、急に立ち上がったたりする子ども達の姿が見受けられました。

続いて、準備運動として体操と徒競走を行いました。体操は本サークルメンバーが子ども達の前で指揮をとり、同じ動きをしてもらう予定でしたが、活気のある 2 人の男の子が率先して前に出て、メンバーと一緒に指揮をとることになりました。徒競走では、子ども達を 3 チームに分け、メンバーの合図でスタートし、スタート位置の反対側の壁を触れてからスタート位置に戻るというルールを決めました。全体では 2 回行いましたが、体を動かすことが好きな子は 3 回も走っていました。また、みんなより少し遅れて走る友達に対しては、周りの子ども達から「頑張れ!」「あと少し!」という鼓舞する声が聞こえました。

次に体育館を半分に区切り、ドッジボールと風船バレーボールを行いました。風船バレーボールは本サークルか

らの提案で取り入れた活動内容で、子ども達全体の前で実演することになりました。しかし、風船を膨らませることに時間がかかってしまったり、風船が思っていた以上に飛ばなかったりするなど、本サークルの準備不足が目立ちました。また、競技の面白さを上手に伝えることができず、参加人数がドッジボールに偏ってしまったと思います。ドッジボールは、毎回行っていることもあり、ルールを熟知している子ども達が多くいたためスムーズに進められていました。一方、風船バレーボールは、サーブを順番に行うようにしましたが、風船が遠くに飛ばないこともあり、特定の子ども達しか触ることができず、触ることができない子ども達は飽きて床に寝そべってしまいました。このようなことから、競技内容を改善する必要があると感じました。

●打ち合わせ

体育館での活動終了後、七郷市民センター職員とミニ運動会並びに、七郷市民祭りの打ち合わせをしました。ミニ運動会に関しては、11月初旬に各学校へ配布される「しちごうじどうかんだより（11月号）」に内容を掲載していただけたとの報告を受けました。また、七郷児童館に通う子ども達用に本サークルが作成した配布プリントの内容を職員に確認していただき、次回の学習支援の際に配布することが決まりました。なお、七郷市民祭りに関しては、七郷市民センター内での会議の結果、正式に本サークルに対するボランティアの要請が決まり、改めて文書での報告を受け、本サークルはこの要請を快諾しました。今後は、本サークル内で参加できる人数を確認し、次回以降の学習支援の際に報告するとともに、お互いに連絡を密に取り合いながら準備を進めていきたいです。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

徒競走でみんなより少し遅れて走る友達に対しては、周りの子ども達から声援があった時は驚きました。本サークルが今まで携わった 3 回の活動では見られなかった光景で、他者のことを思いやり、励ますという子ども達の精神的な成長を感じました。

反省点としては、本サークルの下手際で交流時間や活動時間を減らしてしまうことです。口頭による打ち合せ

はしたものの、実際に風船を膨らませたり、実演の練習をしたりすることはしていませんでした。今回のように、事前の準備を怠ると不測の事態に対処することができず、周りにも迷惑をかけてしまうということを改めて痛感しました。今後の活動に向けて、毎週行われる本サークルの定例会の時間を使い、改善点を考えることや疑似練習



風船バレーボールでサーブを打つ前の様子

を行うことをしなければならないと思いました。また、来月に控えたミニ運動会の準備も計画的に進めていきたいです。

8、活動風景

*本サークルでは子ども達に許可を取って撮影しております。



ドッジボールの様子

5. 学習支援 その5

報告者 山口 真次

1. 活動日時

平成27年11月2日 月曜日

15時頃～16時30分

2. 開催場所

七郷児童館、七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況

対象者：七郷児童館に通う子ども達

参加者：17名

開催者数：山口真次、平井維子、江口準、松林明日香、
佐々木捷吾（ステーションキャンパスクラブ）
油井寛（ステーションキャンパスクラブ
担当職員）
七郷市民センター職員2名

以上8名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

14時20分頃～15時00分頃

移動（ステーションキャンパス発）

15時00分頃～15時30分頃

七郷児童館で子ども達と交流

15時30分頃～16時25分頃

七郷市民センター体育館で活動

16時25分頃～16時30分頃 片づけ

16時30分頃～17時10分頃

移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

●七郷児童館

七郷児童館のホールや併設する図書館を利用して、子ども達と一緒に鬼ごっこ、おままごと、プラレール遊び、読み聞かせなどを行いました。今まで以上に、本サークルメンバーの人数が多かったため、たくさん子ども達と交流することができました。

●七郷市民センター体育館

今回は、気温の低いことが影響し、参加する子ども達の人数が今までより少ない 17 人になってしまいました。

久しぶりに参加する本サークルメンバーが多かったため、活動始める前にネームプレートを見せながら、改めて自己紹介を行いました。子ども達はメンバーの名前を覚えようと真剣に聞いたり、復唱したりしていました。

続いて、準備運動と徒競走を行いました。準備運動は本サークルメンバーが子ども達の前で指揮をとって行ったが、徒競走は人数が少ないこともあり、横 1 列に並び 2 回実施しました。メンバーも参加し本気を出した徒競走だったため、大学生に追いつこうと子ども達も懸命に走っていました。

次に体育館を半分に区切り、ドッジボールとポートボールを行いました。参加人数はあまり多くありませんでしたが、子ども達が均等にわかれたため、進行に問題はありませんでした。ポートボールを行うのは 2 回目で、ルールもあまり思い出せない状況でしたが、実際に行う中でやり方やコツなどをつかみ、接戦を繰り広げていました。ドッジボールは、毎回行っているため、スムーズに行うことはできましたが、体育館の中の気温が低かったため、途中から観戦をしたいと言う子ども達の姿も見受けられました。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回は、前回の反省を生かし、出発時間を早めました。その結果、子ども達と交流する時間を増やすことができました。また、参加する本サークルメンバーの人数が増えたことで、たくさん子ども達と触れ合うことができましたと思います。一方、子ども達がメンバーの周りに集まり、様々な意見を主張するため、意見の調整やニーズにこたえることの難しさを感じました。1 人のメンバーが子ども達に囲まれ困っている際は、他のメンバーが助けに入るなどの本サークルの目配りや連携が必要だと思いました。

反省点としては、競技に携わっていない子ども達への対応がうまくできなかったことです。観戦する子ども達は、壁に寄りかかって座っていたため、時折ドッジボールやポートボールの流れ球が飛んでくる危険がありました。そのため、急遽本サークルメンバーの 1 人を観戦す

る子ども達の近くに配置し、注意を喚起しましたが、メンバーの人数が少ない時にはできないと思います。次回の学習支援までに本サークルの定例会で対応策を話し合い、次回の競技内容、配置等を練習したいと考えています。

6. 活動風景

*本サークルでは子ども達に許可を取って撮影しております。



ポートボールの試合の様子



ドッジボールの試合の様子



観戦したいと申し出る子ども達

6. 学習支援 その6

報告者 山口 真次

1. 活動日時

平成27年11月9日 月曜日
15時頃～16時30分

2. 開催場所

七郷児童館、七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況

対象者：七郷児童館に通う子ども達

参加者：59名

開催者数：山口真次、平井維子、松林明日香、
佐々木捷吾（ステーションキャンパスクラブ）
油井寛（ステーションキャンパスクラブ
担当職員）
七郷市民センター職員2名

以上7名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

14時20分頃～15時00分頃

移動（ステーションキャンパス発）

15時00分頃～15時30分頃

七郷児童館で子ども達と交流

15時30分頃～16時25分頃

七郷市民センター体育館で活動

16時25分頃～16時30分頃 片づけ

16時30分頃～16時40分頃 打ち合わせ

16時40分頃～17時20分頃

移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

●七郷児童館

七郷児童館の和室を利用して、子ども達と一緒にブロック遊び、プラレール遊び、人形遊び、トランプ、学校の宿題の手伝いなどを行いました。活動当初と比べると、子ども達から積極的に近づいて来るようになり、本サー

クルメンバーの手や服を四方八方から引っ張る場面も多く見受けられました。

●七郷市民センター体育館

今回は、七郷児童館職員の呼びかけで児童館に通っているほとんどの子ども達が体育館で遊ぶ企画に参加することになり、活動を通して最多の59人が集まりました。

初めに、準備運動と徒競走を行った。準備運動は本サークルメンバーが子ども達の前で指揮をとって行いました。徒競走は人数が多いため2組に分けて実施しました。全体で2回走ったにも関わらず、「もう1回走りたい」と言う子ども達の姿が印象的でした。

次に体育館を半分に区切り、ドッジボールとキックベースを行いました。両競技は子ども達と何度も行い、ルールを熟知しているためスムーズに試合に入ることができました。しかし、ドッジボールに人数が偏りすぎていたため、キックベースでは守備の人数が足りず大変そうでした。人数が多いドッジボールでは、自陣内での動きが制限されてしまい、ドッジボールの得意な男の子でも苦戦を強いられていたため、緊迫した試合展開になりました。また、長時間のドッジボールに飽きて体育館の端で座り込む子ども達も見受けられましたが、本サークルメンバーが分散し、競技の邪魔にならないスペースを使ってランニングや鬼ごっこを行いました。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回、多くの子ども達と一緒に体育館で体を動かすことができたことは、本サークルメンバーにとって貴重な経験であり、3つのことを学ぶことができました。

1つ目は、人数が多いとなかなか声が通りづらいということです。今回はいつも以上に大きな声で指示を出しましたが、子ども達の声にかき消されてしまうことが多かったです。そのため、指示する際は必ず笛を使って合図するように心がけていました。ミニ運動会でも同じ場面が想定されるため、各メンバーは笛を常備して臨みたいですね。

2つ目は、すべての子ども達の意見を反映することは

できないということです。子ども達の個性はそれぞれ違い、競技に対する好き嫌いも激しいものです。このことは、ドッジボールに人数が偏ってしまったことや、途中で飽きて体育館の端に座り込むことからうかがうことができます。ミニ運動会ではどのように子ども達をなだめたり、チームをまとめたりするかがポイントになると思います。

3つ目は、事前準備の重要性です。前回の反省点を本サークルの定例会で話し合い、いくつかの対処方法を考えて臨んだ結果、今回は無事終了することができました。ミニ運動会までの準備期間は残りわずかですが、サークル内で連絡を密に取ること、練習を繰り返すこと、準備物の確認をすることなどに注意しながら、本番に備えたいです。

6. 活動風景

*本サークルでは子ども達に許可を取って撮影しております。



本サークルメンバーの自己紹介



準備運動の様子



本サークルメンバーが子ども達のやる気を引き出している様子

7. ミニ運動会

報告者 山口 真次

1. 活動日時

平成 27 年 11 月 14 日 土曜日 9 時～ 12 時

2. 開催場所

七郷市民センター体育館

3. 参加者の状況

対象者：七郷地区に住む子ども達

参加者：24名

開催者数：山口真次、平井維子、藤井秀平、佐々木捷吾、江口準、松林明日香、佐藤佳代、池田瑞季、佐々木駿、伊藤正（ステーションキャンパスクラブ）
金子剛、油井寛（ステーションキャンパスクラブ担当職員）
七郷市民センター職員 2 名

以上 14 名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

- 8：20 ステーションキャンパス出発
- 9：00 七郷市民センター到着、準備開始
- 9：30 子ども達入館・ミニ運動会説明・チーム分け・準備運動
- 9：50 じゃんけん列車
- 10：00 “おたま”でボールリレー
- 10：25 休憩
- 10：30 ○×クイズ
- 10：55 休憩
- 11：00 伝言ゲーム
- 11：20 休憩
- 11：25 大逆転!! ミッションリレー
- 11：50 表彰式・参加賞配布
- 12：00 解散

○活動状況

今回は七郷市民センター体育館をお借りして、ミニ運動会を開催しました。本サークルは、東北福祉大学ステーションキャンパスにある準備物を担当職員の車に載せて、七郷市民センター体育館へ移動しました。到着後、速やかに当日の準備や最終チェックを行いました。この間、ミニ運動会に参加する子ども達は七郷児童館で待機し、七郷児童館職員の誘導で体育館に入館しました。入館時、子ども達には事前に作った名札を付けて学年ごとに整列してもらいました。

その後、本サークル代表から子ども達にミニ運動会の説明やチーム分けを行いました。学年ごとに並んでいたため、前にいる子どもから「赤」・「黄」・「緑」の順番でチーム分けを行いました。チーム分け当初は、仲の良い友達と別のチームになってしまったことに不満を漏らす子ども達もいましたが、各チームのリーダー（本サークルメンバー平井・江口・山口）を中心に円陣を組みコミュニケーションを図ったことで、子ども達のモチベーションを上げることができました。

競技を始める前に、準備体操としてアニメ「妖怪ウォッチ」のエンディングテーマソング「妖怪体操第一」を踊りました。本サークルメンバーは、子ども達の前で踊る人と、子ども達と一緒に踊る人に分かれて参加しました。

子ども達の間では「妖怪ウォッチ」が人気で、メンバーの踊りを見なくても踊ることができる子がいました。

準備体操後は、「じゃんけん列車」を行いました。子ども達には、自分と違うチームの子とじゃんけんをするように促しました。しかし、スピーカーの音量が小さかったため聞こえにくく、じゃんけんのタイミングが分からなかったり、後半になっても誰ともじゃんけんをしないで勝ち残ってしまったりする子が見受けられました。

次に、チーム対抗「“おたま”でボールリレー」を行いました。この競技は、調理器具のおたまの上にピンポン球をのせて走り、手を使わずに次の走者へ渡し、落としてしまった場合はその場へ戻って始めるというルールです。本サークルメンバーの実演を見ている際はつまらなそうにしていた子ども達も、いざ本番で他のチームと勝負することになると落とさないように本気で走っている姿が印象的でありました。

休憩を挟んだ後に、「○×クイズ」を行いました。巨大な画用紙に書かれた内容が読みあげられると、子ども達は勢いよく○や×の方向に向かって走り出していました。しかし、子ども達は自分の考えよりも周囲に流されて動き、なかなか人数が減ることはありませんでした。

続いて、「伝言ゲーム」を行いました。「伝言ゲーム」は各チーム一列に並び、列の先頭の子に短文を覚え、それを早く次の人に伝えるだけでなく、正確さも重視した競技です。しかし、子ども達にとって「短文を覚える」という作業は難しく、なかなか覚えることができず泣き出してしまう子がいました。そのため、急遽問題の内容を変更し、数字や単語を覚え・伝えてもらうことにしました。その結果、子ども達でも容易に覚えることができ、楽しく活動することができました。

最後に、「ミッションリレー」という競技を行いました。この競技の内容は、スタート地点とゴール地点の間に“お題”の書かれたカードを置き、“お題”を成し遂げた場合のみゴール地点に進むことができます。ゴール地点に到達後、次の走者がスタートするというルールです。“お題”の内容によって順位が逆転することがあるため、競技終盤まで手に汗握る展開でした。出番の終わった子ども達も、まだの子ども達も「頑張れ」、「負けるな」という声飛び交っていました。

全ての競技終了後、表彰式で順位発表が行われ、1位

のチームには豪華賞品が配られました。1 位になったチームも、なれなかったチームも拍手でお互いにたたえあいました。その後、参加してくれた子ども達に参加賞を配布したことで、皆とても嬉しそうにしていました。また、子ども達の中には、参加賞に本サークルメンバー全員のサインを求める場面がありました。最後に、本サークルと子ども達がお互いに感謝の言葉を言ってミニ運動会を閉会しました。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

「子ども支援プロジェクト」を通して、初めて本サークルが主催する企画を実施できたことは、本サークルを一回り大きく成長させることができたと思います。

その中で、情報共有の難しさを改めて感じました。準備や打ち合わせを重ねて行ったものの、市民センターと本サークル間で話しの受け取り方が違っていたり、サークル内でも内容をあまり把握せずに参加するメンバーがいたり、練習時間や確認作業の不足が強く痛感させられた活動でした。

私個人の意見では、とても悔しい活動でした。特に本プロジェクトにおいては、一部のメンバーに計画や準備を強いていたことに問題があります。団体で1つのことを成し遂げるには、皆が少しずつでも協力し合って作り上げることが大切だと思います。協力して計画・準備することは、内容を理解することや不足している部分を指摘しあうことに繋がり、失敗は減らせたはずですが、取り組みに対するメンバー1人1人の温度差があったと思います。各自予定があるため強要はすることはできませんが、運営側には責任があります。次年度以降は、各自が責任を持った対応をしてくれることを願っています。

今回の活動を通して、七郷児童館並びに七郷市民センターの方々、子ども支援プロジェクト推進委員会の皆様、サークル担当の諸職員には、大変厚いお力添えをいただき誠に感謝しております。今年度の反省を糧に、次年度以降の活動に生かしたいと考えております。この度は誠にありがとうございました。

6. 活動風景

*本サークルでは子ども達に許可を取って撮影しております。



チーム分けの様子



「妖怪体操第一」を踊る様子



「じゃんけん列車」の様子



「“おたま”でボールリレー」の様子



「〇×クイズ」の様子①



「〇×クイズ」の様子②

8. 七郷市民祭りの支援

報告者 江口 卓

1. 活動日時

平成 27 年 11 月 22 日 日曜日
9 時 45 分頃～15 時 00 分頃

2. 開催場所

七郷市民センター並びに七郷児童館

3. 参加者の状況

対象者：七郷市民祭りに来た子ども達

参加者：約 50 名

開催者数：江口準、池田瑞希、佐藤佳代、松林明日香、
佐々木駿（ステーションキャンパスクラブ）
油井寛（ステーションキャンパスクラブ
担当職員）

七郷市民センター職員 10 名

以上 16 名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

○当日のスケジュール

8 時 50 分頃～9 時 45 分頃

移動（ステーションキャンパス発）

9 時 45 分頃～10 時 00 分頃 準備

10 時 00 分頃～12 時 00 分頃

児童館遊びのコーナーにて活動

12 時 00 分頃～12 時 30 分頃 昼食、休憩

12 時 30 分頃～14 時 30 分頃

児童館遊びのコーナーにて活動

14 時 30 分頃～15 時 00 分頃 片づけ

15 時 00 分頃～15 時 45 分頃

移動（ステーションキャンパス着）

○活動状況

今回の活動は「七郷市民祭り」という地域のお祭りコーナーの 1 つである児童館による遊びのコーナーを担当しました。普段の活動とは内容も異なるため、初めに職員の方による説明を受け、注意点など把握した後に活動を始めました。

私たちが担当したのは、「ビンゴを狙え」、「巨大だるまおとし」、「工作コーナー」の 3 つのコーナーでありました。

「ビンゴを狙え」は野球のいわゆるストラックアウトのような形式でした。1 番から 9 番まで縦横 3 つずつならんだボードをめがけてボールを投げるというもので、5 球投げて縦・横・斜めの 1 つでもビンゴになれば景品獲得というルールで活動を行っていました。投げる位置を決めていたのだが、ボードまで届かないような子も見受けられたので、位置を前にするなど臨機応変に対応ができました。また、景品の数に限りがあったため、景品獲得は 1 回として、2 回目以降の参加者にはその旨を説明し、何回目の挑戦か聞くなど、子ども達とコミュニケー

ションをとりながら、平等に景品が行き渡るように工夫しました。

「巨大だるまおとし」は名前の通り巨大なだるまおとしに挑戦してもらうコーナーで、5段中、最後の1段まで崩さず成功すれば景品獲得というルールでした。子ども達にとっては自分の身長より大きなだるまが用意されていたため、なかなか成功する子がいませんでした。しかし、あきらめずに挑戦を重ねていくうちに成功する子が現れました。サークルメンバーがやり方を教えていく過程と同時に、高学年の子が小さい子にコツを教えてあげているような場面も見られるなど、サークルメンバーと子ども達と一緒に大変にぎやかなコーナーにすることができました。

「工作コーナー」ではフェルトを使いロールケーキのキーホルダー作りを行いました。あらかじめ切っている2本1組のフェルトから好きな色を選んでもらい、ボンドを使って形を作り、ストラップを付けて完成という工程でした。サークルメンバーは作り方を教えることや、ストラップを付けるなどの難しい工程の補助などを行いました。こちらのコーナーは体を動かさずコーナーとは別の部屋で行ったため、危ない様子もなく落ち着いて楽しく活動することができました。特に女の子やお母様方が多く参加していたように感じました。

お祭りが終了した後、職員の方々と一緒に後片づけを行いました。トラブルもなく無事活動を終えることができ充実した活動となったと思います。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回の活動は、以前まで行っていた体育館での活動とは違い、初めにルールや注意点を聞き、活動する上でサークルメンバーがしっかり内容を把握する必要がありました。その点では全員が理解できていたため、任された各コーナーをスムーズに進行し、子ども達が楽しんで参加できるようメンバー自身が工夫して活動できたと思います。大変多くの子ども達が参加したことにやりがいを感じるとともに、以前の体育館での活動を通して知り合った子ども達と再会することができました。活動当初はなかなか近づいて来てくれなかった子ども達でも活動を積

み重ねるごとに、お互いに名前を覚え、気兼ねなく話しかけることができ、距離感を縮めることができました。今回の活動でも、子ども達との触れ合いや活動の積み重ねが重要であることを改めて実感しました。

今回の活動で個人的に注目した点があります。それは各コーナーで使用される全ての道具が柔らかい素材で安全に使用できる物になっており、子ども達の視点で様々な動きを予想し、配慮されていることです。今後子ども達と一緒に活動する際は、活動内容だけでなく、使用するものにまで注意を払わなければならないと感じました。今回の活動で今年度予定している活動は終了ですが、次回の活動に向けて今回学んだことを活かしていきたいです。

6. 活動風景（写真）

*本サークルでは子ども達の許可を取って撮影しております。



「巨大だるまおとし」に挑戦する子ども達



「工作コーナー」でキーホルダーを作る子ども達

VI. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 活動報告

1. 事業名および趣旨

事業名：「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川

趣旨：群舞「ダイナミック琉球 in 女川」を異世代で共演できるよう構成し、女川町立保育所（第一、第四）の園児や地域高齢者・学生と共に新設「女川町まちなか交

流館」ホールで2月開催予定の「健康のつどい」において発表する。

2. 開催団体名

ダイナミック琉球実行委員会

1. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その1

報告者 平田 祈子

1. 活動日時

平成27年7月22日（水）

10:45～18:30（うち13:30～15:30打ち合わせ）

2. 開催場所

女川第一保育所

3. 参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

第一保育所高橋所長、職員1名、第四保育所木村所長、職員2名、保健師1名、引率1名、学生2名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

進行：佐藤保健師

1. 自己紹介

2. 「子ども支援プロジェクト」について

①概要の説明

日程・場所の確認

女川町より事業の共催を得た（会場の手配等）

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回の企画を保育所の行事にしてもらい、役場から送迎のバスを手配してもらえることとなった。また、会場の手配、手続き、費用、広報など、女川町の共催が得られた。このような協力があって初めて、私たちの企画が成り立っているのだと感じた。

6. 活動風景（写真）



2. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その2

報告者 高橋 愛奈

1. 活動日時

平成 27 年 7 月 28 日 (火)

9:30 ~ 11:00、13:30 ~ 15:30

2. 開催場所

女川第一保育所、女川町保健センター 2 階

3. 参加者の状況 (対象者、参加者数、開催者数)

第一保育所年長 23 名・職員 2 名、地域の高齢者 8 名、女川運動サポーター 30 名、学生 2 名

4. 開催内容 (当日のスケジュール、活動状況など)

午前中に、第一保育所で年長児童と高齢者にダイナミック琉球の紹介、及びアイスブレイクと玄米ダンベル体操を行った。午後は、女川運動サポーターに対し学生 2 名と引率職員とでダイナミック琉球を踊って紹介した。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

子どもたちにとって難しい踊りなのではないかと不安だったが、手を突き出す動きや風のような動きなど、彼らにとって興味をそそる動きが多い踊りなのだと気づいた。今後の課題は、子ども達が大人にまじって踊れるような振付を考えることである。

6. 活動風景 (写真)



3. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その3

報告者 渡辺 なつみ

1. 活動日時

平成 27 年 9 月 9 日 (水)

9:30 ~ 11:30、13:00 ~ 14:00

2. 開催場所

女川町勤労青少年センター 体育館

3. 参加者の状況 (対象者、参加者数、開催者数)

第一保育所と第四保育所の園児 39 名、保育所職員 6 名、女川保健師 1 名、教員 2 名、学生 22 名

4. 開催内容 (当日のスケジュール、活動状況など)

学生の自己紹介から始まり、子どもたちと一緒に準備体操やロコモ・ジムナスティックス、アイスブレイクを行った。その後ダイナミック琉球を鑑賞してもらい、見本を見てもらいながら踊りを練習した。午後は女川の民生委員の方に震災当時のお話をいただき、後にバスで町内を見学した。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

悪天候だったにもかかわらず、子供たちが元気に活動する様子がとても印象的であった。ダイナミック琉球の練習では、手本の踊りを一生懸命に見ながら真似して、感性豊かに踊ることが出来ていた。練習のなかで学生と

児童の交流も深まったように感じる。今後も練習を重ね、発表会を成功させられるように継続して活動を行っていく。

6. 活動風景 (写真)



4. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その4

報告者 桑名 美緒

1. 活動日時

平成 27 年 10 月 14 日 9:30 ~ 11:30

2. 開催場所

女川町勤労青少年センター 体育館

3. 参加者の状況 (対象者、参加者、開催者数)

第一保育所年長 19 名・職員 2 名、第四保育所年長 16 名・職員 3 名、女川運動サポーター 29 名、保健士 2 名、学生 6 名、教員 1 名、指導員 1 名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

学生の自己紹介から始まり、学生が声掛けしながら、教え子どもたちやサポーターの皆さんとロコモ・ジムナスティックス、準備体操を行った。その後、子どもたちとサポーターの方々に分け、手本を見てもらいながらダイナミック琉球を練習し、最後合わせて踊った。

5. 活動を通じて学んだ事・課題

子どもたちの声は大きく、踊りの振りを体全体で表現する子どもがほとんどで、元気に楽しんでいる様子が見て取れた。子どもたちが踊りやすいよう振付が改良されたことで、ほとんどの子どもが曲のテンポに合わせて踊ることができていた。このことから指導員にとって、対象に合わせてその立場に立った、振り付けを考えアレンジする力の重要性を学んだ。曲が終わるとハイタッチをするなど、学生と園児の交流が図れているように感じられた。課題は、運動サポーターの中で、振り付けの理解が浅い方が列の後ろ側に固まって並んでいるように感じたことだ。運動サポーターの方一人一人に踊りの振りが伝わるための工夫が必要だと考える。学生と運動サポーターとの交流をより深いものにできるように練習を重ねていきたい。今後も練習を重ね、発表会を成功できるように継続して活動を行っていく。

6. 活動風景（写真）



5. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その5

報告者 平田 祈子

1. 活動日時

平成 27 年 11 月 11 日（水） 9：30～15：00

2. 開催場所

女川町勤労青少年センター体育館、女川保健センター 2 階

3. 参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

第一保育所年長 21 名・職員 2 名、第四保育所年長 15 名・職員 2 名、女川運動サポーター 26 名、保健師 2 名、

学生 7 名、教員 1 名、指導員 1 名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

午前は、学生によるレクリエーション（じゃんけん列車やリズム遊び）を行い、交流を図ってから、踊りの練習を行った。その後、本番当日の衣装や準備することに関して、各保育所の職員と学生とで打ち合わせを行った。午後は、女川運動サポーターのシニアと一緒に踊りの練習を行い、最後には、当日の衣装に関して話し合いを行った。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

子どもたちは次第に踊りのポーズや学生に慣れてきたようで、園児用にアレンジされた部分も楽しそうに体を動かしたり、子どもの方から学生と関わったりする様子が見られた。学生も以前より積極的に子どもと関わり、踊りを教えられるようになってきている。女川運動サポーターの皆さんは、練習の開始前から、学生に「ここが分からないの」と尋ね、学生もそれに答えることで、交流が図れている様子が見られた。これらのことから、本番に向けて全体がまとまってきているように感じた。今回は、園児側、シニア側とそれぞれ本番当日の衣装に関しての話し合いを設け、シニアの方からは、いらぬ着物や布地を提供していただいた。改めて、この企画は、多くの人の協力があって成り立っていることを実感した。今後は、提供していただいた物を基に、当日の子どもや

シニアの衣装をどうするか、学生同士での検討が課題となる。

6. 活動風景（写真）



6. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その6

報告者 平田 祈子

1. 活動日時

平成27年12月16日（水）

9時30分～11時00分

2. 開催場所

女川町勤労青少年センター体育館

3. 参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

第一保育所年長19名・職員2名、第四保育所年長15名・職員2名、女川運動サポーター25名、保健師2名、学生6名、教員1名、指導員1名

4. 開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

始めに、学生によるレクリエーションを行い、身体を動かし、交流を図った。次に、ダイナミック琉球の全員で歌う部分を学生の書いた歌詞を見ながら皆で練習した。その後、園児とシニアに分かれて踊りの練習を行い、最後は全員で踊り合わせを行った。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

保育園の職員の方々の日々の指導があるため、子どもたちはどんどん踊りの振りを覚えて踊れるようになってきていた。子どもたちが楽しそうに身体を動かしながら踊る姿を見て、子どもが持つ力や表現力を感じた。シニアも学生に積極的に「ここが分からない」「教えて」と尋ね、踊りを覚えていた。学生は、以前にもまして積極的に子どもやシニアと関わり、踊りを教える姿が見られた。練習の後には、本番の衣装について、こちらで仮に作成したのを見てもらったり、それに意見を出してもらったりしながら、保育所の職員、女川町の保健師、学生、教員で話し合いを行った。女川健康祭で踊りを発表するホールが完成したり、協賛をいただいている女川町から園児の保護者に向けて、協力の依頼をしたりと、本番にむけた準備が進んでいる。落度のないようしっかり準備をして本番に臨むようにしていきたい。

6. 活動風景（写真）



7. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その7

報告者 菅原 ひかり

1. 活動日時

平成 28 年 2 月 5 日 金曜日

9 時 30 分～ 11 時 30 分、13 時 00 分～ 15 時 00 分

2. 開催場所

女川まちなか交流館

3. 参加状況 (対象者、参加者数、開催者数)

第一保育所と第四保育所の園児 38 名、保育所職員 5 名、シニア 15 名、女川保健師 1 名、元気塾生 1 人、教員 1 名、OB 2 名、学生 14 名

4. 開催内容 (当日のスケジュール、活動状況)

<スケジュール>

9:30 園児、シニアと合流

9:30～11:30 リハーサル

※終わり次第、まちなか交流館の会議室にてシニアと一緒に昼食をとる

13:00～15:00 シニアと学生でダイナミック琉球の練習会

15:00 解散

<活動状況>

今月の健康祭本番に向けて、園児・シニア・学生全員が集まりリハーサルを行った。本番会場での練習は初めてなので、何度か練習を繰り返しながら全員で踊るイメージや本番の立ち位置、入退場の確認をした。昼食はシニアと一緒にとり、食後は全員でレクリエーションの手遊びを行った。午後はシニア&学生の練習会を行い、苦手な部分の確認や息を合わせて踊る練習をした。また、それぞれの衣装合わせも行った。

5. 活動を通じて学んだこと・課題

今回の活動は本番前最後の全体練習であるため、本番を意識して練習に取り組む参加者の姿が見られた。すでにおゆうぎ会で発表を経験している子どもたちは、シニアや学生の前で気持ちのこもったダイナミック琉球を堂々披露し、練習会を盛り上げた。プロジェクト初期の頃の練習会では1時間踊ると「疲れた…」と声をあげていた子どもたちが、2時間の練習会を最後まで生き生きと楽しんでおり、その様子の変化はとても印象的である。

お昼はシニアと一緒に弁当を食べ、わらべ歌を使った手遊びでレクリエーションを行った。初めはシニアと学生とに分かれて席についてしまったが、声かけをして学生がシニアの間に入ることで、練習会とは違った空間でシニアの方々と話をする事ができた。食後に15分ほど実施したレクリエーションは、できそうでできない手遊びに学生もシニアも苦戦し、笑いがあふれた。無意識にも学生とシニアとで分かれてしまいがちだが、食事やレクリエーションを通して意図的に環境を作り出すことで、学生とシニアの距離が縮まっていく様子を見る事ができた。

6. 活動風景（写真）

●本番に向けての練習風景



風邪予防にマスクをかけての練習



立ち位置確認①



立ち位置確認②



練習合間の子どもたち



シニアにも衣装合わせ

8. 「よみがえる命」ダイナミック琉球 in 女川 その8

報告者 平田 祈子

1、活動日時

平成 28 年 2 月 14 日 日曜日 9:30 ~ 15:00

2、開催場所

女川町まちなか交流館

3、参加者の状況（対象者、参加者数、開催者数）

第 1 保育所年長 22 名・職員 2 名、第 4 保育所年長 16 名・職員 2 名、女川運動サポーター 14 名、保健師 2 名、学生 17 名、教員 2 名、指導員 1 名

4、開催内容（当日のスケジュール、活動状況など）

<スケジュール>

- 9:30 まちなか交流館着
- 10:00 ~ 10:30 リハーサル
- 10:30 ~ 11:00 衣装・化粧など準備
- 11:00 ~ 11:30 本番（ダイナミック琉球・ロコモ体操の発表）
- 12:00 園児・シニアと解散
- 15:00 女川健康祭終了

5、活動を通じて学んだこと・課題

発表に向け、7 か月間の活動を終え、ついに本番を迎えた。園児は最初緊張した様子だったが、元気いっぱい踊りを披露し、終わった後には笑顔があふれていた。シニアと学生も間違えやすい振りつけの部分は声をかけあって踊り、後ろから園児を支えた。様々な年代の人が気持ちを一つにして取り組める、これが踊りの持つ力なのと感じた。この日を迎えるまでに、毎日園児と練習を行ってくれた保育所の先生方、共催の女川町、健康福祉●保健師の方々、衣装、花飾りの制作をしてくれた仙台市のシニア、東北福祉大学の OB、当日応援にかけてくれた方々、本当に多くの方の協力があってこの企画が実現しているのだと感じた。学生も教員から助言をもらいながら、7 月の企画説明から始まり、どうすれば

シニアと学生、園児の交流を深め、踊りの練習を行って行けるのか、どうすれば本番までに全ての準備を整えることが出来るのか試行錯誤をしてきた。また、女川町と関わる中で、子どもたちの成長や笑顔、被災の状況や現状、女川の方達の思いなどに触れることで、多くの学びが得られたのではないかと思う。以下に何人かの学生の感想と、シニアの参加者にこの企画に対する感想を漢字一文字で表してもらった結果漢字を掲載する。

<学生感想>

- ・改めて「人とのつながりの大切さ」を感じました。練習中、シニアの方に上手に教えられなかったり、子ども達にどう声を掛けたらよいか迷うこともあったりしました。でもそれはきっと私の目の前にいる子ども・シニアの方も少なからず何かしら感じていたことであってそのような感情、そしてうまくいったことどちらも経験して自分の経験値になっているのかなと感じました。年齢に関わらず人と関わることで新たなつながりができ、それが町の活性化につながるのだと感じることができました。

- ・大人数で活動する上で情報の共有が大切だと強く感じました。また、役割分担が必要で、責任感をメンバーに持たせる必要があります。互いに向上できる関係性を築なければならないとわかりました。

- ・このプロジェクトに関わり、色々な人に出会い、支えられ、教えられ、舞台裏から表まで体験させていただきました。学校という枠を超えて地域に飛び込みここまで深く関わる体験はこれが初めてです。被災地という事もありどう関わったらいいのか…と考えた事もありましたが、身構えるよりも一緒に楽しい空間を作っていくとすることが大切だとも思いました。参加できて本当に良かったです。今後もこのような活動があれば積極的に巻き込まれに行きたいと思ひますし、いずれは場を作れる人になりたいと思ひます。

<シニアの漢字一文字>

ダイナミック琉球を行った際に、感じたことを漢字 1

文字で表してもらった。今回も書いていただいたので、以下に掲載します。

感（7人）、覚、輪、和、謝、

6、活動風景（写真）



会場の女川まちなか交流館



来場者と共にロコモ体操



遠くは県外から来場した人もいた



世代をこえて心をひとつに踊りました



舞台裏の様子



総勢 70 名の出演者達



最後の決めポーズ「ヨイサッ！！」

IV . その他の事業

七郷中学校「防災マップづくり」支援活動

1、はじめに

今年度新たに取り組んだ活動の一つが七郷中学校「防災マップづくり」支援活動です。七郷中学校は仙台市東部の若林区荒井地区にあります。この学区は、元々この地区に住んでいた住民、荒浜など被災地域から移り住んできた住民、地下鉄東西線開業に合わせた再開発で流入した住民が混在しており、震災以降子どもたちへのさまざまな支援が必要とされているところです。

2、趣旨

七郷中学校では、震災が発生した翌年 2012 年から総合的学習の時間を活用して、「防災マップづくり」に取り組んでいます。生徒たちの力を結集した防災マップが作られ、年々その完成度が上がっています。4 年目となった今年度は、中学校からの依頼もあり、東北福祉大学がこの活動を支援することになりました。マップづくりに福祉の視点も入れて、広い視野から危険箇所をみていこうというねらいです。

本学では、七郷中の先生方と相談しながら、「子ども支援プロジェクト」の一環として実施することになりました。学内の防災士研修室と連携して、防災・減災について学んでいる学生の力を生かした活動を進めてきました。

2、活動内容

(1) 阿部一彦先生の講演

本学教授阿部一彦先生が、「生活の中の福祉～防災の視点から～」と題して、お話ししました。東日本大震災の経験を基に、災害時に障害を持った人たちはどんな状況に置かれるか、日ごろからどんな備えをして

いく必要があるのかをわかりやすく示していただきました。マップづくりで目を向けてほしい点が生徒に伝わったと思います。この時、次のまち歩きに生かす目的で、学生 2 名も聴講しています。



(2) 生徒の「まち歩き」に参加

11 月 18 日に行われた「まち歩き」（マップを作るための地域調査）に事前の説明を受けた 14 名の学生が参加しました。班毎に指定された地区を調べて歩く生徒たちと行動を共にしながら気付いた点を話し、同時に交流を深めました。短時間でしたが、中学校の生徒さんにとっても本学学生にとっても、いろいろな刺激があったようです。当日は本学教員も 2 名参加して、学生や生徒の様子を確認し、助言指導を行っています。



3、成果

生徒さんは講義を聴いたり、実際にまちを歩いたりしながら、多くの新たな気付きがあり関心も高まったと中学校の先生からお聞きしました。まち歩き活動を通じて生徒と地域のつながりのきっかけが広がり、自信につながっていくとこの活動を見て感じました。

一方学生たちも、生徒さんとのやり取りを通じて刺激を受けたようです。そして「まち歩き」をした生徒たちがどんなまとめをするのか報告をぜひ聞いてみたいと学生の方から声が上がリ、5 名が中学校で開催された生徒の発表会に参加しています。

今年度初めて実施し、連携していく上での課題もいくつか見えてきました。今後も七郷中学校の先生方と協議しながら改善し、活動を継続・拡大していきたいと考えています。

荒井東復興街びらきイベント「あらフェス」に参加して

1. はじめに

仙台市若林区の荒井東地区は、まちづくり協議会を発展させた「一般社団法人荒井タウンマネジメント」が、「交流・賑わいづくり」「低炭素なエコタウンづくり」「減災拠点づくり」「コミュニティづくり」「協働まちづくり」の5つの基本方針を掲げ、まちづくりの牽引役として、産学官連携の中心的役割を果たしながら復興まちづくりを推進しています。

東北福祉大学は、阪神淡路大震災以来、東日本大震災においても教職員・学生によるボランティア活動の経験で得られた多くの知見や、保健・福祉・教育などの研究教育活動によって蓄積された理論や知識、本学関連法人（社会福祉法人、医療法人社団など）が持つノウハウ等をこの地域で活用することでまちづくりに貢献することになりました。そして、そのことを通じて新たな知見を得られる機会と捉えて、荒井タウンマネジメントと協働して課題解決に取り組んでいるところです。

今年度は、学生企画事業で3つの学生団体が荒井東地区で活動し、また、七郷中学校における防災マップづくりの支援などを行いました。さらに、荒井東復興街びらきイベント「あらフェス」に準備段階から参加し、地域のニーズに即した活動に取り組みました。

2. 趣旨

この地域にとって仙台市営地下鉄東西線の開業（12月6日）は、荒井駅から仙台駅までを14分で結び、これまでのバス路線で問題となっていた交通渋滞の解消や運行時間の正確さなど、交通利便性が向上することになり、この地域の更なる発展が期待される大きな出来事になりました。

街びらきイベント「あらフェス」（主催：荒井タウンマネジメント）は、地下鉄東西線開業が荒井地区の住民にとって震災復興の「新たな一歩」であり、荒井東に生まれる「あらたな街」のスタートとして企画され、12月12日（土）、13日（日）の2日間、開催されることになりました。

東北福祉大学は、この街びらきイベントへの参加要請を受け、この地域で活動する本学の学生たちがイベントスタッフとして活躍する機会を得ることが出来ました。

3. 活動内容

11月6日からこのイベントの開催までに行われた打合せの内、12月7日までの4回に本学職員が参加し、荒井タウンマネジメント、地域で活躍している企業7社、仙台市の職員、東北学院大学サッカー部OBの方、特定非営利法人都市デザインワークス、低炭素社会マネジメント技術研究会の会員、野外フェスプロデュース会社、スポーツイベント企画会社、芸能事務所の方々により、イベントを盛り上げるためのプログラムや運営方法などについて、情報共有する機会になりました。イベントは、子どもから大人まで楽しめる内容となり、特設コートでは、プロの方によるサッカー、バスケット、テニスの指導、テントサイトでは東北6県の鍋料理や地酒の提供、フィンランドのグッズ紹介、ステージでは、この地域を舞台に撮影された映画のプロモーション、ダンスキッズのコンテスト、雀踊り、テレビの情報番組の生中継、芸能人のショーなど盛りだくさんのプログラムで、イベント会場には午前9時から午後8時まで多くの来場者がありました。

東北福祉大学は、会場に設営されたテント一張を借り、子ども支援プロジェクトを紹介するポスター（A0サイズ、計6枚）の展示と海鮮チヂミとホットゆず茶の提供をおこないました。これには、2日間で延べ26名の学生がスタッフとして参加しました。

また、街びらきイベント運営スタッフとしてのボランティア派遣要請があり、本学ボランティア支援課の協力により、12/12（土）は、学生10名、教職員3名、12/13（日）は、学生9名、教職員3名が、主として会場整理（ゴミ拾い、来客用大型テント内のテーブルとイスのクリーニング、ステージイベント時の会場整理など）と、荒井東駅前イベント紹介チラシの配布を担当しました。

他にも、準備段階の打合せに参加していた地域の企業と低炭素社会マネジメント技術研究会の会員、仙台市の職員の方々がボランティアスタッフとして参加し、地域の手で創りあげるイベントになっていたように感じられました。

イベントは両日とも曇天で肌寒く、前日までの雨で会場はぬかるんでおり、朝一番の仕事は、ボランティアスタッフ全員で会場の地面を雑巾がけするところから始ま

りました。寒さで手が真っ赤になるほどでしたが、来場者のために全員が一生懸命でした。

本学学生に声をかけていただき、ご指導いただいた地域の企業の皆様をはじめ、ボランティアスタッフの皆様

には、心より感謝を申し上げます。

ボランティアスタッフには、鍋料理の食事のほか、スタッフジャンパーとフィンランド国の絵本が記念に提供されました。

第3章
総括

七ヶ浜町の取り組みから

石原 直

宮城県宮城郡七ヶ浜町は仙台市の東側の沿岸部にあり、東日本大震災では、大きな被害を受けました。震災から5年を迎えようとする今でも、仮設住宅で暮らす被災者の方々はたくさんいます。

本学は平成 26 年 4 月に七ヶ浜町教育委員会と教育に関する連携協定を結び、様々な活動に取り組んできました。昨年度はサマースクール、七ヶ浜芸術祭、地域調査と発表などに取り組み、今年度は、昨年の反省や町の要望をふまえ、サマースクールとサマーフェスティバル、夏祭りやスポーツフェスタに取り組みました。

特にサマースクールとサマーフェスティバルは、本学の教育を学ぶ学生にとって、とても重要な機会ととらえています。

サマースクールは、昨年の小学校 3 校での実施から、中学校 2 校を加え、町内の小・中学校全校で行うことができました。



(手振り身振りで一生懸命説明)

サマーフェスティバルでは、普段教室の中だけではみられない子どもたちの姿があります。

また、行事を計画する力も身に付けることができると考えています。

学生の皆さんの表情はとても生き生きしており、どこを見てもすてきな笑顔が溢れています。



(思わず出た笑顔で説明)

また、これだけ多くの学生が参加してくれたことは、とても心強い思いです。えてして、今時の若いは・・・などと言われることがありますが、ここにいる学生たちを見ていると、まだまだこの国も捨てたものではないな、これからの教育を託していけるだろうな、などと思えてきます。



(フェスティバル終了後の振り返り)

このような機会をいただいた七ヶ浜町の教育委員会をはじめとした町の皆様、先生方、そして、何よりもこの事業をご支援いただいているプリンセスプリンセス並びに事務所、関係機関の方々に心より感謝申し上げます。

七ヶ浜町での「サマースクール」「サマーフェスティバル」 を振り返って

七ヶ浜町立汐見小学校
校長 佐々木 裕 美

平成26年度より、東北福祉大学の方々に七ヶ浜町の子どもたちの学習支援と子どもたちが興味をもって取り組める活動の場を提供していただいています。

今年度は、8月17日（月）から19日（水）の午前10時から12時まで小学校3校、中学校2校で「サマースクール」を実施していただきました。

本校では、1日平均1年生15名、2年生18名、3年生22名、4年生19名、5年生26名、6年生8名、特別支援学級6名、合計114名が参加しました。

夏休みの課題に真剣に取り組む子どもたちの姿がたくさん見られました。一日一日こつこつと取り組んだことにより、なかなか家では集中して取り組めなかった子ども、見事に全部の課題を終わらせることができましたようです。

各教室では、学生先生たちが子どもたちの横に座り、子どもたちの目線で、やさしく教えてくださいました。一人一人に向き合い、言葉を選びながら、子どもたちにどうやったら分かってもらえるのか、いろいろ試行錯誤をしながら取り組む姿がありました。子どもたちが「あっそうか。分かった!」と笑顔になると、学生先生もにっこり笑顔になります。「よかったね」「よくがんばったね」とやさしい言葉を子どもたちにかけている姿も見られました。

また、8月21日（金）には、子どもたちの夏休みの思い出作りとして「七ヶ浜サマーフェスティバル」を実施していただきました。汐見小学校を会場に、松ヶ浜小学校や亦楽小学校の子どもたちも参加しました。今年の

夏はとても暑い夏でしたが、子どもたちは友達とともに楽しそうに体育館に設置されたたくさんのコーナーをまわっていました。

果物で作る電池やくるくるヘリコプター体験、キャンドル作りや楽器作りなど、子どもたちは学生さんたちの説明をよく聞きながら、作ったり、遊んだりしていました。汐見小学校では、8月26日（水）～28日（金）に、夏休み作品展を行いました。子どもたちが夏休みに取り組んだ作品がずらりと並びます。その中には、サマーフェスティバルのコーナーで作った作品も見られました。友達といっしょに作った思い出、学生さんに遊んでもらった思い出を楽しそうに話してくれた子どもたちもいました。

七ヶ浜町では、子どもたちの学力を高めること、そして子どもたちが楽しく学校生活をおくれるよう、不登校改善を重点施策として教育活動を進めています。子どもたちの中には、夏休みの最終週に設定されたサマースクールやサマーフェスティバルに参加したことにより、家庭での生活から学校への生活へと意識を切り替える貴重な機会となった子どもたちもいます。学校が子どもたちにとって安心安全で楽しい学びの場であるよう、保護者、地域、関係諸機関の皆様のご協力をいただきながら、これからも努力をしてみたいと思います。

七ヶ浜町の子どもたちのために、何度も足を運び、企画、運営をしていただきました東北福祉大学の皆様、関係諸機関の皆様に深く感謝申し上げます。

野々島の取り組みを通して

金 政 信

今年度で 2 回目となった野々島プロジェクトの活動ですが、本年度の活動も無事終了することが出来ました。今年度は野々島で栽培されているラベンダーの収穫祭も本プロジェクトに新たに加わり、より活動の枠が広がりました。

また、昨年度は配慮が必要な子どもたちの参加はありませんでしたが、塩竈けやき教室、仙台市ほほえみの会のご理解とご協力もあり、若干名ではありますが参加していただくことができました。

さて、今年度の活動を振り返ってみますと、昨年度の経験や反省をふまえ、活動場所である、野々島の皆さんとの交流、児童の参加に向けての検討、募集、実施に向けての準備など、早い段階から取り組む事ができました。わけても、昨年度活動に関わった学生の成長には目を見張るものがありました。

本プロジェクトは、被災した地域や配慮が必要な子どもたちに自然体験活動を通して自信と勇気を育んでもらうものです。そして、そのためのプログラムの計画から実施までを学生が主体となって行うことによって、その過程の中で地域共創（活動に人を巻き込み、多様な主体との協働など）の理解とその重要性、社会で必要な力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）を養うことを目指しております。昨年度は、やらされている感が非常に強くまた主体性に欠ける部分が目立ちました。そ

のため、自らで気づき主体的に動けるようになるまでにかかなりの時間を要しました。今年度は、昨年度の経験者がはじめから主体的に動いてくれていました。後進（今年から活動に参加する学生）への配慮や指導も率先して行っておりました。昨年度の活動経験が確実に自らの力となっていました。

それから、今回は参加児童やその保護者を対象とした満足度アンケート調査を実施し、その結果を調査報告書としてまとめることが出来ました（調査概要につきましては本文中に掲載しておりますのでご参照ください）。その調査結果からも、保護者、児童ともに、本企画に大変満足してもらえたことがわかりました。なお、「最初から最後まで丁寧な対応だった」「大学生の皆さんが笑顔で優しく接してくれたので安心した」、貴重な機会・経験として、「自然に触れる機会」や「親が出来ることは限られているため今回の活動はいい機会だった」というような、率直な感想もいただくことができました。この調査結果は、来年度の活動の励みになることでしょう。

最後になりますが、昨年度に引き続きご後援頂きました塩竈市教育委員会様はじめ、ご支援いただきました協力団体・協力者の皆様、そして、配慮が必要とする子どもたちの参加に率先してご協力いただきました、けやき教室、仙台市ほほえみの会の皆様に、この場をお借りしまして心より感謝申し上げます。

野々島の取り組みを通して

菊 地 淳

昨年度、手探りで始めた野々島プロジェクトは、様々な反省点があったものの確かな手ごたえを得ることが出来ました。その成果は今年度の学生企画と組織運営の基盤となり、参加した学生たち個々の経験が今年度の活動に自信となって表れました。リーダーとしての主体的な取り組みもされ、新たに参加した学生へ対しても指導や助言という形で活かされていたと強く感じます。

今年度のスタートは、去年度の反省を踏まえて、地域との関係づくりから始まりました。まずは野々島でお世話になっている島民の皆さんをご招待して、前年度の活動報告をし、今年度の見通しをお話する「活動報告会」からスタートしたことは、地域連携型の事業を進める上で重要なポイントで、活動の内容をご理解いただけただけでなく、心の距離も縮める効果をもたらしたと思います。

7月に実施した、ラベンダー収穫祭では配慮が必要な子ども達の参加があり、座学で学んだことを実践する場になりました。自分たちの見立てていた以上に子どもへの負荷が生じていることになかなか気づけなかった場面や、分かった後の対応方法に迷うこともありました。その経験は次のプログラムで改善され、活動の内容や島内の移動といった中で、子ども達への配慮として活かせていたと感じました。

イベント当日にマリゲート塩釜で参加受けし、保護者から配慮すべき点などを聞き取りしてから子どもをお預かりし、野々島まで移動する定期船で送迎するのですが、昨年の反省にあった注意喚起の仕方がうまく出来ないといった点も、事前学習で学んだことを活かして、子ども達へ安全な移動を提供できていました。学生の格段の進歩はでたいへん評価できることのひとつだと思っ

ています。小さな問題点もありましたが、微調整で修正可能な範囲内だと思います。

次年度へ向けて検討すべき点では、天候への配慮があると思います。今年度も好天に恵まれて天候に起因する大きな障害は発生することなく行事を終えることが出来ました。現場での参加スタッフの目配りと気配りが効果を現していると考えられます。しかし天候の急変などへの対応を常に意識して今後の活動を継続していくことが肝要だと思います。強風や突風、直射日光、気温変化、にわか雨など島特有の気象についても、野々島の皆さんの経験や知恵に学び、万全を期して行く事が必要と考えます。

もう一つは、わずかな油断から発生するリスクへの対応です。リスク発生の原因は子どもにあるのではなく、自分たちの対応や体制にあるということです。今年度も子ども同士の小競り合いが発生しました。事故の防止と発生後の即時対応について、様々な場面を想定した学生間の共有の仕方やスタッフとの連携方法を事前に組んでおく必要性を強く感じた事例でした。

アンケート調査からは、参加者からも保護者からも高い評価を得ていることが分かりました。しかし、反省すべき点も指摘されています。4年生が示してくれた改善点についての対応策を具体化し、組み込んでいくことが継続する上で、大きな力となることです。

最後になりますが、野々島での実践的な野外活動経験が就活に役立ったという学生からの報告を受け、大変うれしく思いました。

今年度も子ども支援プロジェクトと野々島の事業に参加させていただきまことに、心から感謝申を申し上げます。ありがとうございました。

野々島の取り組みを通して

山口 政人

野々島ラベンダー収穫祭を終えて

活動を通して学生達が成長していく過程に関わらせて頂き多くのことを学ばせて貰いました。少し振り返りたいと思います。

ラベンダー収穫祭は今年初めて企画しました。スタッフ学生 27 名のうち 14 名が 2 年生であり、計画、立案から実践まで全てに関わりました。残りは後輩指導をしてくれた 3 年生と 4 年生です。収穫祭の日程 (7/12) が決定したのは 5 月でしたので、準備時間が少なく大変忙しかったのを覚えています。4 月に 2 年生になったばかりの 12 名が初めての企画に挑みます。何から始め、何が必要かを毎日考え、会議を重ねて作業を進めました。係が決まると各自やるべき作業が見えてきました。しかしメンバー全員が同じ意識ではありません。班長や責任感の強い学生は大変苦労しました。7 月には配慮が必要な子どもの接し方、野外活動の心得について専門講師をお招きし研修会に参加しました。前半の大きな反省点はリハーサルに欠席者がいたこと、それを補完する事前対策も不十分であったことです。各自の意識の問題と互いに注意し合える関係が未熟な状態でした。収穫祭当日は晴天に恵まれました。お陰様で大きな事故や怪我はありませんでしたが、反省点は子どもとの関わり方です。元気で活発な子どもに注意が集まり、ほかの子どもへの対応が手薄でした。外部講師の先生方のアドバイスによりその後は改善されました。ある子どもは緊張の様子が見られました。気持ちを他人に伝えることが苦手で、沢山の大人と長時間接した経験が少ないなどが考えられます。子どもをよく観察することが大事であることを学びまし

た。お別れの際お母様方から「このような学生さんに将来福祉や医療の現場で活躍してほしい」、「希望が持てます」、「今日は楽しませて貰えました」と言葉を頂き印象深いです。国見祭ではポプリ作り体験コーナーを企画しました。作り手の気持ちになり、どの工程に楽しみを取り入れるか、試作品を重ね最終的にデザインを 3 つに絞りました。学生達は早朝や放課後に集まり計 400 個準備しました。辛抱強く作ったことと思います。当日は子どもから高齢者まで多くの方が来場されました。収穫祭に参加してくれたご家族も来場され学生達は喜びを感じたことと思います。特に子どもにおいては「お母さん、おばあちゃんにポプリをプレゼントしよう」というテーマで気持ちを込めて作っていただきました。仕上げは飾り付けをしてラッピングするなど工夫を凝らし、楽しんでもらえたようです。

8 か月に及ぶ活動でした。価値観の異なる者同士で苦労もあったと思いますが、学生達は仲間と共に課題解決する達成感を味わったことと思います。子どもやお母様と接する中で自分達の役割や存在意義について大切な何かを感じ取ったことと思います。この活動を通して学生達が学び得たことが将来各分野において必ず役立つものと思われ、当プロジェクトは有意義であると実感しました。今年の課題を来年度の活動に活かしたいと思います。

最後にこの企画にご支援を頂きました塩竈市教育委員会の皆様、野々島自然塾塾長の津田様を始め、伊藤様、遠藤様、長谷川様、島民の皆様、専門指導を頂きました越路先生、菊地先生、児童の保護者の皆様には心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

学生企画の取り組みを通して

萩野寛雄

平成27年度の子ども支援プロジェクト学生企画事業は、無事に二年目を終えることが出来ました。東北福祉大学では野球やゴルフのようなスポーツの部活動も盛んですが、ボランティアなど地に根差して日常的に活動しているサークルもたくさんあります。中でも、子どもを対象とする活動は大人気です。この学生企画事業は、そうした日常的に子どもたちに接していて、年代的にも子どもたちに近く、彼らの気持ちを分かっている学生の感性を活かすべく、開始いたしました。またこれを一方的な支援に終わらせることなく、支援する学生の学びとすべく、事業プレゼンテーションによるコンペ方式を採用いたしました。学生は現地を調査し、それに基づいて自分たちの支援プログラムを企画・立案し、それを審査員である教員にプレゼンいたしました。そこで選ばれた団体には、支援事業に関わる経費が助成されます。団体の入れ替わりこそありましたが、26年度の5団体を上回る団体がこのコンペに臨み、見事に6団体が採用されました。内訳は、学生サークル・有志が3、ゼミが3でした。

今年度は昨年度の反省を踏まえて事業を早めに開始したため、9月から子どもたちを支援できました。昨年度からの継続でもあり、地域や保護者の方からも温かく受け入れて頂きました。また今年度からは、新たに2カ所の被災地も支援対象といたしました。一つは、今回の津波で人口の一割が犠牲となり、町内の住宅の七割が流出した女川町です。ここには、予防福祉健康増進室の社会福祉実学臨床教育で学ぶ学生を中心とする有志グループ

が参加し、「ダイナミック琉球」を活用した支援を行いました。もう一つは、仙台市若林区荒浜地区の集団移転先として災害復興公営住宅が建設され、新設された地下鉄東西線の終点ともなった若林区の荒井地区です。ここには震災後、新たなまちが建設されます。隣接する七郷地区とともに、ここでも学生が子どもたちを支援しました。新たな地域のまちづくりイベント「あらフェス」にも学生有志が参加し、ブースで子ども支援プロジェクトや東北福祉大学の各種地域貢献事業について紹介しました。

27年度は活動期間の延長と活動地域の拡大もあり、6団体の総計で昨年度の9回を大きく上回る26回の支援事業を実施することができました。その結果、本学学生の参加人数は330名、子どもや保護者の参加者605名を集めることができ、これは昨年度と比して約6倍にもなりました。成果の背景には活動期間の拡大やフィールドの拡大もありますが、昨年からの継続事業であったこと、昨年度の学生の熱心な取り組みが評価されたこと、学生が子ども目線にたって一生懸命企画を練ったことなどがあると思われます。一年間よく頑張った学生、支援事業への引率含めて事故防止に尽力くださった教職員、学生に学びの場を与えてくださった学校や地域の方々、そしてこの事業に参加して下さった子どもたちや保護者の方に改めて御礼申し上げます。

事業最終年度となる次年度は、夏休みにも子どもたちを支援できるように事業自体の早めの実施を試みるとともに、事故のない、満足度の高い支援を学生とともに行ってまいりたいと思います。

次年度の活動について

星山 幸男

1、基本方針

当初目標の最終年度である次年度は、今年度に引き続き、七ヶ浜町での活動、塩釜市野々島での活動、学生企画による事業の三つの柱を中心に、仙台市・女川町なども活動場所に加えて、プロジェクトを推進していく予定です。また、これまでの成果を広く社会に問い、私たちの課題を見据えた今後の方向性を探るために、シンポジュームの開催も検討していきます。

2、七ヶ浜町での活動

七ヶ浜の子どもたちの心や体が本来の姿に戻るには時間が必要で、子どもたちに寄り添いながら活動を継続していかなければなりません。そこで、今年度実施したサマースクールを、学校等と連携しながら地域の皆さんと一緒に推進していきます。今年度の反省を踏まえて改善を加え、学習支援・ものづくり教室・絵画や音楽などの表現活動・体験型科学実験を継続していく予定です。その際、町からの要望も受け止めて、地域にも配慮しながら活動を広げることに配慮していきたいと思っています。また、活動を支援してくれる学生を増やしていく努力も必要になると考えています。

3、塩釜市野々島での活動

「地域との共創」「社会で必要な力を養う」という二つの目標は継続します。自然体験活動の実施時期についても、子どもたちが参加しやすい時期を慎重に選んで、早い段階から準備を進めていく予定です。そして、安全性の確保をしつつ、ラベンダー畑づくりなどの継続的活動も着実に進めていきます。さらに野外活動や自然環境に

関する専門知識を有する学内・学外の人との連携をより深め、学生が主体的に関わりながら子どもたちの支援が行えるようなプログラムの一層の充実を図っていきます。

4、学生企画事業

参加を希望する学生団体の募集をさらに早く開始し、学生たちが夏休み前から現地で活動できるようなスケジュールで推進していきます。また、プロジェクト推進委員会が十分な準備がなされていると判断した場合には、今年度同様活動場所を七ヶ浜町に限定せず、仙台市他対象地域を広げていくことも予定しています。

活動推進に当たっては、今年度の反省を踏まえて進めます。広報の仕方を工夫してより多くの方に知っていただくように努めること、現地の方々との連携による活動を推進すること、団体を直接指導している本学教職員とプロジェクト委員会の連携を一層密にして学生の指導に万全を期することに配慮していきます。

5、可動式プラネタリウムの導入

今年度末に、本プロジェクト委員会で可動式プラネタリウムを購入しました。なかなか天文台に来られない子どもたちのために、現地に赴いて星空を眺めてもらう企画を推進したいと思います。当面は宮城県内になりますが、ご要望のある被災地域を中心に回ろうと考えています。そのために学生を指導して、説明員の養成も合わせて進めます。小さなドームですが、子どもたちと学生たちの星を通じた交流の輪が広がっていくことを期待しています。

協力団体・協力者一覧（敬称略、順不同）

七ヶ浜町教育委員会		飯塚直人	一般社団法人荒井タウンマネジメント
七ヶ浜町生涯学習センター	七ヶ浜国際村	越路明美	仙台市立長命ヶ丘小学校
七ヶ浜町立汐見小学校	七ヶ浜町立亦楽小学校	津田安廣	野々島自然塾
七ヶ浜町立松ヶ浜小学校	七ヶ浜町立七ヶ浜中学校	伊藤俊彦	野々島自然塾
七ヶ浜町立松ヶ浜中学校		鈴木正徳	野々島自然塾
		長谷川雅淑	野々島自然塾
塩竈市教育委員会		津田恵美子	野々島自然塾
塩竈市立第一小学校	塩竈市立第二小学校	鈴木虎男	塩釜市浦戸野々島区長
塩竈市立第三小学校	塩竈市立月見ヶ丘小学校	遠藤勝	塩釜市浦戸野々島
塩竈市立杉の入小学校	塩竈市立玉川小学校	佐藤吉輝	情報のあんこ
塩竈市立浦戸第二小学校		鈴木一誓	情報のあんこ
塩竈市適応指導教室 けやき教室		鈴木雅博	株式会社くろしお代表取締役
		山本和久	株式会社くろしお
仙台市立七郷中学校		千葉浩介	東北重機工事株式会社代表取締役
		高橋英夫	アクアミュージズ株式会社代表取締役
仙台市七郷市民センター		秋山治	アクアミュージズ株式会社
		高橋とみえ	仙台元気塾
仙台市七郷児童館		古川たつ子	仙台元気塾
		近藤洋子	NPO 法人健康応援・わくわく元気ネット
女川町健康福祉課		野島大源	社会福祉学科卒業生（2011年）
		中嶋嘉津子	仙台市ほほえみの会
女川町立第一保育所		岡山環	仙台市ほほえみの会
女川町立第四保育所			
女川町勤労青少年センター			
女川町まちなか交流館			
宮城県教育委員会			
塩竈市産業環境部浦戸振興課			
日本私立学校振興・共済事業団			

平成 27 年度参加学生一覧

I. セケ浜での活動

サマースクール・サマーフェスティバル (126 名)

青沼 智香	阿部 笑里	阿部 美妃	安藤加菜子	飯田 悠夏	池田 朱里	板垣 康平
伊藤 拓真	伊藤 光	今井 太誠	植松 祐翔	宇津木琴美	遠藤 朱菜	大槻慎太郎
奥 遥菜	奥山 ゆか	小野 茜	小野 里絵	小野寺碧美	笠原由加里	柏谷 啓友
糟谷 和	加藤さと子	狩野日菜子	神谷 香那	川合 理紗	川村なつみ	河村 裕晃
金野 千晶	熊谷 礼香	小関 美紅	小玉江李佳	小松 大貴	金 優貴子	西條 希望
齋藤 恵里	齋藤 瑞穂	佐々木香澄	佐々木瑞穂	佐々木美奈	佐々木 優	佐々木裕美子
佐々木 亮	佐藤 爽	佐藤 修哉	佐藤すみか	佐藤 夏香	佐藤 裕史	佐藤 双葉
佐藤 美幸	佐藤 利咲	志野さやか	島貫 詩偲	清水 省吾	白旗 聡	鈴木 歌歩
高橋 伽奈	高橋香奈恵	高橋 憲人	高橋 千明	高山 希周	武田さおり	武田 朋恵
千葉まりあ	筒井あいみ	鶴見 柚季	豊田 真由	中島 健太	西澤 祐太	西塚 智
新田結莉亜	沼澤 悠奈	畠山 航	服部 彩香	播磨 未帆	星 沙英莉	細川 浩太
堀川 彩佳	堀米 美春	本間 和海	町田 美桜	三浦 寛紀	南 瑞紀	宮城 夏実
村上さつき	村越 郁弥	森内 悠斗	山崎 義高	横山 愛未	吉泉 和	吉田 彩乃
吉田 彩織	吉田 知世	吉田 奈菜	我妻 黎香	渡邊 美紗	渡邊美奈穂	伊藤 壮汰
遠藤 華	境野 未央	玉手 利奈	工藤美紗樹	高橋 慶	今藤 誠啓	佐竹 望
佐藤なつみ	佐藤 沙紀	佐藤 成美	佐藤 優花	山田 梨沙	山本 理紗	鹿野 有沙
小野 瑞希	水沼 咲貴	菅原 志穂	成田 萌	太野 祐実	大泉 大洋	堤 理恵子
田幡 陽輔	藤森 理那	八木田 僚	飯塚かすみ	木村永倫子	嶺岸 美希	高倉 美祐

セケ浜町夏祭り支援活動 (12 名)

鹿野内隆人	遠藤 和志	太田安里紗	山田帆乃佳	齋 悠真	小野寺 萌	細川 凌
伊藤 愛菜	成田 萌	赤間聖玲栞	佐藤まりあ	吾妻 歩		

セケ浜町スポーツフェスタ (33 名)

佐藤 優太	石川 真也	内藤 健太	阿部 翔太	金子 堯宙	菅原 純平	磯谷 莉朋
工藤 早紀	長谷川智子	大波 淳宏	中津川遥也	武田 蒼	安島 広尚	鈴木 幸太
阿部 敦司	岩城 惣	齋藤めぐみ	石田 彩乃	伊藤 春香	石川 史也	大家 聡
北村 航太	小岩 来穂	大淵 健輔	丸亀 柁	橋本 稜平	小野寺昭太	三浦 卓士
小野 和哉	菊池 樹	宮村 航平	菅原 麻未	稲葉きらら		

II. 野々島プロジェクト (55 名)

木村 裕一	木村 有汰	佐藤 巧樹	岩渕 浩典	菅藤 朋奈	佐藤 誉	四戸 賢吾
高松 宏	宮下 佳奈	庄子 妙	鈴木 若菜	鈴木 早紀	丹野 優奈	福田 あみ
依田 愛梨	細谷真悠香	三田 萌実	阿部 久樹	大山 尚人	安斎 真人	大沢 拓実
河村 大輔	千田 彩香	馬場 洸太	岩見 佳奈	井上 智子	秋保 良喜	阿部 史華
石川 健太	遠藤 郁	佐藤 真由	菅原悠里江	松岡 杏奈	水戸 遥	若松 苑実
松浦 光琴	伊藤 綾香	山内 葵	長谷川明里	遠藤 由貴	中澤 夏緒	川村 友登
斉藤 愛香	佐藤 優樹	高内 純一	望月 麻未	佐々木康彦	佐々木捷吾	太田 雄大
佐々木 心	山内 陽	高橋 佑昌	大場千夏子	今野 七海	高泉 晴夏	

III. 学生企画事業

ことばの貯金箱 (23 名)

赤澤 活人	小保内真知	草野 菜実	熊谷 健吾	小林 茉央	杉本 安美	千葉 望花
藤泉 沙彩	戸野塚 彩	松本 康平	村上 笑	熊谷 佳奈	田中 千智	佐藤梓歩子
佐藤 由依	佐藤和佳奈	白石みおり	高橋 侑里	芳賀 健顕	早坂香保美	藤原 小町
村岡 夏実	吉田美菜子					

ASOBO (34名)

虻川 知美	阿部慎之介	池田 歩	小山 遥佳	小山 璃子	加藤 綾菜	菅野 早紀
菅野友香里	熊谷 侑華	小勝 智鶴	小林 桂	今 流星	佐藤 晃大	佐藤 汐莉
佐藤 恵子	菅原 空良	谷口 朋花	近森 佳太	千田 南	月田 楓	飛田かれん
富田 佳	夏井美沙希	畠山 美夏	早川 慶	人見 直樹	平野 裕司	古川 夏帆
松原すずの	宗形 結夏	湯浅 祥子	吉井 理沙	渡邊 真也	伊藤 春夫	

あそびの森 (22名)

熱海 颯	阿部 佑星	漆山 達也	小田嶋元輝	小野 真澄	小野寺冬馬	菊田 沙樹
腰山 未唯	小玉 萌	今野恵理香	佐藤 杏菜	佐藤しおり	佐藤夏奈子	佐藤 美咲
須藤 貴士	外館みなみ	二瓶 孝太	布川 諒	本田 沙希	松田亜佑莉	松本 侑
矢作 唯						

ジャグリングって何だろう (18名)

秋葉 靖之	江澤乃 杏	佐藤 史弥	野地香奈美	藤澤寿美佳	増田 勁樹	守谷 菜摘
阿久津飛翔	阿部 賢史	岩渕実可子	菊地 真希	久保 友希	齋藤 風花	清水 優花
菅原 千愛	村上陽伊呂	吉原 茉美	渡辺 夏子			

学習支援、ミニ運動会、七郷市民祭りの支援 (11名)

佐々木捷吾	山口 真次	平井 維子	藤井 秀平	伊藤 正	佐々木 駿	池田 瑞季
佐藤 佳代	山内 陽	江口 準	松林明日香			

よみがえる命ダイナミック琉球 in 女川 (23名)

荒 香里	泉田 知香	伊藤 綾香	梅津あやめ	大橋 瞳	小貫 崇	菊地 浩行
高原 侑里	小林茉莉花	佐藤 麻鈴	島村 瑞穂	菅原ひかり	菅原 瑠里	高橋 愛奈
武田 美優	館野なつみ	千葉愛理沙	東城 美樹	原田 賢悟	平田 祈子	三田村 和
村井 宣仁	渡辺なつみ					

IV. その他の事業

七郷中学校「防災マップづくり」支援活動 (14名)

佐藤 華香	米倉のぞみ	小原 真子	小滝 詩乃	阿部 純平	増田 勁樹	赤坂 祐哉
小野寺 黎	矢島 花恵	荒 みなみ	星 友理	佐藤 史弥	川村 憲史	鈴木 椎磨

荒井東復興街びらきイベント「あらフェス」参加者 (42名)

虻川 知美	阿部慎之介	小山 璃子	加藤 綾菜	菅野友香里	菅野 早妃	熊谷 ゆか
小勝 智鶴	小林 桂	今 流星	佐藤 恵子	菅原 空良	外山 郁	谷口 朋花
近森 佳太	千田 南	月田 楓	飛田かれん	富田 佳	平野 裕司	古川 夏帆
松原すずの	湯浅 翔子	吉井 理沙	渡邊 真也	阿部 佑星	横山 優子	外館みなみ
菊田 沙樹	今野恵理香	三澤 輝	小玉 萌	小山 莉穂	小田嶋元輝	小野寺冬馬
松田亜佑莉	成田 圭甫	西村 嘉文	大淵 健輔	熱海 颯	本田 沙希	戸田 玲子

延べ 413 名 順不同

資料

平成 26 ～ 27 年度 子ども支援プロジェクト決算 と 平成 28 年度 子ども支援プロジェクト予算

七ヶ浜町での活動

項目	平成 26 年度決算	平成 27 年度決算	平成 28 年度予算
備品（少額備品を含む）	603,374	682,992	70,000
印刷製本	540,000	0	0
旅費・交通費（貸切バス含む）	437,180	919,300	800,000
謝金	44,548	0	0
活動費	1,041,528	664,489	820,000
合計	2,666,630	2,266,781	1,690,000

野々島のプロジェクト

項目	平成 26 年度決算	平成 27 年度決算	平成 28 年度予算
備品（少額備品を含む）	1,261,824	1,874,878	180,000
印刷製本	0	0	0
旅費・交通費	400,760	380,880	400,000
謝金	97,710	44,548	70,000
活動費	1,155,467	1,410,841	1,330,000
合計	2,915,761	3,711,147	1,980,000

学生企画事業

項目	平成 26 年度決算	平成 27 年度決算	平成 28 年度予算
旅費・交通費（貸切バス含む）	280,508	331,130	300,000
活動費	675,509	1,375,247	1,400,000
備品（少額備品を含む）	72,566	0	0
合計	1,028,583	1,706,377	1,700,000

共通経費

項目	平成 26 年度決算	平成 27 年度決算	平成 28 年度予算
備品（少額備品を含む）	0	3,532,821	1,360,000
印刷製本	0	1,296,000	2,500,000
旅費・交通費	0	97,220	80,000
その他経費	0	626,513	342,167
シンポジウム	0	0	500,000
合計	0	5,552,554	4,782,167

総合計

	平成 26 年度決算	平成 26 年度決算	平成 28 年度予算
総合計	6,610,974	13,236,859	10,152,167

東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金規程

(目的)

第1条 この規定は、東北福祉大学子ども支援プロジェクト(以下支援プロジェクトとする)の資金面での円滑な業務遂行を図ることを目的とする。また、支援プロジェクトの活動面の円滑化については、平成26年5月1日施行の子ども支援プロジェクト推進委員会規程に従い進められる。

(位置付け、名称)

第2条 支援プロジェクトの活動資金は、株式会社ディスクガレージからの受配者指定寄付金を充てる。本学ではこの受配者指定寄付金を、東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金(以下基金とする)として受け入れ、取崩して使用する。

(使途の範囲)

第3条 基金から支出する経費の範囲は、支援プロジェクトに直接必要な人件費・教育研究経費・施設設備とし、管理経費への支出は行わない。なお、当該基金により購入した施設設備は、学校法人の所有に属する。

(基金の管理金融機関、口座名義、貸借対照表上の取り扱い)

第4条 基金は七十七銀行八幡町支店に普通預金口座を作成して管理する。口座名義は東北福祉大学子ども支援プロジェクト基金とする。なお、当該口座は、流動資産の現金預金として取り扱う。

(基金の使用)

第5条 基金の使用に関する事務処理は、本学経理規程及び旅費規程等に従って行う。

附則 この規定は平成27年1月20日より施行する。

平成 27 年度 東北福祉大学 子ども支援プロジェクト活動報告書

編集・発行 東北福祉大学 子ども支援プロジェクト推進委員会

〒 981-8522 宮城県仙台市青葉区国見 1 丁目 8 番 1 号

事務局 東北福祉大学 社会貢献・地域連携センター 生涯学習支援室

TEL：022-380-1067

ホームページ：<http://www.tfu.ac.jp/index.html>